
空想大好き具現士様！！

ドM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空想大好き具現士様！！

【Nコード】

N9809W

【作者名】

ドM

【あらすじ】

平凡な生活を送っていた空想、妄想大好き丘崎丈人君高校2年生！ある日、頭の中の何かが突然現れ異世界へ行き、ある国を助けろとの事。そのために与えられた能力を駆使し国、人々を救えることができるのか！？戦いあり、笑いありその他諸々ありのファンタジー！！

全面的に訂正中！

0 話：旅立ち（前書き）

お願い！

この作品は素人が書いています。

温かい目で見てあげられる方のみお読みください^^
尚、中傷、荒らしなどはおやめ下さい！！

0 話：旅立ち

空想

あり得ない事を想像すること・・・

妄想

根拠もなく、あり得るはずもないことに確信や信念を持ち思いこむこと・・・

夢想

夢など希望を思い描くこと・・・

全てに共通することそれは想像・・・

リリリリリリ・・・ガシャ！

「ふわぁ～・・・」

ただいま8月14日AM6：30です。

俺、丈人^{たけと}は朝から空想に浸っている。

え？妄想じゃないのかって？否定はしないさ。

だって楽しいじゃんか？こつちの世界では、モテないんだから！活

躍できるのは想像の中だけだよ。

ああでも、今日は詩音が居ないから平和な朝になって嬉しいな。

詩音と言うのは俺の妹でいつも朝っぱらから人の部屋に入って物色しその後、俺を殴り殺s・・・起こそうとしてくる。

正直な話そんな妹が怖いです、はい。

・・・と言うか、俺は誰に話しかけてるんだ？

あああ！！

なんでlet's想像していたのに詩音の事思い出したんだろ！

「どうしてでしょうかね。」

何かが俺の頭の中を過ぎった。

「誰だ！！」

誰もいない空間へと叫んでいる。

しかし、何も返事は返ってきはしなかった。

もういい・・・ご飯食べよ・・・

少々返事を期待した俺は、諦め飯を食うために下へと降りた。

「ムグムグ・・・ンン・・・アーン・・・ングング」

誰もいない質素な部屋で、一人黙々と食事を取り始める。

朝ごはんはいつもは詩音が作っているけど、昨日から合宿で家を出ている。

だから居ない時は、残り物を温めて食べているんだ。

え？自分で作らないのかって？いや、作っても良いんだけど、使えないから。

一時期、料理にハマってキッチン独占し過ぎて注意されて以来やっていない。と言うか、やらせてくれない。
酷いよな？

〈回想〉

詩「兄貴！今日は俺が作るよ！」

丈「此処は俺の領域だ。入ることは許さん！」

詩「兄貴占領するのはいけねえんだぞ！」

丈「黙れ！誰になんと言われようと・・・」

〈回想終了〉

あの時は皆必死に止めてきたな・・・何でだろ？

あ、そうだ。家族構成を紹介しておこう。

俺の家族は、父、母、妹、兄貴、僕の五人家族だ。

「お兄様がいらしたんですね。」

またあの変な感覚が過ぎる。

あまり気にしないようにしよう。

父さんは海外出張でなかなか会えないし、母さんは夜遅くまで仕事なので普段は俺と兄貴と詩音だけしか家に居ないわけで。

なんと言うか、2人がいつ襲ってくるか分らなくて怖いです。

ん？兄貴もかって？そうなんだよ。なんつーか過保護？ってやつかな？

例えば買い物行って迷子になった時、迷子センター行って俺を探すように店員さんに脅したり、

中学の時、高校生に絡まれてボコボコにされそんな時助けに来てフ

ルボツコにしたりしてた・・・
その時、「何ですぐ来てくれたの」って聞いたら「尾行してた」って言ってたし。

あの時はさすがに引いたよ。

その兄貴は、ずっと寝てるし。まあいつもの事だけど。

え？何そのリア充設定だって？

知らないよ・・・

「それは素晴らしいのでは？」「消える・・・」

心なしかドンドン、いらついてきた・・・どうしたらいい？

「そろそろ行こうかな。」

食事を済まし身支度をし、靴を履き、ドアを開けた・・・

「オッハヨ〜！丈・・・」

バン！

が、俺は音速のスピードでドアを閉めた。

なんでかって？答えは簡単さ。

包帯で顔をグルグル巻きにされた人が立ってんだよ！？

怖いじゃん！皆に問おう！！

変態がドアの向こう側に立っている！どうする？

俺だったら絶対開けねえよ！！そんな勇氣俺には無い！！

「あれえ？目疲れてるのかな？」

そうだ・・・幻覚だ。そうに決まっている。

じゃなかったら、あんなことになる訳ないもんな。そうだよ！こう

いう時は今日の晩御飯のことを考えよう。
あーあー今日の晩御飯なんだろうーなー・・・あ、詩音帰ってこないんだっけ。

今日も残りものか・・・

ドンドン！

チャイムがあるのにドアを叩く。

幻覚じゃない！？

怖えよ・・・

「おーい！俺だよー！」

「誰だよ！何か？俺俺詐欺か？古いぞ。」

「俺だつて！要だつてば！つてか俺俺詐欺つてなんだよー！」

「え？要？」

「そうだよー！分かったら早く開けてくれよー！」

ツチ！五月蠅いな・・・

要とは、小4の頃からの友達だ。

俺の通ってる小学校は一年ごとにクラスがかわる仕組みで、皆がまだ馴染めないクラスで自己紹介をする事になったんだ。

要の時の第一声で僕は要を知った。

この言葉のおかげですぐクラスの人達と仲良くなれたんだ・・・
そのくらいとても心に残る一言だったから。

『佐藤要だ！！皆消えてしまえ！』

こうだった。

え？これのどこが仲良くなれる言葉だつて？

いや、仲良くつてか一致団結？うん、鋭い人はわかっただろうけど、

クラス全員で要をボコったんだ。
そりゃそうだよ。いきなり消えるだからね！それから一週間誰も
要とは口聞かなかったね。うん。

・・・と言っかなんで包帯巻いてんだよ・・・？
「ん？包帯はな、昨日女子にボッコボコにされた！それより俺お・
・・・」

流石親友だ。通じ合ってたんだな！
詐欺師扱いして悪かった。

でもなんで女の子にボッコボコにされてるんだ。

「そんなことより学校行かね？それと俺お・・・」

ああ、そうだった。

・・・って何で考えが丸分かりなんだ！
あまり考え込んではいけない気が・・・

「・・・行こうか」

「おう！んでさ！結局お・・・・」

そう言っただけは、すぐドアを開けて学校に登校する事にした。
ん？なんか要が喋ってる？知らね。

登校中、ずっと要に女の子の話ばかりされた。

あ、いつもこんなだから、女の子にボッコボコにされるんじゃ・・・
・

しかも後ろの方に俺なんたらと言ってるし・・・壊れたのか？

そんな事を思いながら登校した。

学校に着いて俺は直ぐに空想に浸る。
これが俺の日課なのだ。

先生が来るまで30分以上ある。

早く来過ぎだつて？

そんな事は無いさ。

「おーい、丈人ー」

いや、ちゃんと授業受けてますよ？

先生に授業態度は良いって言われるし。

まあ、ノートとかに想像した絵とか描いてるけど・・・

「おいつてばー」

「凄い想像ry」「うるさい！」

「ひい！」

隣を見ると、要がいた。

「あつ要か、何かあった？」

要くーん。居たなら挨拶してよー。

「お前だよー！」

「え？」なにが？

「どうしたんだよー！いきなり大声だして！」

あ！やってしまった！くっそ！

「すみません。」

頭の中の奴が素直に謝ってくる。

だったら、最初から出ないでくれ・・・

「いや何でもないから気にしないでくれ」

俺は要に謝罪をする。

「あ・・・ああ・・・そうか、なら良いんだが・・・」

「ごめんな？」

ホントごめんな？

ってか何で頭ん中にいんだよ？

「昼休みにこの階のトイレの個室に来てください。」

あ、ごめん俺、そんな趣味ないから。

「え？なんですか？」

え？違うの？

「お願いします。来てください。」

・・・分かったよ。分かったからさっさと行け！

「お願いします。」

すると、重かった頭から何かがスウッと抜けた感じが残った。ふう、行ったか。でもなんであんなのが居るか気になるな。

昼休みに行ってみようかな

「来る気無かったんですか！？」

なんでまだ居んだよ！？

キンコーンカーンコーン

四時間目が終了！！さあ！いざ作者の元へ！！

「丈人ゝ飯食おうぜ」

要が弁当を持って近づいて来る。

「ごめん、一人で食ってくれ！」

「ひ、ひでえ！」

すまん要。俺には行くべき場所がある！！

要が項垂れたのが見えた。うなだ

あいつに言われた通り

今、トイレの個室にいます。

正直臭いです。

「あ！来てくれましたか！」

あんたが呼んだんだろうが！

何だよ、ったく！

まあいい、さあお前が居る理由を教えてくれ。

早くしないと、飯食う時間がなくなっちゃうし、ここ臭いし。

「そう焦らないでください。私にも時間が無いんです。」

すると、一息つくと少し、暗い感じに頭を支配される。

「いいですか？驚かれないで聞いてください。」

ん？そんなにやばいのか？

ま、まさか・・・死ねたのか！？だとしたら冗談じゃねえぞ！？

「今から君には、此処とは違う世界に行ってもらいます。あなたを異世界に送る！これが私の居る理由です。」

へ？な・・・なんですとオオオオオ！？

「異世界に行ったらある国を救って欲しいのです！そのまま行っても、命に危険が訪れるかもですので、この二刀と・・・」

ちよっと待て！なんで俺が異世界に行かないと行けないんだ！

冗談じゃないぞ！こんな急展開認められるか！！

「理由は後です！それと、あなたに具現能力を授けました！」

奴がそう言った後、足の太腿辺りが青緑色の綺麗な粒子になって消えていつてる事に気がついた。

「か、体が消え掛かつてる！？ぐ、具現能力ってなんだよ！」

精一杯声に出して叫んだ。

「ちっ！始まりましたか！いいですか！？具現能力は想像した物をその場に出せる能力！言わば最強の能力です！ただし、自分が知っているものだけ！あっちに行けば詳しい人がいるからその人たちに聞いてください。それと！具現能力はそれは私欲の為だけじゃなくて、皆の為に振る舞うんです！いいですね！？」

それはそれは凄い能力ですね………感心している場合じゃない。

おい！あんた！！その国とやらを救えば戻ってこれるんだよね！？

「勿論。」

首まで消え掛かってきた……

分かった！その国俺の力で守ってくるよ！！

「それが聞けて安心しました。じゃあ、あっちの世界を……」

この言葉を最後に

体全体が今まで居た俺の世界から消え俺の意識が途絶えた……

0 話：旅立ち（後書き）

指摘がありましたので、大雑把に変えてみようかと思います。

1話：具現能力発動！！（前書き）

急展開すぎですね！
すいません。

1話：具現能力発動！！

「ん・ううん・はっ！」

あれ？此処は！？

俺は倒れていた体を起こし辺りを見回した。

目の前に広がった景色は青天の空、そして何処を見回しても何も無い緑の平行線。

この時点でもう前の世界ではない事が分かる。こんな景色見たことないし！

俺の隣にあの二刀がある・・・

確か、奴に・・・

「そうだ！あいつが言ってた国つてのを探さなきゃ！」
けどどうやって？知り合いがいるわけがないし。

「・・・そうだ！なんか持ってないかな？」

ズボンのポケットに手を伸ばそうとし、気がついた。

「服が、全然違え！！」

そう。服が制服じゃなかった。

なんかこう、よくいる魔道師みたいな服装だった。

下には学校の制服だし、奴がくれたのか？

だとしたら有難いわ

あの制服便所の臭いが付きまくったと思うからなあ。

すると

「おい！その貴様！何者だ！まさか、オルティガのものではないだろうな！」

などと行き成り後ろから怒鳴り散らされた声が聞こえる。

「！？」

なんだ？

後ろから声が聞こえたので振り返ると俺より少し背が低く、両手を

握り拳を作り構えている女の子がいた。

なんだ女の子か、にしてもびっくりしたー！

いきなり叫ぶんだもんな！

ちびるところだったぜ。

しかも何気に戦闘フォーム取ってるし！

てか日本語話せるんだな。

てつきり、わけわからない言葉を発するのかと・・・アニヨハセヨとか？

「・・・おい、その刀、何処で手に入れた？」

俺の隣にある刀を指差す。

ん？なんだ？刀？ああ、この二刀のことか？

なんていえば良い？

奴・・・と言っても話が通用しないだろうしな・・・というかなぜそれを今聞く？

「これは知り合いからのもらいもんだ！それで「着いて来てもらおうか」

え？着いてこい？あ、お誘いかな？嬉しいけどねえ可愛いし・・・

もしや俺ってモテる？いや参ったなああ、でもそれどころじゃ無いし・・・残念だけど、ここは紳士的に断りしよう。

・・・紳士的につてどうやるんだ？英語で紳士ってジェントルマンだっけ？まあいいや。よし！やるぞ！

「お誘いはとてもありがたいですが、今それどころじゃあ「ガチャ」

・・・へ？て、手錠！？に似てるなまさかこの子、この世界のお巡りさん！？

馬鹿な妄想だったことに今更気が付いていた。

ああ、捕まっちゃうのね・・・俺悪い事したかな？

あ、もしかして紳士的じゃなかった？

やっぱりね！薄々気づいていたよ。

だからって、捕まえること無いじゃん？なんて説明する気！？

あんたまさか、「こいつが、私の誘いを断ったため捕まえました」

何て言うのか？

横暴だろ！そんなんだから世の中が荒^{すさ}んで・・・

「何を訳の分らないことを言っているんだ？私は貴様を窃盗犯として国に突き出すだけだ。よかったな、直ぐに楽に死ねるぞ。」

嫌みつたらしい言葉遣いで言い放つ。

は？窃盗犯？死ねる？DED？

「はああああ！？何言つてんだよ！窃盗って、なに盗んだってんだよ！」

「はあ・・・その二刀だ」

そこ！

呆れ気味に溜め息つくな！

ま、妄想っぽい事したのは謝るけどさ・・・そんなジト目で見た後溜め息付かなくなつて良いじゃ無いか！

ってかこの刀を盗んだって？

「君、俺の話きいてた？これは「この二刀は我が国、エルストリアを救いになった具現士様の愛刀だ。それを貴様が奪つたんだ！」

ちゃんと人の話最後まで聞いて！！

ってかこの二刀、そんな大切な物だつたんだ！

知らなかった。奴め、先に言つてよ！

なんか貰つて、やった！かつこいいな！とか思ったじゃんか。

全く奴め・・・今度会つたら叩き潰す！

・・・いつ会えんだろ。

しかし・・・この女の子なんか必死だし・・・なんか訳ありかな？
あゝあ、そうになると絶対引かない気だよ。多分、あれだ、あれ「早く犯人を捕まえないと私、王様に国を追い出される！」てきなやつだよ。きつと。

だとしたらどーしよ？何か女の子が了承して、俺も国に行って王様に会って今の俺の現状を報告して保護してもらわなければ・・・って、方法一つだな・・・

その前に、色々聞いとかなきゃ

「分かった、着いて行くよ。ただ聞きたい事がある。」

「そうか、やっと観念したんだな。何でも聞くが良い。」

女の子は腕を組み、威張るように胸を張った。

いわゆる所謂上から目線だ。

くそ！何かイライラする！！

抑える抑えるんだ丈人。相手は女の子だ。穏便にいこう。うん。

「一つ目、その具現士様はもう居ないのか？」

そう聞いた瞬間女の子の顔が暗くなった・・・あれ？地雷踏んだ？

「・・・ああ、数十年前にな、病死だったらしい。」

何か悪いな・・・気まずい感じだ・・・

まあ、それは置いといて。

「じゃあ二つ目、今君の国に具現士様はどれくらい居る？」

女の子は途端に目つきが鋭くなり・・・

「っ！・・・何故そんな事を聞く！！」

怒鳴った。

うわー！！びっくりした。叫ばないでよ。

「良いだろ？どうせ死ぬか、地下牢行きだろ？」

まあ、そうはさせないけど、どうすればいいかな・・・？

「まあ良いだろう・・・0だ」

え？0人？何か、気まずい事聞いちゃったのかな？誤った方が良いのかな？

「あ・・・ごめん」

「謝るな！余計腹が立つ！」

イラッ！腹立つなこの子。謝ったのに、そんな言い方無いじゃん。健康メンタル弱いんだぞ俺！

「チッ！三つ目、国王様に会わせるのか？」

「当たり前だ、報告及び罪者からの詫びの一言をしなければいけないのでな。因みに、我が国の王は王様では無く女王様だ。」

何？罪者って！俺か？俺なのか！？しなければって！するの俺じゃね？ってか女王様かよ！

国を治めているのは大概王様だと思っていたが違ったようだね。

・・・なんかツツコミすぎじゃね？

「はいよ。これで質問お終い！ありがとな。」

お礼は大切にな？みんな！

「ふん！敵国の者でも礼儀ぐらいはあるのだな。」

おい、「ふん！」ってなんだ？あ、分かった！怒ってんだろ？いい加減機嫌直せよ！

ん？あれ？今、敵国って言わなかったか？

「お、おい。俺は「さ、さあ！グズグズするな！行くぞ？」

俺の話を遮りそのまま命令をする。

話聞けよ！あんたお母さんにどんな教育受けたの？

後で女王様のいる前で暴露してやる。

あれ？なんか首に違和感があるぞ？

「ぐえつ。おい！え、襟元引つ張るな！ぐ、ぐるじい！」

息が、息が出来ない！
死ぬ死ぬ！

その後、１時間以上襟元を引っ張られたまま歩いてた。

やばいぞ？もうダメだ・・・
死んでしまう！

「さあ、着いたぞ！此処がエルストリアだ」
やっと開放される！

自由だ。俺はもう襟元呪縛から解き放たれるんだ！・・・ん？でっかい門だな～…っっておお～なんか開いて来たぞ。誰が開けてんだろ？・・・さて、どんな国なのかな～？

・・・え？・・・此処が？

門を通った先に見た光景は、とても悲惨なものだった。奥の城から半分無傷なのだが、途中から民家や、建物が俺の目の前に立っている所まで全壊していた。所々から黒く細い煙が天に上っている。

「嘘・・・だろ・・・？」

はつきり言ってこんなのが国とは言い難い^{がた}。

「何を驚いている？ やつたのは貴様の国だろ？」

俺の国？ 敵国の事か？ 確かオルティガだったけな？

勘違いしたまんまだな？

さっき言いそびれたし・・・

ああ！ クソ！ 早く誤解を解かないと！

しかし変な子に捕まってしまったな。 はあ、可愛いんだけどな・・・

俺はこいつ達とは違う世界から来た事は女王様と話すまで、黙ってなければ・・・そして、疑いが晴れたらこの民家や建物を直さなくちゃ。

具現能力は、そういう事の為にあるんだよな？ 奴よ！
その前に理由考えとかねえとな。

「よし！ 女王様に会いに行くぞ！」

あれ？ またなんか首に違和感が・・・まさか！

「だから！ 襟元引っ張るなって！ 痛い痛い！」

そんなことはお構いなしかのうに襟元を引っ張り歩き出す女の子。
好きなのかな？ 襟元を引っ張るの

それより女王様どんな人だろ？

美人さんなのかな？

10分歩いて・・・って、王城遠いでしょ！

いや、歩いているっちゃ歩いているんだが、襟元を引っ張られたまま後ろ歩きで歩いている。

半分以上まで来たが、本当にひどい現場だった。 女の子曰く死者は少人数で済んだものの、重傷者や家を失くした人、親をなくした子供、痩せ細った人が沢山いるらしい。

俺も見たが、あんな現場を初めてみた。

人々は生気を感じず子供は泣きわめき、痩せ細った人は倒れていた。失礼なことに俺は吐き気がしてしまった。襟元＋（プラス）で。

しかし、人々はこの女の子を見た途端笑顔になった。笑顔といっても生気感じられない精一杯の笑顔なので見ていた俺はその笑顔がとても痛々しく思えた。

女の子も人々に歩み寄り、笑顔を振りまいた。素直に、可愛いと思っただ。

うん、女の子は笑顔が一番！！

3分後、王城に着いた。

でっけえ・・・初めて見た。すっげえ。

「ぼさつとするな！入るぞ！」

「へいへー・・・ぐふう！」

こいつ、また襟元引つ張つてやがる。

全く勘弁してくれよ・・・

ドシャーズザザサー！

女の子が俺を床に叩きつけて俺と床がこすり合わさる音だ。

なんで冷静なんだ？いや、熱い！顎が熱い！

「あいででで！痛いわ！」

「女王様！！窃盗犯を捕らえました！」

「話聞いてよ？」

思いつきり無視したぞ？

イラつく。

しかしそんなイライラはすぐに吹っ飛んだ。

「ありがとうございます」

この一言でだ。
笑顔めっちゃ綺麗！

何と美しい声、顔、スタイルでしょう！
こんな美人さん見た事ないぞ！

これが女王様かあゝ
ヤバイ！めっちゃ綺麗！この女の子は可愛いつて感じだけど、女王様は綺麗な感じだ。
綺麗しか出て来ない。
悔しい。

「おい！貴様！女王様の前だぞ！頭をs「良いのです、この方は・・・」

具現士様なのですから」

「「えっ？」」

俺と女の子は、驚いていた。
周りの人も驚いた顔つきだ。
だってまだ俺の正体を言っていないのに具現士だと分かれたからだ。

「な、何を仰っているのですか女王様！此奴が具現士様だと仰るの

ですか！」

明らかに動揺している。
言い方酷っ！！

「そう言っております。」

女王様は笑顔で答えた。

「流石女王様だ。分かっていらっしやる。」

流石だよ。話が早い。

「では具現士様、なぜこのような事に？」

「それは「それは此奴がこの二刀を奪ったからであります！」

「そうなのですか？」

途端にションボリと聞いて来た激しい罪悪感に襲われる。

「ち、違います！はぁ・・・良いですか女王様、俺は・・・違う世界から来たんですよ。」

[illegible]

周りの人等が驚いている。

無理もない、俺もそう言われたら驚くに決まっている。

その後30分此処にきた経緯と他の事情を話し、本題に入った。

「簡単に言うと、この国を救いに来た……と？」

「はい！」

そう奴が言つてたもん。まあ、この国かわからないけど……

女王様はとても明るい顔になり俺を見つめてくる。

「ばっ、馬鹿を言っな！貴様にこの国を救うだど！？無理に決まっているだろう！」

「あら？そんな事ないですよね？」

「だいたい！此奴が具現士様かも分からないでしょう！」

ああ、言ってる。

作者から具現能力を与えて貰ったが、実際俺も出し方や使い方が分からない。

「じゃあ、なにか具現化してもらいましょうか。」
ごもつともな意見。

けど、女王様、やめてください。そんな笑顔で頼まれたらやるしかないですって！！

「い、いいだろう。やってやるがもつと広い所でやりたい。良いですよね？」

おい俺！体が震えているぞ？いや、こ、これはむむむ武者震いだ！！そうだ武者震いだ！！

「分かりました。では、第四訓練所でやりましょう。今の状況では、あそこが一番広いでしょう。」

「かしこまりました！」

さて、第四訓練所に着いんだが、広っ！！
東京ドム以上じゃね？何個分？何個分だ？

女王様、今の状況では、第四訓練所が一番広いつて言ってたけど、
此処でこのぐらいの大きさって事は、今はまだ使えない他の所はも
っと広いのか？
ひええ・・・

第四訓練所の中は天井がなく、青空が広がり、地面は、一面土、砂
が敷き詰められどつかのローマの闘技場みたいな所だ。
まあ、広さが尋常じゃないけど。

「さあ、着きましたから何を具現化してもらいましょうか。」

女王様不気味な笑顔だ・・・

怖いよ、ううっ

自覚しよう。震えは武者震いなどではなく、ただのビビリの震え
だったと。

「そうだ、誰か具現化して欲しい物を言ってください。」

oooooooooooo女王様！無理だつて！

なに！？女王様だからってSなの！？この鬼！！

「はい！私に言わせて下さい！」

言いだしたのはあの女の子だった。

おい！さっきからこの子が居るな！誰なんだ！？

「分かりました、では何か言ってください。」

はあ、腹括るか。

んで？お客さん、なにが欲しいんですか？

「・・・ランス」

へ？

「ランス？ランスってあのモン ンに出てくるランスか？」

あ、知らないか。

「ま、まあ多分そのランスだ。」

「さあ、具現士様。具現化して下さい。」

やっべえよ。めっちゃ笑顔だよ！女の子まで、目輝かせてるよ！
失敗できねえぞ？これ。

てか何で女の子まで真剣な眼差しを俺に向けるんだ？

あ、そういえば奴・・・「具現能力は想像した物をその場に出せる
」って言ってなかったか？

そうだ！想像するんだ！

俺には、テイ ズや、アニメで培った想像力があるじゃないか
集中しろ。

精神を研ぎ澄ませるんだ。あ、格好つけたかっただけです。すい
ません。

よし！いくぞ！

「すう・・・」

俺は大きく息を吸い込んだ後頭の中にランスを思い浮かべる
大きさ、長さ、その他細かい事を想像しながら・・・

30秒後

「はっ！」

おお・・・何か前に光の球見たいのあるぞ！

なんか駄目元でやってみたけど上手くいったみたいだ。

あ、いかにいかに。集中集中！

なんとか安定した光の球を女の子の手のほうへと送る。

「ほら、ちゃんと受け取れ！」

パツと光は女の子の手の中から消えた、その代わり現れたのは、俺が想像したランスだった。

ランスの胴体は、白をベースとして下の方が少し青色になっていて、周りについてる複雑に入り組んでいる模様は金色で仕上がっている。

「え、あ？・・・え？」

おや？驚いているのか？

どうだ参ったか！

自分でもとても驚いている。

「まあ、何と立派なランスでしょう？」

女王様も褒めてくれている。

女王様・・・有難いけど・・・なんかエロく聞こえますよ？

ふう、まあこんな感じで具現化すればいいんだな？

「これで国の再建する許可を与えてくれますね！？」

よし、もう具現化見せたいし良いよな？

あれ？さっきの女の子が居ないけど、どこいったかな？

「いえ、まだそれは成りません。それでは本題です。この本題が出来れば、許可します。」

女王様は又しても不気味な笑顔を浮かべた。

えっ？何すんの？

「家を建てて下さい。それも人がちゃんと住めるくらいの。」
その笑顔やめて？眩しすぎる！

しかも家を建てるだど？無理だつて。やっぱこの人Sだ。今なら確信が持てる！！

しかし、早くしなければこの国は、潰されてしまふ・・・それだけは避けたい。

仕方ない・・・

「・・・分かりました、やってみます！」

「はい。任せますよ。」

どんな家にしようかな？

えっと、まあ簡単に俺ん家で考えるか。

中はソファーとか、テーブル位でいいか！

大きさは確か・・・

見えた！

「ふっ！」

よし！あと少しだ。

「皆さん！早くどいて！」

潰れちゃうつて。

「早くどけると具現士様が仰っているぞ！」

凄い筋肉のおじさんが、他の兵士たちを誘導している。

おお！！ありがたい。

・・・来た！！

「とりゃ！」

ズドッスーン！！

ものすごい音が第四訓練場に響き渡った。

『うわー!!』

うわー！びっくりした！体が浮いたよ。

どうだ？ちゃんとうまくいったか？

「これは・・・見た事の無い家ですね」

そう言う女王様の視線の向かう先には見たことのある家があった。

おお。俺ん家だ！ちゃんと出来てたよ。よかったー！！

「あ、俺ん家です！他に思い当たらなかったのぞ！」

見た事無いつて事はこういう家が無いのかな？

「そうでしたか。それでは、中に入りましょうか。」

おっと！説明しなきゃ

「入る時には靴を脱いで下さいね？それが俺の国のしきたりですから！」

『そうなんですか？』

みんな驚いてるし。

「はい。あ、ドアを開けてからタイルと木の床の間に段差がありますが、タイルの所で靴を脱いで木の床に上がって下さい。少々狭くて面倒ですが、よろしく願います。」

「分かりました。不思議なしきたりですね。とても興味があります。」

「まあ、お手本を見せますからみてください。」

だったら、説明しなくても良くない？って感じだが、無視しよう。

「よっと！まあこんな感じです」

うわぁー懐かしいな。中そのまんまじゃん！

「じゃあ私から。」

女王様、足元に気を付けてね？

それから一時間ずっと女王様と、そのお供様達は俺の家を物色し俺は、女王様やお供の皆さんが疑問に思った事を分かりやすく説明していた：

分かったことは

人に自分の家を見られるとなんか恥ずかしい／／／

というか、あの女の子はどこに行ったんだろう？

1話：具現能力発動！！（後書き）

読んで頂き有難う御座いました！！

誤字脱字、アドバイス、感想も書いて貰えると嬉しいです^^

2話：復興開始！！（前書き）

新キャラ？を出してみました！

2話：復興開始！！

その後、王の間では・・・

「では！俺にも国の復興許可を！」

俺は、女王様に復興を手伝わせてくれるよう頼んでいた。

「ええ、与えます！皆と協力して国を復興させるという役目を果たして下さい！」

その言葉を聞いた瞬間、

『やったー！！』『よっしゃー！』『やるぞー！』
などと、皆意気込みながら
兵士等と俺は、歓喜に浸っていた。

自分で言うのも恥ずかしいが兵士達も俺の参加を望んでいたようだ。

「皆さん！頑張りましょう！」
『おおー！！！！』

皆の思いは
すぐに一つになった・・・

トントン・・・・・・・・・・

「おい、その木材取ってくれ！」

「任せとけ！」

こんなやり取りが永遠に続いていたおかげで結構建物が直ってきた。といってもまだまだだが。

その頃、俺はさっきの女の子と色々と話している。

早く建物を直す作業をしたいんだけどな？

「最初、疑って悪かったな。それとこれ・・・」
そんな事か。よかったのに。

そう言つて女の子が渡して来たのが俺が造つたランスだった。

・・・あげたんつもりだったけどな？

「良いよ！やる！」

「しかし「良いんだって！俺が初めて造つた物だ！記念に取つとけ！」

「あ・・・有難う。・・・ん？今なんて言つた？初めて造つた？どういふ事だ？」

ジト目で見てくる女の子。

「ああ。俺が異世界から来たのは知ってるよな？あれから初めて造つたのがそれ。それまでこの能力の使い方が分からなかった。あ、いらなかつたら捨てて良いぞ？」

はあ、可哀想な俺のランス・・・あ、下ネタじゃないぞ？

「い、いや！そんな事はない！寧ろありがたい！・・・そうか初め

てか・・・ハッ！！そ、そうだ！ま、まだ名を名乗っていなかったな？私は、リク。リク・アナステシアだ。リクと呼んでくれ。この国の騎士団隊長だ。よろしく。」

ちよつと焦り気味だが自己紹介をしたリクと言う女の子。

なんで焦り気味なんだ？・・・そんな事はどうでもいいんだけど・・・

そんなことより今何て言っただ？騎士団隊長・・・？

「うええええええええええ！？騎士団隊長さんだったの？まじかよ！俺てつきり、お巡りさんかと。よく見れば、そんな感じがする。」

「何を言ってるか分からないが、なぜかイラつく・・・ふん！まあいい、貴様の名は？」

あ、そういえば俺の名前言ってなかったっけ？

「俺は、丘崎 丈人、タケト・オカザキな？タケトって呼んでくれ。さつき見たとおり、一応具現士みたいだ。よろしく。」

「うん。よろしく！」

おっ。笑顔は可愛いなー

「さっ！早く作業に戻ろうぜ？サボってばっかじゃ皆に悪いよ。」

「あ、ああ。すまんがこれから用事があるのでな、私は抜けさせもらう。」

あらー残念。もう少し親睦を深めようと思ったのに残念だわー

「そうか・・・まっ、頑張つて来いよ！」

「ああ！ありがとう！じゃ・・・」

そう言ったりクさんは走って行った。ん？呼び捨てじゃないのかっ

て？

ほら最初っから呼び捨てだと抵抗あるじゃないか？

しかも2文字だし。俺的に最低3文字ぐらいじゃないと呼びにくかったし。

皆さんもそうゆーのってない？

はあ、やっぱり騎士団隊長さんは大変だなあ。用事ってなんだろう？

「具現士様ー！！ぼさつとしてないで手伝って下さいよ！」『はははは』

前の方から俺を呼んでる皆の姿が見えた。しかも笑ってるし。

「はいはい。今行きますよ！」

全く！皆してひとを馬鹿みたいに！

・・・いや馬鹿だけどさ・・・

「具現士様も大変だな。」

「はあ、そうなんだよな・・・ってあれ？君誰？」

後ろに人が立っていた。

俺より高い背丈、長い銀髪のスンスンヘア、鋭く光る赤い目。

・・・イケメンじゃねえか！

「俺か？俺はネルオーネだ。」

すると彼はそのまま自分の名前を名乗ってきた。

是非お近づきになりたい。

「ネルオーネさんか。よろしく！あ、俺、丈人って言います！」
歳上っぽいしな。ちゃんと敬語を使わないと。

「さん付けや敬語は止よしてくれ。堅苦しいの苦手なんだな。気安く
 ネルって呼んでくれ。皆からもそう呼ばれてるから。タケトだな？
 ・
 ・
 ・よし！覚えた。」

クールだ。モテるんだろうな！！良いな！。顔イケメン、声イケメン、性格イケメン。言う事なしだよ。

・・・どうせ俺は言うこと有り有りなんだろうけどさ・・・
 ってかまた2文字かよ。なに？誰かの陰謀か？俺を陥れるための！

おっと。そんなことを考える暇ないな。まずは質問でもしてお近づきになるか！

「分かった。じゃあ質問。今何歳？」

俺の予想、21ぐらいだ！

「俺か？俺は、17だ。」

[illegible]

「お、俺も17なんだ！ 同い年じゃん！ 奇遇奇遇！」

ゆっくり距離を縮めよう。

うん。じゃないとただのウザいクラスの弄られキャラになってしま
う。

「タケトもか。改めてよろしく。ほら、皆に呼ばれてるぞ。早く行け。」

「え？ネルは来ないの？」

「すまんが俺は仕事があつてな。先にそつちを済ませないといけな
い……また後でな。」

そう言うところからは後ろを向き歩き始めた。

いやあゝ別れ際もカツコいいなあゝ
ん？ネルは呼び捨てだったか？

ほらあれだ。同性だと恥ずかしくないけど、異性だと恥ずかしいあれと一緒にさ。

それより皆忙しいんだなゝ！知り合いそんな居ないから結構不安だよ。

「そうだ！最後にネルはなんの仕事してるんだ？」
なんかすげえのやってそう。

「うーん。強いて挙げるなら女王様直属の使用人・・・かな？」

顎に手を当て答えてきた。

「エエ！？まじ？すげえ！」

「・・・そうか？おっと、そろそろ時間だ。じゃあな。しっかりやれよ。」

ん？凄いのか？と言わんばかりの顔をしていた。

「ああ！そつちもな！」

なんかこの人とは上手くやっていけそうだな。

シュツ！バツ！

軽やかに壁をけっていく。

壁蹴って屋根上がってったぞ！？

「具現士様！早く！」

なんかちよつと怒ってない？

「はい！今行きます！」

なんか皆の目つきが鋭い。「ごめんよー？謝るから許してくれ。」

「そういえば、具現士様・・・呼びにくいから坊主でいいか。誰かと話してた？」

あの筋肉おじさんが話しかけてきた。おい、おじさん！めっちゃラックダウンしてんだけど？具現士って位からただの一般人みたいな位になったんだけど？あー、そーゆーことか。だったらいいぜ！俺もやってやるよ！筋肉とかでいいだろ！？

「きんに・・・じゃ無かった！えっと、最初に騎士団隊長のリクと話して・・・」

はい。断念しました。なんかやる気なくしました。なんかおじさんの目が俺の死を宣告しているみたいだったから途中でやめました。ごめんなさい。

『なんだと！あのリク様と！？』

どんどん周りに兵士たちが集まってきた。

「あ、ああ。それd「どんなお話を！」

「どういう性格で？」

「リク様：ムツハー！ハアハア・・・」

「いいなあー！」

どんどん息を荒くし近づいてくる兵士たち中には女の兵士もいた。

「こら！まだ具現士様がお話中だぞ！」

あの筋肉おじさんがその場を鎮める。

おおー！流石にこの人には口が出ないか。誰も喋って無いし。筋肉おじさん最強。ありがとう！

「それで、自己紹介とかしてた。次に、ネルオーネって人と・・・マジかよ！」

「あいつとー!?」

「あり得ねえ！」

リクで好評していた皆がネルの話をした途端なんか違う感じになった。

「あいつは、女王様直属の部隊、「クゲン」の隊長だ。」

くげん？つか隊長かよ！そこまで言っただけだったし

「すごいじゃん!? どこがいけないんだ？」

「いや、普段あいつは・・・ってかあの部隊はあんまり見知らぬ人に自分から話しかける事はないんでな。ちよつと驚いただけだ。あ、それと！なんかな？あんさんを「騎士団」か「クゲン」に入れようとどちらも何か企んでいるらしいぜ？」

「ま、マジっすか・・・情報ありがとうございます。」

「いや、いいんだけどよお？あんさん大丈夫か？」

「は、はい。なんとか・・・」

嘘だろ？あの人等が企んでいるんじゃない？

しかし、そうは考えたくも無い。

あんなにいい人達なのだからそんな事するはずない・・・そうだよ！あんないい人らがそんなことするはずないよな。うん。

一方あの二人は・・・

「ちっ！さつさと引かぬか！この影の存在よ！」

「黙れ！てめえこそ引け！あいつは俺の部隊に入れんだ！」

争って（遊んで）いた

午後6：50

「よし！結構直ったな！皆よく頑張った！今日はもう解散！」

「お疲れ様！」

「また明日！」

「おう！」

皆それぞれの方角へと帰っていく。

よし。俺も帰るか。

あれ？

そういえば俺どこで過ごせばいいんだ？

「ハア・・・此処にいたのか。ハアハア・・・探したぞ！ゼエ・・・ゼエ」

「おおー我が救世主！リク様ー・・・ってかその包帯やら傷どうした？」

そう。リクはボロボロの体で来ていたのだ。

「え！？い、いや！なんでも無いんだ・・・貴様こそなにかあったのか？」

心配そうな顔つきで聞いてくる。

「実は帰る場所が無いんです。正確には、住む家が無いんです・・・」

あの第四訓練所にあつたあの家は消したしな・・・
いや、消されただけだ

く回想く

『ハイじゃあ、家を消しましょうか。』

『な、なに言ってるんすか？女王様？家を消す？』

『えい』

ゴゴゴゴゴゴゴ・・・ガラガラガラ・・・

『ああああああああああ！俺の家があああ！？』

く回想終了く

「そ、そんな事が・・・と言うかタケトは具現能力が無かったか？あれを使えば楽に作れるんじゃない・・・」

無理です。もう力が有りません・・・

「じゃあ聞くけど何処に家をつくるんだ？」

「うつ！そ、それは………国の外とか？」
平然と、言つてのける。

「ばか！そんな事したら、俺死ぬだろ？」

「ばかとはなんだ！ばかとは！ふん！もう知らん！」
そう言い切ると後ろを向き、ボロボロの体を引き摺りながら歩いていく。

シーンと静まりかえった広場に俺はいる、。

「はぁ……どうしょ……誰もいないだろうしな……」
「くうくん」

首輪をつけた犬が近寄つて来た。とてもシヨンボリしている。

「……なんだ？お前も帰る家が無いのか？お互い大変だな？」

なに話してんだ？犬相手に……

「俺さぁ……此処とは違う世界から来てさぁ……」
そんな事をお構い無しに、朝までずっと犬と語り合つてた……

3話：炊き出し戦争

次の日・・・

一夜を広場で過ごした俺はなんとなくだが、犬の言葉を理解できた感じがする。

しかし、目が疲れてしょうがない。何せあの後から今の今までずっと犬とお話してたからな。

リクさんは怒って帰るし、周りの家って言っても灯りついてないし。

「今何時だと思う？」

俺は隣にいる犬に問う。

「ワン！」

ほうほう。七時ちよいとな？

「流石だな！」

俺は犬の体を撫でまくる。

犬はクルツとした瞳を細め安堵の表情を浮かべる。

そういえば、動物って撫でられれば気持ちいい顔するけど人間もなのかな？

「あれ？こんなとこで何してんだ？」

後ろから声がしたので振り返るとそこにいたのはおっさんだった。

「ああ、おっさんか。見てわかんないか？犬と遊んでんだよ。なー？」

体を撫でながら犬に同意を求める。

「ワン！！！」

「ほら。」

「いや、ほらって言われても、わかんねえし。」
「そりゃあな。」

俺は、その後昨日遭ったことを話した。

「はっはあゝん、んでしようがなくこの広場で一夜を犬と過ごした・
・と」

うん。大体あつてるけどなんか誤解を受けそうな言い方だな。

「それなら俺に話してくれば泊めてやったのに。」

「え？」

おっさんは真顔で言った。

何とも言えない。だったら、「一言声をかけてくれ。」と思ってしまった。

「それよりもうすぐこちらの皆集まんだけど、誰も来てないのか？」

「来てないと思うけど・・・ワンコ、誰か見たか？」

「ブルル・・・」

犬は横に首を振る。

「そつか・・・らしいけどなんかあんの？」

俺は後ろにいる犬を手をグーにし突き出した親指で指さす。

「まあ、今のは俺でも分かったけどよ・・・炊き出しだよ炊き出し。」

「

おっさんはため息をつきそうな勢いで答えた。

炊き出しって確かあの色んな人に飯やらを配ったりするのだよな。

確かにこの国は今の日本と似てるけど。

「こんなでつけえ国の此処だけでやんのか？」
そうだとすると恐ろしい光景が・・・

そう考えているとおっさんの顔がどんどんニヤケ顔になっていく。

「ガッハッハッハ・・・バツカじゃねえの！？他のところでもやんだよ！ククク・・・坊主はバカだったんだな！！ハッハッハッハ・・・」

「そういうとおっさんは涙を流しながら地面を転がる。」

バカなのは認めるけどそこまで笑わなくてもいいじゃん。

「いやあ、この人が同い年、もしくは年下だったらぶっ飛ばしてるぞ？しっかし・・・」

「いい加減笑うのやめろよ！！なんかホント腹立ってきた！！」

俺は赤くなった顔でおっさんに怒鳴った。

「クク・・・悪い悪い。ついおちよくりたくなつてな！」

おっさんは右手を口に当て笑いを堪えながら答える。

「お、皆集まってきたな！おーい！！」

今まで笑っていたおっさんはいきなり真剣な顔つきになった。

俺はおっさんの見つめる方角を見ると結構な人数の兵士が何やら色々持っているのが見える。

皿、食材、鍋、フライパンなどの必要な物を持ってきたようだ。

しかし量が多いな。そんなに人が来るのか？

兵士も集まり食べ物調理も終わりできた料理はカレーだった。

こつちの世界にもカレーあるんだ！やったあ！！

しかし妙に変なのは何故か円陣を組んでいる。

「よし！出来たな！・・・いいか？これから戦争だ・・・死ぬなよ・・・？」

『おおおおおおお！！』

兵士たちは皆声を揃えて返事良く叫ぶ。

その何秒かした後、

「来たぞ！！戦闘準備！！」

それぞれ

おっさんの掛け声を聞き皆其々配置につく。

あれ？いつの間に？つてかなんも見えねえんだけど？

「盛り付け用意！！」

おっさんの掛け声と共に皿にカレーを盛っていく兵士達。

「おっさん。なんも来ないけど？」

「坊主、聞こえんのか？この足音が。」

足音？

俺は目を閉じ音を聞き取る。

聞こえるのは、カレーの煮込む音、皿を取る音、皿を置く音、ワン

コの鳴き声がたまにするぐらいの音だった。

他に何が・・・ん？・・・何か聞こえる・・・

俺はもつと遠くの音を聞き取ろうとした。

すると・・・

ドドドドドドドドドドドドドドドド・・・

何かが近づく音が聞こえる。

俺はハッと目を開け正面を見る。しかし何もいない。

「聞こえたか坊主。」

おっさんが腕を組み遠くをながら聞いてきた。

「あ、ああ。でも何もいないけど」見えた！！皆！気を引き締めろ

よおおおお！！」

俺はおっさんに向けていた視線を正面に戻す。

何かが動いている。

俺は目を凝らして見る。

すると人が全速力で走ってきている。しかも数人とか、何十人とかではなく、大きな群れを成し濁流のように流れて来る。

その距離はどんどん近づき次第に色々な声が聞こえる。

「めええええしいいいいい！！」

「よこせええええええええええええええ！！」

「おおおおおおおおおおおおおお！！」

「今だ！！守備兵前へ！！」ザッ！！

おっさんの掛け声と共に目の前に細身の兵士が数人出る。

ハッキリ言ってこんなのが守備兵とは言い難かった。

「おおおおおおおおおおおお！！」

人々が近づき守備兵との距離が無くなりそうな時、

「てんかあああああああああああ！！」

おっさんが叫ぶ。

その言葉を聞いた守備兵は正面に両手を翳し《かざし》、掌の周りに魔法陣のような物を展開する。

そこから掌の前に水色に似た透けるデカイ壁のような物を造り出した。

そして数秒後、人々が壁にぶつかったと思ったらそこから進まないだけでぶつかりはしなかった。

何とも不思議な魔法だ。しかし最前線の人々が何人が転んだ。

俺はその光景に目を背けてしまった。

見ていられなかった。

目を充血させ、必死にカレーに手を伸ばそうとし、叫ぶ人々に。

何でこんなにも悲しいんだろう。

俺はこの時震えながら初めて知った。

自分がどのくらい恵まれて生きていたのか。

今まで当たり前と思って生きていた人生だったが、この人々を見て

こんな悲しい人々も居る事が分かった。
俺はその光景が衝撃すぎて、そのまま倒れてしまった。

3話：炊き出し戦争（後書き）

頑張りました^^；

4話：無限階段事件！（前書き）

丈人君が何かに目覚めたようです。

4 話：無限階段事件！

その後、炊き出しも終わり、昼間に差し掛かる頃に俺は目が覚めた。何故時間がわかるのかと言うと、俺の腹が減って来たから。

しかもここはベットのう上だ。

って事はここは誰かの家って事だな？

じゃなかったら此処は何処だよ。とツツコミを入れたくなった。壁は白く床は木でできているっぽい。

ほんのりそんな木の匂いがしたからだ。

そんな事を考えながら部屋を見回していると

ガチャ・・・

とドアノブが回る音がする。

誰か来たな。

そう思い寝たふりとかしない事にした。
するつもりでした。はい。

ギィ・・・とドアの金具などの軋む音がする。

そおつと顔を覗かせたのは小さい子供達だった。ん？子供？

しかも3、4人とかじゃなく十何人もが身を乗り出し見ている。

俺も子供達も目を点にしている。

『うわあああああああああああ！！』

「あああああああああああああ！！」

子供達と俺が叫び、動き回る。

そして子供達は部屋から出て行き、やがて叫び声が聞こえて来なくなつた。

……何だったんだ？俺は部屋のと真ん中で茫然と立ち尽くしていた。

「はあ……」

深いため息を吐いた。

此処に居てもしょうがないな。

そう思い二刀を探す。二刀は部屋の隅に立て掛けていた。

「んしょっと！しっかし刀って思いなつてつくづく思うよ。」

こんなのゲームとか漫画のキャラってブンブン振り回してんのか・・

やっぱ常人じゃないんだね。

「おっと！こんなことしている場合じゃない！」

おっさんと連絡付けなきゃ！

俺は部屋から出るためにドアへ歩く。

ドアの外へ出ると右側に階段、左側に幾つか部屋がある廊下に出た。

「ほええ、広いな。」

俺ん家の何倍だ！？

そう思いながら天井や壁やらを見ながら下へ降りる階段へと歩く。

そして階段をトントンと降りる。

[illegible]

ずっと下に降りてんだけど何故か階段がずっと下に続く。

おかしいな……なんでだ……？

「お！　いたいた！　どうせこんな事だと思ったぜ。」

と後ろから声が聞こえた。よく聞き慣れた声だ。

「おっさん……ん？」

後ろを見るとおっさんとおっさんの後ろにさっきの子供達が腕やら足やら髪やらにしがみついている。

少し警戒しているみたいだ。

・・・可愛いなあ。

「おお、こいつらか？俺の子供だ！！」

おっさんは笑いながら言う。

おい！！これ全員か！？奥さん頑張りすぎじゃない！？

「パパ・・・」ギュツ

ある子がズボンの裾を引っ張る。

「ああ、悪かったな！よく教えてくれくれたな！偉いぞ！！！」

おっさんが子供達の頭を撫でる。

ということはこの子等が教えてくれたんだ。

俺は子供達に近づき、体を皆と同じ視線に落とす。

子供達はビクツと体を動かすと小刻みい震え、ズボンなどに力を入れることを一層強くしたのが分かった。

あらゝやつぱり怖いのかな？そりゃこの子等からすれば俺は変態に見える事だろう。

しかしお礼ぐらいは言いたいから。

俺はそつと手を子供の頭に乗せようとする。その子は目をギュツと瞑る。

打たれるとも思ってたんだろう。しかし俺はゆっくりとその子の頭に手を置き頭を撫でる。

すると子供は目を開け俺を見てきた。可愛いなあ。目なんかクリツクリ！！顔もポーっとしてるし。

「ありがとね？助かったよ！！」

俺は出来るだけ優しい笑顔でお礼を言った。

下手したら優しいじゃなくて厭らしい顔になってしまっからだ。

その子は顔を赤くし隠れてしまった。

やっとお礼が言えた・・・なんかすんごい疲れるな・・・

ま、それ以上の収穫あったからいいけどさ。

「良かったな！」

おっさんはそう言う。

その子はコクンと小さく頷く。

ああ〜！！可愛いわ〜！！

小さい頃の詩音もあんな感じだったなあ〜！

ま、あんま覚えてないけど。

「ってかおっさん。此処なんだ？全然下に降りれないし。」

「ああ、これか？これは訓練用に造って貰った不思議な階段だ。」
訓練用？

「ほう。例えばどんなのに使うんだ？」

「ずっと階段を逆立ちで降りたりとか。全力で駆け下りたりとか？」

俺は驚愕の顔になる。

さ、逆立ち！？

俺体育の成績悪すぎて皆に馬鹿にされた事があつたよ・・・

唯一出来るスポーツが水泳だけだったからな。

その時、皆俺が女子の水着見て興奮してやる気出してるとか言つて俺一週間ぐらい女子と口利いてくれ無かつたよ。あの時は流石に殺意が芽生えたな。

「ま、すぐ上に戻れるのが一番いいんだがな！」
え？

「それってどういう・・・？」

「ん？上に戻つてみな？」

俺は言われた通り階段を上に戻る。

するとすぐ階段が無くなりさつき見た階に戻っていた。

「なんで？」

俺は叫んでいた。

「だから言っただろ？不思議な階段だつて。」

「何冷静なんだよ！！」

「まあ落ちつけて。こいつらに嫌われたくないだろ？」

あ。

俺は子供達に視線を向かわせると、ボーッと俺を見ていた。

しまった！

驚かせたか！？

「いや、セーフだ。」

「そっか良かった・・・あれ？おっさん今心読んだ？」

「いんや。ただヤバいか！？って顔してたんでな。」

何という洞察力！！

「パパへ戻る？」

「おお、そうだな！戻るか！坊主は後ろ着いてきな。」

「はい。」

そう言う俺はおっさん達が上がって来るまで待ち、前に行ったのを確認した後、後ろを歩く。

その時気付いた。

子供達がそのまま金魚のフンのようにおっさんの後ろにしがみつき引き摺られているのに・・・

・・・痛くないのかな？

4話：無限階段事件！（後書き）

誤字脱字

感想待ってます（＊　　　　）ノ

5話：居候になりそうです！！

おっさんの家の様な所を彷徨い5分ぐらい。

階段を下り、歩き、また下り、歩きの繰り返しだ。

いつまで続くんでしょうか。

しかし、此処は喜ぶところなのかもしれない。何故なら・・・

「おにーちゃん。おんぶー！」

「はいはい待ってねー！」

子供達とやつと仲良くなれたんだ。

いやー、長い道程だった。

たまに後ろを見てくる子供達に優しく微笑んだり、手を降ったりと健闘した結果、この嬉しさを勝ち取ったのだ。

こっちに来た時は涙が出るかと思っただよ。いや、泣いたけどさ。

キャツキャツと肩車やおんぶをしている子供達が騒ぐ。

「おわわわ落ちるから！あんまり動かないで！」

ギョと肩車をしていた子供が俺の顔を引っ張る。

痛くは無いが、視界が狂う。

「こゝら！あんまお兄ちゃんを困らせちゃダメだぞ？」

おっさんが後ろを振り向き子供達を優しく叱る。

俺に気を使ってくれたみたいだ。

おっさん・・・嬉しいけど何かおっさんにお兄ちゃんなんて呼ばれると身体中に虫唾が走るんだけど？

そんな事を心で言ってますけど本当は感謝してますよ。

そして階段を降りる為に子供達を降ろす。

すると子供達は顔を顰め、俺を睨む。可愛いなあゝ全く！でも・・・

「ごめんな？危ないからってお父さんがこつちを睨んでるから。」
そう。

おっさんが俺を鋭い眼光で睨んできたから逸早く危機を察知し子供達を降ろしたのだ。

偉くね？誰か褒めて！？

降ろした後のおっさんは普通の優しい顔に戻り、階段を降り始める。

怖え・・・

子供達の事になるとあんななるのかよ・・・

『おにーちゃん早くう！』

皆が俺を急かす。

「はいはい今行きます。」

俺も階段を降り始める。

「よつし！到着！」

おっさんは階段を降り終わると振り向き言う。

子供達も降り終わり、俺で最後みたいだ。

「やっと一階まで降りて来たのか・・・」

長い道程だった・・・本当に。

「おにーちゃんあそぼー？」

女の子がズボンを引っ張る。

「ごめんな？今からお兄ちゃんはパパと大事なお話なんだ。それが終わったら。な？」

おっさんが女の子をあやす。

大事な話って何！！

「あーい。」

女の子はしょうがねえな。みたいな返事をし、皆と何処かへ走って行った。

そう言えば、

「なあ、おっさん。質問していいか？」

「ん？なんだ？」

おっさんは間抜け面で聞き返す。

「あの子らって本当におっさんの子か？」

そう。これが質問。

あんな沢山の子がおっさんの子供だったら尊敬するが、あり得ない。考えたくもない。

「いや、あいつ等は俺の子じゃねえ。」

やっぱり。

「此処で話すのもなんだ。居間に行こう。」

「ああ。」

数十秒後に居間らしき所に来て座り込む。

居間には俺とおっさんだけ。

何この恐ろしさ。

さっきの質問がやばかったな。

汗ダラダラ出て来やがる！せなかがヌルヌルする。

「質問の答えだが。」

静寂を切り裂いたのはおっさんだった。まあ、俺から切る気なかったし。いや、切る勇気がなかった。

「あいつ等は孤児だ。」

孤・・・児

孤児って親が居ないっていうあの？なんで？

「知っているかもしれねえけど、この国は戦争中だな。色んな理由で子供が1人になってんだ。それを俺が見つけて親代わりって訳。」

戦争は悲しみしか生み出さないとよく言ったもんだ。全くその通りじゃないか。

戦争で生まれる物は全て悲しい物じゃないか。
決して良い物なんかじゃないじゃないか。

なんで戦争なんてするんだろう。
なんて自分に問題提起する。

「おい坊主。あまり深く考えんな。頭がおかしくなるぞ?」
おっさんのこの一言で我に返る。

「あ、ごめん。んじゃ次。」

そうだよな。俺が深く考えてもダメだよな。
軽く行こう軽く。

そう思いながら次の質問をする。

「この家って何階建てなの?」

ガクツ!

胡坐をかき肘を立て手を顔につけていたおっさんが転ける。
あれ? 俺変な質問した?

「お前さ。何この質問の重さの差。」

質問の重さの差?

ああ、さっきのシリアスっぽい質問から何でこんな間抜けな質問になるのかってことか?

仕方ないじゃん? 気になるんだから。

しかも何か軽い質問と思ったらこれが一番軽かったんだ。

「まあいいか、12階だ。」

高いよ。なんでだよ。

「もういいだろ? こっからは俺の質問だ。」

まだ質問したい事あったんだけどな。仕方ないな。

「はいよ! 何でも来い!!」

「まず、お前これからどうすんだ?」

おっさんは真剣な顔つきで聞いてくる。

「これからって?」

よく意味が分からない。

「あーあれだ。寝泊まりする宛てはあるのかって聞いてんの。」
「いや、ないけど・・・まさか!!」

こんな質問だけは勘が働くぜ。

「まあ考えてる通り、落ち着くまでここに住むか？」

おっさんがニコニコしながら聞く。

おじさん最高。やっぱあんたはいい人だよ！！

「住む住む！！いいのか！？」

「ああ！俺は構わないぜ！子供達も喜ぶだろうしな。」
なるほど！！

「サンキュー！！」

「当然だ」

おっさん！輝いて見えるよ！！

「よし！！そうときまればあいつ等に知らせるか。」

おっさんは立ちあがると子供達を探しに行こうとする。

ああ、背中がでかく感じるよ！！

「お願いします。」

「任せとけ！！」

横を向き後ろにいる俺を見て親指を立て凜々しい顔をする。
そいでおっさんは居間を後にする。

ああゝあの子達どんな顔するかな？

何か楽しみだなゝ！！

5話・居候になりそうです!!（後書き）

読んでくださって有難う御座います^^

6話・居候になります。(前書き)

今回は短めです^^;

6 話：居候になります。

おっさんが子供達を探しに行つて数分の間俺は部屋を物色する。
詩音と違つぞ!?

そんな事をしていると

「ただいまー!!」

『まー!!』

元気な声でおっさんと子供達が入ってきた。

「おかえりー!!」

おっさんのまーを繰り返し挨拶をする子供達。 いやー和むわー。

「おかえりー」

俺は動き回つてた体を止め、視線をおっさんのいる方に向ける。

「ん? なーにやってんだ? 坊主」

「いや? 特に何も?」

「そうか?」

物色してたなんて口が裂けても言えねえ。 そんな事を言つたら俺が
コツコツと詰めて来た皆との友好関係が音を立て崩れて行く。

「それよりパパー。 じゅーだいはっぴよーって何ー?」

その言葉を聞き俺はおっさんのとこまで瞬時に動く。

そして近づき、片手で声を漏らさないように隠しながら小さな声で
喋る。

「おっさん! まだ言つてなかったのかよ!」

「すまんすまん。 でもよかつたんじゃないか? こいつ等がお前の目
の前ではしゃぐの見えるし。」

成る程。そんな考えがあつたなんて。

「流石だ！おっさん！」

しかもさつき程ではないとはいえ、おっさんが輝いて見える。

「おう！もつと褒めろ！」

おっさんがそう言うのと俺には見えた輝きがそつと消えた。

なんで偉そうなんだよ・・・

ほら。輝きが消えちゃったけど。良いの？

いや、結構良い事したとは思うけども。そんな大層な事してねえじゃん？

かつこいいと思った俺が何かバカみたいじゃなかよ。
バカだけでも！！

そんな事より・・・

「強くて優しいとーってもイケメンだけど少し頭が上手く動かない
すごいおっさん！！いい加減話進めませんか？」

俺は少し皮肉を込めて言う。

あれ？皮肉ってこんな感じ？
知らん。

「むふふ・・・仕方ないな。それでは進めてやるか。あれ？なんか
馬鹿にした？」

おっさんが変な笑い方をする。

どこかのいやらしいおっさんみたい・・・

おおお何か寒気して来た。

「そんな訳ないだろ？」

俺は嘘をついた。

「だよな！」

「よし！いいかお前等！！これから重大発表をする！！心して聞けよ！！」

おっさんがそう言うとき子供達はじーっとおっさんを見つめる。子供って集中力が凄いつて聞いたけどこれ程とは…

俺も子供だけど。

するとおっさんが思いつき息を吸い、

「今日からここにこの糞生意気なお兄ちゃんが住みまああす！！」と叫びを上げる。

当然俺は

「おらあああああ

筋肉ゴリラアアアアアアア

てめええええ！！

やっぱ気づいてんじゃねえかあああああ！！
腹癒せかこの野郎！！」

・・・なんて言えるわけもなく
おっさんにアイコンタクトした。

おっさんはドヤ顔でこちらを見る。

「どうだ参ったか」と言わんばかりのドヤ顔だった。

あの野郎・・・ぜったい気づいてやがる。

はっ！それより子供達は！？

俺は子供達に視線を戻す。

すると聞こえたのは・・・

『やったあー！！！！』

「おにーちゃんすむの！？ほんとー！？」

「いつでもおにーちゃんとあそべるー！！」
などの歓喜だった。

俺に群がる子供達。

あ、俺もう死んで良いかも。

6話：居候になります。（後書き）

明日からちゃんと進めていくので
今日は大目に見てください！><;

7話：その本の名は・・・（前書き）

タイトルの意味は

最後を見ればわかります！！

当たり前ですねwww

7話：その本の名は・・・

子供達に囲まれ萌え死にしそうだった俺は

「皆これから宜しく!!」

子供達に挨拶をしていた。

あのまま死んでも良かったけどそうになると子供達と遊べなくなるしな。

『よろしく!!』

子供達は手を挙げ挨拶を返してくる。

「まあ、これからまた仕事あるから家を出るけどお前はこれでも読んどけ。」

そう言いおっさんが何やらガサゴソと紙袋をあさる。

「ホイ。」

おっさんが袋から出したのは分厚い本だった。しかも数冊。

「何これ？」

「何って本だよ、本。」

見た限りそれが本だと言うのは誰でも分かる。

「そうじゃなくて!!何の本!？」

「ああ、そっちな」

おっさんは顎に手を当てると、ウンウンと頷く。

「どっちだよ!!」

絶対おっさん俺本分かんないとか、字読めねえとか心配してんだろ？

「背表紙見るよ。表裏は模様しか書いてないから。」

ん？背表紙？そっかタイトル書いてるもんね。ってか裏表模様だけなんだね。

ここがこつちの世界と俺のいた世界の本の違いか？

ほら、俺のいた世界って表紙にもタイトル書いてんじゃない？

けどこつちタイトル書いてねえんだよ。

まじで。

俺は背表紙を見るために数冊の重なった本を下し、一番上の本を取り上げ背表紙を見る。

いや、結構重いんだよ。一冊一冊重みがあつて、持つのも大変。

そして大変な事に気がついた。
じ……じが……..
読めねえ！！

何か書いてんのは分かる。

けど読めねえ！！

なんだこの文字。

さつき字読めねえとか思ってたけどこれは本当に一大事だ。

もしこれがおっさんに知れたら……

く想像く

「おっさん。字、読めねえや！」

「え？wまじ？w w w嘘でしょ？w w w w」

く終了く

とかになりそうだ。

でもここは読めないのは嫌だ。

・・・仕方ないか・・・

「おっさん。」

「ん？なんだ？」

ボケたように聞いてくる。

人が真剣に悩んでんのにその態度なんだよ。

だからあんたはおっさん止まりなんだよ。

「・・・字、読めねえ。」

さあ。嘲笑うがいい！！

「んな事だろうと思ったぜ。」

おっさんは笑顔で答える。

嫌な笑いとはではなく、ただ純粋な笑顔だった。

多分予想していたんだろう。

「ちょい待ちな。そこに座って目え瞑ってな。」

俺は、頭の整理が付いていなかった。

え？なに？そんな事？ってことはおっさんはこれを見越していたのか？嘘だろ？あのおっさんが！？ありえねえ。

しかし、そう思いながら俺は腰を落とし胡坐をかき目を瞑る。

「・・・」

少々沈黙が流れる。

そして何かが俺の額に触れる。この感触は、指か。

多分おっさんが指を俺の額に当てているんだろう。

という事は人差し指かな？

そんな事を考えていると、瞼の裏側でも何かほんのりと明るくなるのが分かった。

いったい何が起きているんだろう・・・

何秒かすると

「彼の者に知識を分け与えよ。」

と言うおっさんの声が聞こえた。

あれ？これって詠唱って奴か？

あのテイ　ズの術を発動する時に使うあれか？すげえ！生詠唱だ！！と、訳の分からない事を思う俺。何言ってんだろ。

そうするとどんどん光が薄くなり消えていく。

その消えた直後、頭に何かが入り込んで来る。

「よし！！もういいぞ！！もう一回見て見な？」

その言葉を聞き俺は目を開け、背表紙に目を向ける。

タイトル名は

「子供でも分かるディオジ・アース！！」

と書かれていた。

よ・・・

「読めるうう！」

日本語だ！

タイトル名が納得いかねえけど読める。

「ありがとお！おっさん！！」

俺は親指を立て、号泣しながらおっさんに感謝をする。

「いいって事よ！！っさ！俺は仕事行つて来るからこいつ等と遊びながらその本読破しとけ。」

おっさんはヨッコラセと声を漏らし、立ちあがると玄関に行こうと歩き始める。

「んじや行つてきまーす!!」

『行つてらっさい』

俺と子供達はおっさんに手を振り言う。

ボタン。と音を立て居間のドアを閉める。

「さて。何をしようか。」

俺は子供達に聞く。

「かくれんぼー!!」

「おんぶー!!」

「なぞなぞー!!」

子供達がかやがやと言い始める。

うーん・・・

かくれんぼは家が広すぎるし・・・

おんぶは一人ずつだし・・・

なぞなぞはちよつとなあゝ・・・

そうだ!!

「なあ? 兄ちゃんに決めさせてくれる?」

言いだしつぺなんだけどさ、皆で楽しめる奴がいいよね。

「いいよー?」

「んじやあさ! 積み木やろうか?」

「でも積み木がないよ?」

ふっふっふ・・・そうでしたか・・・

「兄ちゃんは凄い魔法が使えるんだ。見てろよー!」

『うん!!』

俺は色んな形の積み木を想像する。
三角形、四角形などのスタンダードな形から
多角形まで想像する。

パツ!!

カラカラカラ・・・

と音を立ててどんどん積み木が手から出てくる。

『すごーい!!』

「へへへ!」

結構な量が出てきたので止める。

止め方は想像するのを止めれば止まるかなって思ったら上手くいった。

何事も発想だよな。

「じゃあ何作ろうか?」

『おっきいおしろ!!』

「よーし!!お父さんをビックリさせてやろう!!」

『おー!!』

数時間後・・・

俺は本を読んでいる。

え？積み木か？聞いてくれよ。

子供達が気を利かせてくれてさ。

〈回想〉

「おにーちゃん、本読んできていいよー？」

「え？でもまだ遊びたいし・・・」

「いーの！！後でおにーちゃんもおどろかせるの！！」

「そ、そう？んじゃあお言葉に甘えて・・・」

〈終了〉

ガチ泣きしたよ・・・

その代わり居間追い出されたけど・・・

それより他に何の本があるのかなー？

そう思い俺は本を持ち背表紙にあるタイトルを見る。

これこの中で一番分厚いけど何だろ・・・？

「えーなにになに？魔術集・・・？おー！！魔法の本か！！」

魔術集の本を置き違う本を持つ。

「これは・・・精霊集・・・精霊についてかな？・・・にしても集が多いな！！他にないのか・・・？」

そう思いながら次の本を取る。

「・・・百科事典」

なんか・・・まともだ・・・

お、これで最後だ。

「次は・・・・・・ッ！！」

俺はこれに目を奪われた。
あ、エ 本じゃないよ？

その本のタイトルは・・・

「具現士の全て・・・」

7話：その本の名は・・・（後書き）

ちょっと長くしました!!

まあいつも通りg d g dですが！

読んで下さった皆様!!

ありがとうございます!!

8話・レイトン（前書き）

ちよい短めですく

8話：レトン

「・・・」

まあ・・・何か在り来たりな名前だな。

俺はあの本をじっと見ている。読んではいない。

読むけど凄く不安なだけ！！うん！それだけだ！！

今読むよ！！

恐る恐る本の表紙を捲り目を通す。

最初のページに書かれていたのは目次だった。

ここはあんまりあっちの世界と変わらない。

目次

| | |
|---------------|--------|
| 1 ・具現士とは？ | 3 ページ |
| 2 ・メリットとデメリット | 19 ページ |
| 3 ・戦闘に対し | 30 ページ |
| 4 ・実用化 | 57 ページ |
| 5 ・階級 | 64 ページ |
| 6 ・レトン | 70 ページ |

などと書いてある。

「ま、基本から勉強だな。」

俺は3ページを開く。

右上に大きく具現士とは？とあった。
次に下の方に目をやると

「具現士、即ち、物などを具現化させる者なり。」
と誰かの言葉のように書かれていた。

そっぴや奴も言ってたな。

俺はどんどん読んでいく。

すると次に歴史と書かれたところがあった。

（歴史）

具現士の歴史は近年。

初代具現士、レトン・ライナが初めて使用したとされている。

最初に使用したのは3歳の頃。

お母さんの目の前で小さなクッキーを具現化させたという。

それから何年かすると他にも具現化ができる人も増え、一躍具現士
的存在が有名となった。

レトンが18の頃にエルストリアの騎士団に入り団内で具現部隊を
発足。

当時の最高人数は数十人とやや少なめだったが、他の国具現士とは
戦闘の力が桁違い。

ディオジ・アース最強の部隊とされていた。

「へえ……ってかディオジ・アースってなに？しかも目次のレト
ンって人名か。紛らわしいな。」

俺は不満ながらも次のページに目を移す。

当時の具現士の合計人数は合わせても数百人にしかなかったと
いう。

そのためエルストリア以外の戦闘時の主力は大半は魔術師だった。

それに対しエルストリアだけは具現士を主力とし戦いに勝利したという。

「へえ、すごいもんだな。」

俺は次のページを飛ばしレトンの項目までページを捲る。

俺は私欲に負けた。情けない。

パラパラ・・・

「お、ここか。」

俺はそのページで捲るのを止める。

そこには20代ぐらいの男性の写真が1ページにでかく写っていた。しかもカラー。

髪は黒がかりの茶髪、目は茶色、肌はとても白い。

きりつとした顔つき。両手には俺の持っている刀が握られている。

「この人が・・・」

俺はその写真を触ろうとすると・・・

「ただいまー」

誰かが帰ってきた。

俺は本を慌てて閉じ、残りの数冊の本も整頓し正座をした。

9 話：案内

俺は正座をしながら
相手に対しての言い訳を考えていた。

さっきの声からして相手はおっさんの奥さんってところか。
俺も鋭くなったもんだな。

それより、この短時間で言い訳を考えなければ。
俺はない脳味噌をフル回転させ考える。

聞こえるのはドア越しにいる子供達の騒ぐ声。
楽しそうだなあゝ・・・

いつそのこと子供たちに知らせるか？
その前に入ろうとしたら絶交されるだろう。

「ダメっていったのにー！！」
とか言ってきそうだ。

そしたら俺人生の半分損してる感じがするよ・・・

だったらストレートに俺は居候だ！！とかでも言うか？
・・・いや、態度でかすぎだろ。

絶対、「あんた人様の家に対してその態度はなんだ！！」
とか言われそう・・・

そんなことを考えていると廊下の曲がり角に影が映る。

もう駄目だ！

適当に行く。

曲がり角に足が見え、顔も出そうなところで俺は三つ指を揃え頭を下げた。

そして・・・

「お帰りなさいませ。今日から此处でお世話になります。タケトと言います。不束者ですが宜しくお願いします。」

思い切り早口で話す。

なんか最後がお嫁に行く人みたいなセリフになってしまったがさっきの考えた答えよりはマシだろう。

『・・・タケトか？』

と言う質問が聞こえた。一人は女、もう一人は男の声だった。はい？

「あら、リクちゃんとネルちゃんのお友達かしらあ〜？」

少し色っぽい声で人の名前を出す女の人の声。

俺の疑いが確信に変わった時だった。

やはり二人の様だ。

「フム。この刀、タケトで間違いないな。なあ、ネルちゃん」
この声リクさんだ。

・・・あれ？なんか刀だけで判断された気が。

「俺は男だ。ちゃんと呼ぶな、バカ。」

ネルちゃん。何が確かなの？

俺の持つてる刀で判断したの？それとも髪形とか服？

二人に対しての不安が募る。

その時、パンツと意思つきり後ろのドアが開き俺と刀と数冊の本がドアと壁の間に挟まれる。

「ブフオウ!!」

などと変な声を出してしまった。

この時の顔と動きをスーパースローカメラで見てみたいものだ。

俺は頭を下げたままだったので後頭部、背中を壁にぶつけてしまった。

本は重ねていたのがバラバラになり、刀はそのまま横にすれた。痛って・・・

それよりドアを開け子供たちが一斉に三人を囲む図が想像出来る。キャッキャッキャと飛び跳ねる音が聞こえる。

ちよ・・・助けて・・・

この願いが通じたのか

「あらあら、大丈夫？」

女の人がドアを押し戻し閉めてくれる。押し付けられた狭い空間、視界が一気に広がった感じだった。た、助かった。

「ありがとうございます・・・助かりました・・・」

感謝感謝・・・下手したらこの国守る前に俺が死んじゃうところだったよ。

「やはりタケトだったな、バカ。」

ネルの顔が見える。リクのほうを向いているからリクに同意を求めているみたいだ。でも今さっきバカって聞こえたんだけど・・・

「黙れ。ネルちゃん。」

リクは喧嘩を買うようにネルに挑発する。

なに、この子供みたいな喧嘩。

「それより顔をよく見せておくれ！」

女の方は俺の顔を両手で掴み自分の顔に近づける。

多分俺の顔は林檎のように赤いだろう。

自分で赤くなるのが分かる。キヤー恥ずかしい！。

それよりよく見ると綺麗だなー・・・吸い込まれそうだ・・・

「ミースさん！近すぎます！！」

このリクさんの一言で我に返る。

近い。鼻血が出そうだ！

「あら？嫉妬かしら？」

ん？シット？shit？

「ッ！！違います！ミースさんにはデガルドさんと言う列記とした夫がいるじゃないですか！！」

リクさんが必死に抗議する。

ほう・・・なんとなくだが理解してきたぞ。

おっさんの名前がデガルドって言って、奥さんがミースさんって言う綺麗な人がいる・・・と。

んでこの類から言ってリクさんとネルは、俺と同じ居候ってところじゃない？

そのミースさんが俺に近づいて、おっさんと言う夫がいるのにそう言う事をするのはおかしいと。

「そうね それじゃあ新しい居候さんにお部屋教えなきゃ ついて来て。」

そついうとルンルンとスキップをしながら歩いていくミースさん。

「お願いします。」

「それじゃあ俺はこいつ等の相手しとく。」

ネルは居間へ向かい歩きだし、子供達はネルを囲みながら今に入っていく。

「私はミースさんを監視するためについて行く。」

と俺を横切り、ミースさんの後を追う。

「ああ！待ってえええ！！」

俺は後を追いかく走りをする。

やっと追い付き、階段を上がり、たまに雑談をしながら楽しく歩く。家族の話とか、おっさんの話とか、とにかく楽しく歩いている。

いやあ〜ミースさんっていい人だなあ〜ってつくづく思うよ！

色々お話してくれるし、気遣いしてくれるし、おっさんは幸せ者だなあ〜・・・

俺も大きくなったらこんな奥さん欲しいよ。

まあ、結婚できたらね。

それに対してリクさんは無言。一言も喋らないで腕を組み、歩いている。

俺はミースさんと喋りながらリクさんに気を使い、さっきぶつかった刀を気にし本を両手で持ち歩いている。多分この中で一番気を使っているのは俺だろう。頑張ったな。俺。

そう思いながら足を進める。

10話…お部屋到着!! (前書き)

ちよつと

遅すぎですかね？

10話：お部屋到着！！

俺は、その後トイレ、シャワールーム、ジム等々を詳しく教えられ、今3階の一番端の部屋の前に立っている。

「はいー！！ここが居候さんのお部屋でーす！！」

ジャジャーン！！とでも聞こえてきそうな位のポーズを取り、扉を強調する。

「おおー！！」

いや、まだ中に入っていないんだけど、ここまでされると・・・ね？

しかもなんかただならぬオーラを感じる。

「んじゃ、私お夕飯作らないといけないから、後はリクちゃんに任せろ！」

「え？あのちよつと」

リクさんは何だかオドついてミースさんの方に視線を向ける。

「んじゃ！そゆことで！」

と言うと電光石火のごとく、廊下を一直線に走り、階段を飛び降りて行った。

何というスキル・・・

リクさんと言うとまだミースさんの消えて行った方に手を伸ばしていた。

俺は馴れ馴れしくリクさんの肩に手を置き、

「諦めるんだ・・・もう帰ってこないんだ・・・」

と迫真の演技をする。

するとリクさんはバコツと俺の腹に肘打ちを食らわせる。俺は当然痛くて倒れています。

「ふっつおおおお...」

あ、変な唸り声でゴメンね。

でも本当に痛いんだよ。あっちの世界のチンピラよりも痛かったの。え？何でわかるって？そりゃ、殴られたからな。

〈回想〉

「ちょい、お金持ってない？」

「へへ・・・」

「カバと骨にあげても使い方分からないんじゃないんですかね？しかし、喋るカバと骨がいるなんて知らなかったよ。うんうん。今の世界何が起るか分からないものだねえ。」

「この野郎！！舐めた真似しやがって！！」

「舐める訳ないじゃないですか。汚い。」

「んなろ！！」

「ふおっ！」

〈回想終了〉

お、思い出したらますます痛くなってきた・・・
しかし、何であの時殴られたんだろ・・・

「フン！いい気味だ。」

リクさんは腕を組みぷいっと顔を逸らす。

ひ、酷い！！

それより、入りたい・・・

俺はうつ伏せのまま体を引きずり、ドアノブに手を掛けようとするが、ほんの少しだけ届かない。腕がプルプルと震えてきた。つ、辛い。

ガチャ・・・

と、ドアノブが回る音がする。

しかし開けたのは俺ではなく、リクさんだった。

「ほら、開いたぞ。」

リクさんは何ともまあ、無愛想な声で話すなあ。

しかし、気づくところはそこではなく、最初に開けたのはこの部屋の住人ではなく、ただの知り合いだということろだ。

普通最初に開けるのはこの住人さんでしょ？

「有難いけど！俺が開けたかったよ！」

「な、何だいきなり。」

「ふおおおおおおおおおー！！」

俺は痛みを忘れ立っていた。

「あ、立てた。」

「フツ」ドオン！！

今度は部屋の中に蹴飛ばされ、俺は俺の部屋の中でぶっ倒れた。
な、なんで・・・？

俺はもつと普通に入りたかったただけなのに・・・

く想像く

「わぁく！！すごーい！！」

「よかったな。」

「うんー！！」

アハハハハ・・・

ウフフフフ・・・

く想像終了く

つてな感じで入りたかったただけなのに・・・

「はぁ・・・まあいい。早く支度をして下へ降りなよ？」

「ふえ？なんで・・・？」

俺は倒していた体を起こし、リクさんに視線を向け尋ねる。

「デガルドさん何も聞いていないのか？」

おっさん？何も言っただけだ……

俺は首を横に振る。

「そうか。いいか？よく聞け。これから飯を食った後、軽く特訓をつけると言われたんでな。」

「と……特訓……？」

「そうだ。隊長格が直々に特訓をつけてやると言っているんだ。有難く思え。」

「はあ……」

「そういう事だ。私は下に行っているぞ。」

そう言っているとリクさんは進みだす。

俺は一人ポツンと部屋に残された。

「……はあ」

俺は部屋を見渡し、家具を見る。

あった家具は、ベッド、タンス、折りたたみ式卓袱台、小さな箱だけだった。

俺は本をその場に置き、刀を擦る。

怪我とかついたら可哀想だもんな。

そう言えば、片手で持つのが辛いなあ……

うん。ずっと握りっぱ。

だから結構汗が付いちちゃってるし……

「ごめんな」。汗つけてさ。」

そう思いながら、俺は服で剣の鞘、柄を拭く。

「さて、そろそろ下に行きますか。」

俺は刀を拭いた後、本を奇麗に重ね立つ。

「どっこいしういちつと!!」

掛け声をかける。

いっつもこんな感じで立つと、周りの目が痛いんだ。

要とかにも「おっさんか!!」とか言われるし。

気に入ってるんだけどなあ

そう思いながら、また二刀を片手で持ち、部屋を後にする。

10話：お部屋到着！！（後書き）

誤字脱字、感想など
待ってます^^

11話：変態との模擬戦闘！！

下に降りるとネルとリクさんが待ち受けていた。

「・・・遅かったな。」

ネルが言う。

しょうがないよ。だって道に迷ったんだから。うん。少し前から気付いてたけど、俺って方向音痴っぽいね。

「しょうがないぞ？影の者。相手はタケトだからな。」

リクさんが、呆れ顔で言う。

おい、それどう言う事だ。

「成る程な。」

「納得すんな！」

「たたく。俺を一体なんだと思って・・・」

「よし。それでは行くとするか。」

「そう言い、2人は階段を登る。」

あれ？登るの？俺の降りて来た意味は？

「残念だったな。また登り直した。」

ネルが振り返り話す。

「だったら俺の部屋まで迎えに来てよ！！」

「大丈夫だ。何のメリットも無く登り降りさせたと思うのか？」

「うん。」

本当の事言ったのに、何故か打たれた。

そして、俺の部屋がある3階を越し、5階に着くと、あるドアの前で足を止める。

「ここか？」

「そう。」

「んじゃ！入ろうぜ！！」

俺はドアノブを回し、開ける。

「おううういえあああ！！」

そして閉める。

うん。今のは見えなかった。

そうさ。幻さ。うん。あんなおぞましい者なんて存在するわけない。何焦ってんだろ。あんなパンツード腰振って変な奇声上げる生物なんて居るはずない。

そ、そうだ。リクさんに聞こう。

「あのおーリクさん？」

「なんだ？」

「さっきの見ました？」

「ああ、見たぞ？」

リクさんはそれがどうしたと言わんばかりに首を傾げ俺を見る。

嘘だろ！！

見たの！？

そんなことを考えていると

「さっさと入れよおおおお！！」

「わ！！」

さっきの変態が出てきた。

「おい。スカリオ、その格好どうにか出来ないのか？」

名前はスカリオというらしい。

「おお！リクちゃん！！バツチリトレーニングしてたぜ！！」

しかも話を聞かない俺より馬鹿みたいだ。

「まあいい。紹介しよう。スカリオだ。こいつはこう見えても騎士団の副隊長なんだ。」

リクさんはため息を漏らしながら呆れ顔でスカリオを指さす。

可哀想に・・・

それに比べ

「エッヘン！！」

スカリオ（変態）は胸を張る。

「・・・」

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ・・・

信じれない。

と言うか信じたくない。

「ま、まったまたゝ。冗談きついで！！」

「いや、本当だ。」

今度はネルが答える。

「こいつの優秀さには目を疑う位だ。後はこの変態質を治せれば・・・」

「ネルさん。褒めても何も出ないっすよー！！」

「・・・」

や、やべえ・・・

ネルが言葉を無くしちゃった・・・

「・・・そ、それより特訓ってまさか・・・」

「ああ、コイツとの模擬戦闘。簡単にはタケトの戦闘力を測るためにね。」

「ん？何だこのガキ。」

「すか・・・変態でいいや。」

「変態が俺を見て言葉を発する。」

「あ、俺の存在無かったんだ。」

「リクさん。チェンジ。」

「俺は親指で変態を指す。」

「おい！！何だこいつ！！」

「しょうがないなあ・・・」

「待つてよ！！」

「途中で変態が割り込んでくる。」

「んだよ、もう少しでチェンジ出来たのに。」

「リクちゃん！！俺真面目にやるから！！」

「変態・・・分かった。許可しよう。」

「あ、変態って言った。残念な奴だな。」

「あざーっす！！よし！ガキ！勝負だ！！」

「いいぜ！こんな変態に負けてたまるか！！」

「俺と変態は睨み合いながら部屋に入り、部屋の真ん中で対峙する。」

「なあ、ルールは？」

「変態がネルに聞く。」

「一応何でも有りだ。」

「そっか。んじゃあさ、ハンデは？」

俺に聞いてくる。

ハンデ？

「いらねえよ。そんなの。」

「良いのか？」

リクさんが心配そうに聞いてくる。

「ああ！！大丈夫さ！！」

「フツ！余裕ぶっこいてんのも今の内だぜ！！」

そう言い武器を持つ。

あれは・・・杖か？

「それでは始め！！」

と言うネルの戦闘開始の合図が響く。

11話：変態との模擬戦闘！！（後書き）

頑張りました！！

12話：頭が痛いです>>>（前書き）

初めての戦闘シーン。

上手く表現できてればいいです！！

12話：頭が痛いです><

その瞬間、変態の足の下に魔法陣が出来る。

魔法使うの！？

ハンデ貰えば良かったー！！

ま、そう思っても手遅れだわな。

変態の足の下にあった魔法陣が動き、俺の方へと凄いスピードで動いてくる。

何が起きるんだ？

俺はギリギリまで引き寄せバックステップで避ける。
すると、

「ハッ！！」

変態の掛け声と共に魔法陣が爆発した。

「グオッ！！」

俺は爆風の風力で部屋の壁まで飛ばされた。

クソッ！！こういう仕掛けかよ。

俺は反撃するために跳ね上がり、刀を握りしめ、飛び出す。

しかし軽率だった。俺は2本刀を持っているのだ。だから刀を抜いたとしても、力が激減してしまうだろう。しかも重いのだ。何のトレーニングもしていない俺にとって抜いて片手で刀を操るのは不可能。

しかし、体が勝手に動いていた。

何に動かされた訳でも無く、自分の意思で。

爆煙に包まれている部屋の中を相手に向かって駆け出す。

見えた！！

俺は鞘に収まったままの刀で人影を斬る。

しかしそれが当たる感覚が無かった。

それどころか忽ち赤い光が人影から放たれまた爆発する。

しかもさつきよりも近い距離で。

当然俺は吹っ飛んだ。胴体が異常な感覚に襲われる。

触ると服を触る感覚が無く、触っていたのは自分の火傷した肌だった。

さつきの爆発で服が破れたのだろう。

「ツツツ!!」

声にならない痛みが体に走る。

わぁーお・・・こんなハードなんて知らなかった。

なんて余裕ぶっこいてる暇は無いな。

これが副隊長の実力・・・

俺はがたつく体で二刀を杖代わりにして立つ。

「ハアツハアツ・・・」

息が上がる。喉が痛い。

あの変態何処行った・・・？

辺りを見回すがまだ爆煙に包まれている。

しかし、刀を片手に持ったままだと辛い。

そうだ。何か刀を収めるやつを造ろう。

俺は想像する。

パツとベルト状のホルダーを造った。

しかし、時間がなさすぎたのであまりしっかりした物は作れなかった。

幸い、あの変態からの攻撃は無く、俺はそれを慌てながら腰に巻き締め、刀をホルダーに収める。

まだ足元がたつく。

「すまないな。今はこれで我慢してくれ。」

俺は収めた二刀の柄を片手で優しく撫で、構える。

まあ、俺素人だしどんな構えしているか分からないけど、よく見る構えをしていると思う。

「へえ、それが噂の具現化って奴か。お前本当に具現士だったのな。」

何処からかあの変態の声がする。何処からか見ているのか!?

「辺りを見回しても無駄無駄!!」

何処からかあいつの笑い声が聞こえる。

「ツチ!」

俺はどちらかの刀を触り構える。所謂抜刀いわゆるの構えって奴だ。

「しょうがないなあ。リクちゃん!!窓開けて」

「はいはい。」

ガタンと何か音がすると凄い勢いで爆煙が一定の場所向かって動いていく。

少し煙が残っているがある程度見えるようになった。

「これでいいだろ?来いよ。」

「言われなくても。」

そう吐き捨てて俺はまた相手へ突進する。

「掛かった!!」

すると、今度は目の前に魔法陣が現れる。

そんなんだと思っただぜ!!

「うらあああああ!!」

走る足に思いつ切り力を加えスピードを上げる。

視界が眩む。これで決めなきゃ！！

「なっ！？」

変態は驚いた顔をしている。

すると案の定爆発したが、それは俺を捕えず空振りし爆発した。俺は一直線に変態に飛んで行く。

上手くいった！！この爆風を使って一気にたたっ斬る！！

俺はより一層柄を強く握る。

「ああああああああああああああああ！！」

そして体を捻じり抜刀の体勢を取る。

「うえああああああああ！！」

変態は奇声を上げ焦っている。

これで・・・終わりだ！！

「ああああああああああああああああ！！」

俺は一気に刀を抜いた・・・

と思った。

しかし何故かどんだけ力を入れても抜けない。

「あれ？あれえええ！？」

抜けないとなるとこのままじゃぶつかる！！ぶつかって！！
こんの！！抜ける！！抜ける！！

俺は抜こうと力を入れたりするが抜けない。

「ああああああああああああああああ！！！」

「ぬああああああああああああ！！！」

俺は涙を流しながら、相手の腹に思いっ切り頭からぶつかった。

すると相手の体ごと壁まで吹っ飛び、凄い衝撃と共に体が押し戻される。

そして体が地面に着いたときに俺は意識が途絶えた。

その前に俺は思った。

俺この頃気絶し過ぎじゃね？

12話・頭が痛いです><(後書き)

誤字脱字、感想お願いします()

13話：刀の気持ち。（前書き）

最後、日本語になっているか分かりません＞＜

13話：刀の気持ち。

変態side

・・・あいつ完璧に俺を殺す気だった。

あ、俺は皆のスター、スカリオ・ビフォルマって言うぜ！！

そんなことより聞いてくれ。ちょっと前に具現士を名乗るガキと模擬戦やったんだけど、あいつの目俺っちを殺す気満々の目だったんだ。

幸い、あの刀は抜けないで体当たりで戦闘は終わったけど・・・

あの目を思い出すだけで背中に寒気と冷や汗が流れる。

なんであいつは俺っちを殺す気だったんだ？攻撃を与えたからか・・・？いや、そんな事だけで殺そうとは思わないはずだ。そんな奴はとっくに死んでいる。

俺っちはそのまま考え込んだ・・・

タケトside

「ハッ！！」

俺は勢いよく飛びあがる。

ここは・・・俺の部屋か。

腹に激痛が走る。

「いでででででで！！」

よく見ると腹には包帯がグルグル巻きにされ服は脱がされた状態だった。

首と頭もかなり痛い。

「そうだ。変態とやり合って、それで・・・」

俺は疑問を思い出し、辺りを見回す。

すると、ベッドの横にあの不格好なホルダーに収まっている二刀を見つけた。

「なんで・・・抜けなかったんだろう・・・。」

俺は体をすこし捻りホルダーに手を伸ばす。少し腹がヒリヒリしている。

「いちち・・・。」

少し沁みる。腹を擦りたいが擦ると痛いので触れない。

俺は二刀を見つめ、優しく鞘を撫でる。

「どうして抜けなかったのか教えてくれないかい？」

なんて喋るはずのない刀に問う。

「・・・自分で考えろってか。」

俺は勝手に解釈した。

そうさ。犬の言葉を解釈してたんだ。こんなの朝飯前だよ。

「そうだ！本に書いてるかも！！」

俺は本を探そうと刀をそつとベットに置き、ベットから降り探そうとしたが、足がガクガクして倒れてしまった。

「あたたた・・・。」

体を起こすと前に置いたところに本は無く、本は無かった。

「何処だ！？」

俺は四つん這いになりながら部屋中を探した。

本があつた場所は折りたたみ式の卓袱台と部屋の壁との間に挟まっていた。

多分誰かが俺を運ぶときに邪魔だったから退けたのだらう^ど。

しかし何でこんな見つけ難いところに置いたんだらう・・・

も、もしかして嫌がらせか？まさかあの二人が？だとしたら許せねえ・・・

不気味な笑みの2人が脳裏に映し出される。

後でお返ししてやる。

と心に誓いながら、あの本を探す。

見つけた後、ベットに戻り刀を太ももに乗せながら、目次を開きレトンのページを開く。

パラパラ・・・と本独特の紙を捲る音だけが部屋に聞こえる。

「お、あつたあつた。」

ページを少し飛ばしたので戻しあの写真があるページをだし刀に見せる。

「ほら。お前達の主様だよ。会えて嬉しいかい？」

俺はよく見えるように刀を持ち上げホント同じ位置にする。

「俺はよく知らないけど、どんな人が教えてくれない？」

そろそろ俺は頭が狂ってきたのか、それとも疲れているのか刀に話しかける。多分寂しいんだろう。

「・・・へえ、優しくって強かったのか。そりゃ君等が慕う訳だ。」

俺は笑顔で解釈をする。

それより本題に戻す。

その下の紹介文を見ると・・・

名前：レトン・ライナ

性別：男

年齢：享年30

職業：具現部隊隊長

武器：刀

精霊：全て

エルストリアの具現士。

ディオジ・アースで初めての具現士とされている。

人情熱く、人柄も良く、よき理解者とされたため、英雄ヒーローと呼ばれていた。

敵国からも尊敬され、他国との唯一の話相手兼ね、具現部隊という具現士初の部隊を発足。

その力は国一つを滅ぼすとされていたため、彼を敵に回すのは厄介とされていた。

彼はその力で何でも造っていたが、ある病気にかかり病死。

病名などは分かっておらず、立て続けにエルストリアの他の具現士も病死。

これは、全世界で知れ渡り多くの人が悲しみ、多くの人が喜んだという。

これを悲喜の螺旋と呼ばれ語り継がれる。

成績

戦線

| | | |
|--------|-------|----|
| 1226戦中 | 1226勝 | 0敗 |
|--------|-------|----|

と書かれていた。

俺はそれを読み尊敬し、一人激怒した。

英雄が死んで喜ぶ・・・？

そんな奴の顔が見てみてえよ。

見たらぶっ殺してやる・・・

より一層本を握る力が強くなる。

俺は傍^{はた}から見れば恐ろしい顔をしていたと思う。

その時、誰かが見ている気がして驚いた顔つきで周りを見渡す。しかし誰もいない。薄っすら感じたのは悲しい感じ。それが頭に過ぎよった。

ただの頭を過ぎただけの感じだったのだが、俺をそう過ぎらせていたのは太ももにある刀のように思えた。

多分、怖い顔をしていたから怖くなったのだろう。

俺は微笑み、

「怖がらせてごめんね？ 疲れたから寝かせてもらっよ。」
と謝ってから眠りについた。

結局、刀については書かれていなかった。

何でだろう・・・？

14話：鬼

あの後寝て、眠りから覚めたのは夕方。という、約1日寝ていたみたいだ。

・・・て、おいしいおいしい！！ただ寝てんだよおおお！！

俺は飛び起きると、窓から入る茜色の光が部屋を色彩る。

「どのトワイライトタウンだよ。」

そんな馬鹿を言っている場合ではなく、俺は慌てて飛び起き刀を持って部屋を飛び出す。

体に痛みは無く、逆に軽く感じる。

「これが翼が生えた感じってやつか？」

などと馬鹿なことを考えながら、階段を降り居間へと向かう。

バンツ！！

と勢いよく今のドアを開ける。

そこには、包丁を持って胸ぐらを掴んでいる笑顔のミースさんと、掴まれて泣きじゃくっているおっさんがいた。二人とも俺に気が付き顔を向ける。

ミスさんはニコニコ顔で「あ、目が覚めたの?」と聞いてきた。

俺からしてみれば、永遠に目が覚めなきやよかったと悔んだ瞬間だった。

おっさんはアイコンタクトで「Help」と言っているように見えた。

俺は目が点の状態であーっと閉め猛ダッシュで部屋に逃げた。

俺はガツ ユも顔負けのスピードを見せながら階段を駆け上がり、廊下を走り自分の部屋の布団に潜り込んだ。覚める覚める覚める覚める覚める覚める……悪い夢なら覚めてくれええええ！！

ガチャ……とドアが開く音がする。

俺の願いも虚しくやはり今のは現実だと知らされる。そんでもって+（プラス）で逃げると言う警告も出ている。

無理無理！！

今逃げたって逃げれないって！！

そつと被っている布団に何やら違和を感じる。おそらくミースさんが手で掴んで引つpegがそうとしているのだろう。

ハッ！！やれるもんならやってみな！！

その後のタケトの体験談。

Qそれで？その後どうされたんですか？

Aはい。その後布団を深く被り、端をよく握りましたが呆気なく布団を取られて見えたミースさんは、包丁を逆手持ちにして、「どうして隠れたのかなー？」ってニコニコして聞いてきたんですよ。

Qなんて答えたんですか？

Aそりゃあ、「ミースさんがおっさんを殺ろうとしたの見たから」なんて言ったら俺も間違いないとお陀仏だと思ったのでちゃんと「二人のラブラブ展開を御邪魔しちゃいけないと思って」って言いましてよ。

Q 反応は？

A そしたら・・・「そんな風に見えたの？」と笑いながら包丁で俺を・・・俺を・・・！！うつつ・・・

しばらくお待ちください。

A すいません。取り乱してしまつて・・・続けますね？その後目が覚めたら居間の椅子に座つてたんですよ。皆ワイワイご飯を食べてました。俺その時は夢だったんだと心底ホッしました。ミースさんがそんなことしているはずないって。けど俺気づいたんですよ。ミースさん以外が楽しんでいない事に。

・・・ハア一気に上手かつた飯を食べる気が失せたよ。

俺は変な質問を自分で出し自分で答えていた。自問自答つてやつだ。俺は気まずい食事が終わり部屋に戻る。

あの後、おっさんに呼ばれるわりクさんに説教されるわで何や感や疲れた。

パタンと部屋のドアを閉める。

明日からまた復興作業しなきゃ！！

「よし！頑張るぞ！！お休み！！」

俺は意気込み、刀を抱きながら目を閉じ、寝た。

次の朝、俺はおっさんに無理矢理起こされ襟元を引っ張られながら家を後にした。

「ほら！具現士様。ちゃんと作業してくださいよー！」
1人の兵士が言う。
そんな事言ったって寝起きだし。
と心で愚痴りながら手を動かす。

14話：鬼（後書き）

ちゃんと計算合ってるかな？
僕数学苦手なんですよ><

15話・変態はやっぱり変態。(前書き)

そのまんま

15話：変態はやっぱり変態。

午後を回った時。

「おつし！！だいぶ直ってきたな！！よし！集合！！」

とおっさんの集合の掛け声が聞こえる。

何だろ？

「これから分担作業を行う！！ここを担当する班はA班！！訓練場を担当する奴はB班！！それぞれのリーダは、A班は騎士団隊長に代わってスカリオ、お前がやれ。それでB班は俺について来い！！以上。作業再開！！」

そう言うと他の兵士達はおっさんについて行くか作業を再開し始めた。

・・・あれ？俺は？何これ。皆作業する場所知ってんのか？

そう思いながら近くの兵士に自分はどこか聞く。

「なあ、俺どつちか知ってます？」

「確かデガルドさんの話によればここだそうですね？聞いてないんですか？」

「あ・・・ああ。聞き逃してな・・・。すまない助かったよ。」

「いえいえ！！」

兵士は手をブンブンと横に振る。

迷惑かけちゃったな・・・

にしてもあのジジイ・・・俺に何も言わないんだもんな。

後でとっ捕まえて吐かせてやる。

と企みながら作業に取り掛かる。どんな作業かという設計士の書いた設計を想像し、組み立てたり材料を出したりするという何ともまあ地味な作業だ。俺はさっさと家ごと具現化すればいいんじゃない

いか？と疑問に思ったが兵士曰く、それじゃ意味がないらしい。

多分言いたい事は達成感を思い切り味わいたいのだろう。俺もそれを気づかされた。

そう思いながら作業を続ける。

そっぴゃあ、ネルとリクさんは何所に行ったんだ？全く、皆頑張っているのに。

そっぴゃあで愚痴を言っていると

「おい。」

と聞いた声が後ろからする。

うん。なんか嫌な予感がするからスルーしておこう。

「ふふふん ふふふふん ンフフフフ？」

と鼻歌を歌いながら作業を続ける。

「おい！！！」

「んだよ？いいとこだったのに。」

俺は後ろを不機嫌な顔で向く。居たのは案の定スカリオ、通称変態だった。

「そっちはどんな感じかなーってさ。」

「見たら分かるだろ。」

俺はそう言つと作業に戻る。

「なあ。」

「んだよ。」

作業をしたままで答える。

「あの時俺を殺そうとしてなかったか？」

！？

「・・・さあ。」

何言つてんだ？

「あの目。俺を殺そうとする目だった。」

そうなの？

「だったらどうした？謝れってか？だったらそれは出来ないな。逆にそっちが謝って欲しいくらいだ。」

我ながら嫌いな人にこんな当たり方をしたのは初めてだと思う。

「いや。むしろ逆だ。」

凜とした変態の声が俺の耳に入ってくる。

！？何か背中に寒気が・・・

「あれは感謝すべきだ。と言つか癖になりそうだ。」
あれ・・・？

どんどん俺は作業していた手を止め始める。

「うーん。上手く言えないけど・・・興奮・・・？」
「ビュン！！」

俺は即座にナイフを具現化し変態の顔面めがけ投げる。

しかし変態は驚いた顔つきでそれをかわす。しかしそれは完全には避けきれず、頬を掠めた。

チツ！！外したか。

「ウオツ！！危ねえな！俺が何したんだよ！！」

変態は怒鳴る。

コイツ気づいてねえのか？

「変な発言しただろうが！！何だよ興奮って！！気持ち悪っ！！」
流石にこんな奴と居るのはごめんだ。

「おふう！！その見下す顔もいいな！！」

変態が何だか惚気顔でこちらを見る。

それを見た俺はゾクゾクツと背中が震える。

これってまさか・・・

「もっと罵ってくれ。」

Mだ！

「こつち来るな！！作業しろ！！お前リーダーだろ！？ちゃんとやれよ！！」

「そうか！！照れてるんだな？」

変な目で顔を赤らめながら聞いてくる。

「話聞けよ！！ってかな物好きいねえよ！！」

「それは俺が魅力的だからか！？」

「違いよ！！変質者だからだよ！！いいからこつち来んな！！」

俺は片手でシツシツと払う。

「おおおっふいー！！ゾクゾクするぜ！！」

俺も背筋が違う意味でゾクゾクすんだけど！？

「ぐへへ・・・堪りませんなあ」

「すいませーん！！誰かおっさんを呼んできてー！！」

こんなやり取りが少し続いた。

あ、ちゃんと作業したよ？

え？あの変態か？おっさんに捕まって空の彼方へと消え去ったよ。

いやあゝ綺麗だった。よく見るアニメのやつをリアルで見た感じがして嬉しかった。

15話・変態はやっぱ変態。(後書き)

これから、へん・スカリオ君を温かい目で見てあげて下さい。

16話：刀の不思議。

どうも！丈人です！

只今、おっさんと買い物中です！！

まあ、買い物といつてもただ食材を買いに行くだけだけど。何か今日、子供の一人が誕生日なんだって。優しいパパだね？

「おばちゃん！！キャベツと鶏肉と・・・」

などとお話をしている。よく話している相手らしい。

一方俺は

「すみませーん！！苺とオレンジと・・・」

とおっさんのパシリとして扱われている。

俺的には断りたいけど、子供達の為だ快く引き受けてやったよ。

「はい。どうぞー」

材料を買う。といってもおっさんから貰った金できっかりお買い物しただけだけど。

今知ったんだけど、お金の通貨は高い価値から白金貨、金貨、銀貨、銅貨だけらしい。いやぁーお金の計算少なくていいよな！！

「ありがとうございます！！」

俺は一礼し、おっさんの所へ走って行く。

「おっさーん！買ってきたぞー！！」

「おー！あんがとさんー！！」

ニツカニカして、袋を受け取る。

そして俺とおっさんは歩いて帰った。

帰る途中後ろから何やら寒気がしたが気のせいだろう・・・いや、気のせいだと信じたい。

特に何の変化なくおっさんの家に到着し、居間へと向かう。

「ただいまー・・・おお!？」

おっさんが驚いた顔をする。

「どうしたんだよおっさん・・・!？」

俺もおっさんの向けている視線の先を見る。

そこには俺が具現化した積み木が巨大な、おっさんが入りそうなくらいの家が作られていた。

その中からキャツキャツと子供達の声が聞こえる。

・・・いやー、子供の集中力はすごいんだねー。

『お帰りなさいー!!』

と顔は見えないが子供達の声がする。

「どうしたんだ!？これ!」

おっさんが聞く。

「あら。お帰りなさい これねー、子供達が作ったのよー。」

とミースさんが片手を頬に当てながら答える。

「ほおー! 凄いもんだな!! あ、材料でございます。」

おっさんが頭を下げながらミースさんに袋を渡す。

「うむ! 宜しい!」

と笑顔で袋を受け取るミースさん。

「それじゃあ、二人は適当に寛いでてー?」

『はい!』

俺とおっさんはビシツと姿勢を正し、敬礼をした。そして、兵隊のように180度回転し歩きます。

そして居間の空いている真ん中のスペースで胡坐をかき向かい合う。

「そう言えば坊主、スカリオと模擬戦したんだって?」

「・・・何で知ってんの?」

俺はおっさんに言った覚えはない。だとしたら言ったのはリクさんかネルか変態だろう。

「ん? 今日スカリオの奴が言ってたからな・・・と言うかお前アイ

ツに何したんだ？喋っているときのあいつの顔凄い気持ち悪い顔して笑ってたぞ？」

ああゝ・・・

「・・・特に何でもないよ。それより、これ抜こうと思ったんだけど抜けなかったんだ。」

そう言い俺は二刀を持ち上げおっさんに見せる。

「レトン様の使ってた二刀か！」

「おっさん知ってるの？」

「ああ！！有名だからな！」

「詳しく教えてくれ！！」

やっと、情報が得られる！

「ああ・・・んじゃあ・・・」

とおっさんが話し始める。

「まあ、お前がレトン様が初代具現士って知ってるよな？」

「まあな。」

「んじゃあ、あの人が病死って知ってるか？」

「それも知ってる。」

「そうか。ならいいんだけどさ・・・」

？

「さ、話を戻すぞ？レトン様が10歳ちよいの頃だ。いつもの様に具現化をしていたそうさ。すると突然レトン様が吐血をし始めてな？医師に診てもらったんだが、体には何の異常も見つからなかったみたいで家に帰されたんだ。その頃からというものの、度々吐血を繰り返していたようだ。その何年か後16歳の頃にレトン様の父上が誕生日プレゼント代わりにその二刀をプレゼントしたらしい。」

「何の関係があるんだ？」

俺は頭の上に？（はてな）を乗せている。

「それも世界一の鍛冶屋に特注で造ってもつたらしい！！いいよなあゝ！！」

「話聞けよ！」

「おおっとすまんすまん！！それでその二刀には心があるらしくてな？ 気に入った人にしか抜けなくなる術をかけられているらしい。んで、不吉な事が起きれば被害を最小限に抑えてくれたらしい。」

.....ふにうに

「俺は気に入られてないのか!？」

俺は頭を抱えて嘆いた。

「まあ、頑張りな！！」

おっさんが肩に手を乗せてくる。

「ごはんが出来たわよー！」

とミースさんの声が今に響く。

「はい！」

と皆大きな返事をする。

すると、積み木の家に入っていた子供達が一斉に器用に出てくる。

言っちゃんだけど、

気持ち悪い
いい
いい
いい
いい
いい
いい
いい
！！

そんな事より！！誕生日パーティーの始まりだ！！

17話：バースデーパーティー！

『ハッピーバースデイトゥーユー！！おめでとう！！』

「ありがとう！！・・・ふっ！！」

と子供が蠟燭ろうそくを消す。

よくあるバースデイパーティーってやつだ。

パチパチパチ・・・と皆その子に向かって拍手をする。

俺もその一人だ。いやー、いいよねーバースデイパーティーとか。

俺はバースデイパーティーでいい思い出なんてなかったよ。

～回想～

『ハッピーバースデイトゥーユー！！』

「ありがとう！！ふうー。」

まあ、ここまででは良かったんだ・・・

「さて！ケーキ分けるわよ？」

この瞬間。

「俺がケーキ分けるよ。」

と詩音が包丁を手に取りニコニコと包丁を構える。

「詩音は危ないから僕が切るよ。」

と隣にいた兄貴が包丁を取り上げる。

「俺だつて！」

「だめだ！この仕事は僕が・・・！！」

という事を永遠に繰り返し、俺と両親、特に一緒にいた母さんは俺と一緒に居間を出て二人の争いが終わるまで学校の話とかをしていた。

～回想終了～

こんなまともなバースデイパーティーは何時以来だろう・・・
なんだか感動してきた。

よく見ると皆それぞれその子に誕生日プレゼントを渡していた。

それを見て俺は重大なミスをした。

やべえ！俺なんも用意してない！！

そう。俺は誕生日には必要性No.3までには入るプレゼントを忘れたのだ。

おっさんは絵本を、子供達は宝物などを渡している。
ん？ミースさんはって？

「このミース特製のケーキが最高のプレゼントよ」
とウインクをして答える。

まあ、正当だとは思うけどそりゃないぜ・・・

そんなことより何にしよう？相手は女の子だぞ？

なんにも浮かばねえ・・・

そんなことを考えているとその女の子が俺を見てニコニコする。
ええい！！こうなったら自棄だ！！

「何が欲しい！？」

俺は作り笑いなのがバレバレの状態で聞いた。

「えーつとねえ・・・。」

と上を見て考える。

頼むから簡単な物のように・・・

そう願っている女の子は答えを出したようで、こちらを向き笑顔でこう答えた。

「クマさんのぬいぐるみが欲しい！！」

と。案外簡単なもので心底ホッとした。

「よ、よし！！いいよ！どの位のやつ？」

と俺は微笑み質問する。すると、女の子は皆から貰った物を床に置

き、手を大きく広げ、

「こーいーな大きなクマさん!!」

と答える。

・・・フツ。任せな。と心でドヤ顔で答え、

「よーし!!やるぞー!!」

と力瘤ちからうぶを見せ想像する。

大きさはこの子と同じくらいでいいか・・・

そして数秒後にその子の前に想像通りクマのぬいぐるみがあった。

「これで宜しいでしょうか？」

「うん!!ありがとう!!」

と言いぬいぐるみに抱きつく女の子。

うわー!!可愛いなあー!!

『いいなあー!!』

と、羨ましそうに見入る子供達。

「皆それぞれの誕生日に造ってやるから。」
と、あやす。

『ほんとー!!?』

「ああ、本当さ。」

『やったー!!』

と喜ぶ子供達。

何か、喜んでもらうと嬉しいよね。

その後、皆とケーキ食って遊んで話してとやっていると夜中を回り
そうだったのでパーティーをお終いにした。
皆各自部屋に戻り眠りについた。

「今日は楽しかったな！」

と刀に話しかける。

あ、そうだ。ホルダーをもうちよつと綺麗に造ろつ。あの変態戦からそのままだし。

俺は集中し想像する。

「とりゃ！」

と、掛け声をかけて出てきたのは灰色の革製の丈夫なベルト。そして途中にはホルダーが取り付けられている。

まあ、少しずれたけどいいか。

「よし！出来たぞ！」

俺はあのホルダーから取り出し新しいホルダーに入れる。

「どうだ？前より居心地いいか？」

などと聞く。

「まあ、気に入ってくれたなら嬉しいな。それじゃあ、寝ようか。」

俺は部屋の灯りを消し、薄い月夜の光に照らされた部屋をフラフラと歩く。

あれだ。よくある明るい所を暗くすると、真っ暗になる、あるあるネタだ。

ようやくベッドに辿り着き、刀をベッドの上に置き、俺も横になる。

「お休み。」

そう言い俺は布団を少し深く被り二刀を抱きながら眠りについた。

17話：バースデーパーティー！（後書き）

読んで頂きありがとうございます

○（○

18話：サンドウィッチ

「ふぁ・・・おはよ・・・」

抱いていた刀に挨拶をする。

まだ頭がポーンとしていた。たまにこうなるんだよね。よく見ると、片方のほうに俺の涎が付いていた。

「あー!!やべー!!」

俺は慌ててそれを拭う。

「あわわわ!ごめん!・・・よし!これでいいかな?」

俺は拭いた刀を見直す。

うん。綺麗に為った!

そのまま居間に行き子供達とお話しながらご飯を食べておっさんと出勤する。なんか出勤って言われると俺が大人になった気分だ。なんだか心地いい。

「なあ、坊主。今日帰ったら稽古つけてやろうか。」

といきなりおっさんが言い出す。

「本当か!?!」

「おう!ただし、今日の仕事を人一倍働けばな!」

な、なぬう!

「や、やってやろうじゃないか・・・」

俺は少し冷や汗をかきながら仕事場へと向かった。

「ぬおおお!!」

俺は大声を張り上げながら具現化しては運び、具現化しては兵士に渡すという作業をハイスピードで熟す。今までの俺では考えられな

い程のスピードだと思う。その位働いているのだ。

「具現士様どうしたんだろ。いつもよりなんか作業早くないか？」

「あれだろ。早くこの国を復興させたいのさ。」

「成る程！流石具現士様！我々も負けてはいられないな！」

などとあちこちでちらほらと話が聞こえる。済まないな。本当は稽古の為なんだよ！！うおおおおお！！

「精が出るな。ガキ・・・いや、タケト。」

何か聞こえる。しかし、無視をする。今関係無い事だからな。そんなので足を止めたくない。

「うおおおお！！」

「ヘッ！いい無視っぷりだな。」

この声からして、あの変態だろう。しかし、変態の事だ。どうせ口く話じゃないだろう。

それよりお仕事、お仕事！！

「おいおい。冷た過ぎないか？まあ、この感じも好きだけだな。」

ブルブル！と背筋が凍る。

俺は追い払う為に

「消えろ。お前がいると目障りだ。」と暴言をはく。

「はっ！意外とシャイなんだな。」

誰がだよ。

こんな事が昼間で続いた。

只今、昼飯を食べる為のお昼休みです。

ミースさんに貰ったお弁当の入ったバスケットをおっさんとリクさんと俺とで囲んでいる。リクさんは昼前に血だらけのままこちら側に向かってきたので、一旦家に戻り、またここに手伝いに来てくれたのだ。

流石騎士団隊長！！

「よし！皆集まったし飯食うか！！」

「おー！！」

「今日の昼ご飯はなんだ？」

とリクさんが首を傾げる。

「今日はサンドウィッチだ！！」

「おお！！サンドウィッチ！！」

俺サンドウィッチ結構好きなんだよね！！特にカツサンドかハムのやつ！！

それじゃあ！『いったただつきまーす！！』

そう言いサンドウィッチに手を伸ばそうとすると・・・

「無視すんなよおおおお！！」

と後ろから変態が叫んでいる。

んだよもう少しでサンドウィッチにありつけるのに！！

「おお！スカリオ！お前のはハムツングング・・・ねえぜ！」

とキツパリと言い切るおっさん。

・・・容赦ねえな。

「そうだ。ムグムグ・・・ンクッお前の何か無い。草でも煉瓦れんがでもア〜ングング・・・食べている。」

リクさんもウンウンと頷きながらサンドウィッチを・・・って

「何で二人とも食ってんだよ。」

「お前も食べたらどうだ？タケト美味いぞ？」

「うーん！」

そっつい俺はハムサンドを手に取り頬張る。

わぁ〜お！デリシャス！

「あ・・・ああ！！俺のサンドウィッチが・・・」

とサンドウィッチに手を伸ばす。

だから俺達は透かさず見下す目で言ってやった。

「俺らのだよ……馬鹿が。」

18話・サンドウィッチ（後書き）

個人的におっさんが一番好きですwww
www
www
www

19話：稽古選択（前書き）

短めです><

19話：稽古選択

昼飯を食べ終え、あの変態が頂垂れているが無視して作業に戻る。
あ、リクさんは俺と同じ斑らしい。

まあ、あの変態がリクさんの代わりらしかったしな。当たり前か。

「さあ！皆頑張ってください！！」と、リクさんが拳を空に掲げる。

『おおー！！』と、それに答えるように皆も拳を掲げる。

「お、おおー！！」

俺は少しタイミングをずれたが同じポーズを取る。

「よし！取りかかれ！」

『いえああああ！』

と声を上げる。

・・・なんかこう、見てるとリクさんが王様に見えるな。

「ん？タケト！サボるな！」

リクさんの目がギロリと俺を睨む。

「は、はいいい！」

俺は一目散にリクさんから遠ざかる。こえええ！！軽く詩音を上回る怖さだ・・・！

俺は午前中のスピード以上で作業する。いつリクさんに殺されてもおかしくないからである。俺の頭の中では”動きを止めたら殺される”と永遠にその言葉を繰り返す。そのせいか人の会話も聞こえず、聞こえて来るのは俺の耳を掠める風の音だけ。
それを3時間継続していたらしい。

リクさんは良くやったと言ってくれ、おっさんも褒めてくれて、変態はまだサンドウィッチの事を引きずっているみたいだ。どんだけ根に持つんだよ！！

そう思いながら帰宅途中、

「なあ坊主。なに稽古つけてもらいたいかが決まったか。」
とおっさんが言う。

え？

「おっさんそんな事言ったっけ？」
俺は首を傾げる。

「ん？俺言ってなかったっけ？」

「覚えは無いよ。」

「そうか！そりゃ悪かったな！がははは」と豪快に笑う。

ったく。

「で、だ。今から言う3つの中からやりたいやつを選びな。」
するとおっさんは大きく息を吸い、

「一つ目は魔術。二つ目は精霊召喚。三つ目は体術だ。さあ、どれを選ぶ？」

おっさんがニヤニヤして聞いて来る。

うーん。魔法使いたいしなあ。あ、でも精霊ってのもいいしな。
うーん・・・

俺が悩んでいると。

「私はまずは精霊召喚からがオススメだ。」
とリクさんが薦める。

「え？なんで？」

「精霊を従えていた方が魔術の覚えも速くなるからな。」

「へエ。じゃあそれに決定!!」

「いいのかよ!!・・・まあ、あんたが決めたなら良いんだけどよ。」

「ああ!!頼むぜおっさん!!」

「お・・・おう!任せとけ!!」

そう言い笑いあいながらおっさんの家へ続く道を帰って行った。

20話：精霊について

『ごちそうさまでしたあ!』

と俺とおっさんが言いキッチンのほうに皿などを置き居間を出る。

「あまり張り切りすぎないでねえ〜!」

とミースさんがおっさんに注意を促す。

「おう! 軽めにやるわ!」

おっさんはそう言うと言居間のドアを閉め俺と一緒に2階へと上がって行く。

「あ、そうだ! 坊主確かさ、俺がやった本の中に精霊の本無かったか?」

「ああ、確かあったな。」

「それ持って来といてくれ。」

めんどいなあ〜・・・

「へいへい。」

「んじゃ、頼んだぞー!」

そう言うとおっさんは部屋の中に入って行っただ。

「行きますか。」

俺は一人で呟いた後、階段を上り自分の部屋へと向かう。

ガチャ・・・

「えーつとここだったよな。」

俺はあの折りたたみ式卓袱台の所を覗き本を取り出す。

「お! あったあった!」

俺は見つけてそのままその本を持って2階へと戻る。

「おっさん持って来たぞ〜。」

「おお! んじゃ、ここ座れ。」

とおっさんは自分の真向かいをバンバンと叩く。

あのおゝ・・・凄い床が揺れるんですが・・・。そんな不安を抱えながら渋々おっさんの真向かいに歩み寄りそこに腰を落とす。その際俺は本を抱え込むように胡坐をかき座った。

「んで？これ使ってどうすんの？」

俺は本に目を落とし、すぐおっさんを見直す。

「ん？じゃあ聞くが精霊って何かわかるか？どんな精霊がいるかわかるか？」

と聞いてくる。早口だなあ。

しかし、その質問には答えられない。知らないからだ。

「な？わかんねえだろ？そのために使うんだよ！！」

と笑いながら言う。

なるほど！！

「流石おっさん！！」

それとも俺がただの馬鹿なだけなのか。

「おう！！んじゃ、まずは精霊とは何か知つとかなきゃな！！まず
は本のええ・・・と、何ページだったかな・・・？」

などと考え込む。

その間俺はページの目次を開き、そのページを探す。

「おっさん。3ページだぞ？」

と俺がページ数を言うと

「あ！！俺が今言おうとしてたのに！！」

などと俺に言う。

絶対違うね！

「そこに確か精霊について書いているはずだから音読してくれ。」

ええ！？俺無理だよ！！だって国語とか古典とか全然駄目だったもん！！先生にボロクソ言われるわ、クラスの皆には笑われるわで散々な事しかないんだよ！！もう嫌！！

「おい。読まないのか？」

おっさんが聞いてくる。

「悪いなおっさん。俺読むの下手なんだ。」
「さあ！！諦めろおっさん！！」

「そつか。じゃあ尚更読め。」

「なんでだああああああああ！！」

「おっさん、てめえもあのドS女王様と同じSかよ！！」

「無理だつて！！」

「無理だと決め付けているから読めないんだ！！大丈夫だ！読めると心に暗示をかける！！お前は読める！！」

「おっさん・・・分かった！やってみる！」

俺は目を閉じ、暗い中自分に暗示をかける。

タケト。君は読める。そうさ！俺は具現士！これしきの事で諦めてはいけない！！

そう心で唱えていると、

「そうです。貴方なら読めます。誇りを持って・・・」

とどこからからか女の人の声が聞こえる。

とても透き通るような声だ。

しかしその声は聞き覚えのない声だった。リクさんやミースさんなどの声ではない声だ。

俺は目を開け辺りを見回す。しかし居るのは驚き顔のおっさんだけ。

「どうした？いきなりキョロキョロし始めて。」

「い、いや。何でもない！さあ！！やるぞおお！！」

「よし！始め！！」

俺は深呼吸をして、一呼吸吐いた（っ）ところで読み始める。

「えー、精霊とは。我々人間と共存する生物の一つである。人間と違い遙かに差がある知識、力を持ち我々人間に力を与えてくれる者である。えー、普段は森林、山岳などに生息しているが、場合によっては、国の中に居たりする事もある。」

俺は読むのを止めおっさんを見る。

「ん？まだ読め。」

「ヘイヘイ。」

チツ！

俺は1ページ捲り、再び読み始める。

「精霊とは契約が出来る。しかし、それぞれ精霊の契約条件に当て嵌まらなければいけない。当てはまった者を正式に主と見做す。^{みな}それまでその精霊と仮契約^{かりけいやく}を結ばなければならない。」

「ハイ次！」

もう疲れてきたよ！

「すうー・・・最後に注意！精霊が不満に思ったり、従うのを拒否した場合、強制契約解除が精霊達に与えられている。その後、その精霊が元主を煮ようが殺そうが許可される。」

こえええよ！！なにすればそんなこと精霊にされるんだよ！！

「よおおし！！次は精霊の種類についてだな！」

「まだ読むのおおお！？」

もうクタクタだよおおおお・・・

「いや、これは俺が説明してやろう！！」

「おおおお！頼むぜおっさあああん！！」

やっと休めるううう・・・

「ちゃんとページ開けよ？」

「はい。」

パラパラとページを捲り目次に戻る。

精霊の紹介 - 5ページ

と書かれていたので、そこを捲る。

・・・てか次のページだったじゃん。

「えー、ごほん。」

おっさんが咳払いをする。

「おっさん風邪？」

「違うわー!!」

「ですよねえ。」

「んじゃあ、説明するぞ？まず精霊には位があつてな？上下位精霊と単位精霊というんだ。まあ、根本的な違いは数だ。」

「数？」

数つてあの1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9とかの？

「そうだ。上下位は必ず2人以上いて、単位は1人だけなんだ。んで、魔術と同じでそいつ等には属性があるんだ。」

おっさんが言った属性は、火、風、水、土の四大元素に加え、氷、植物、光、闇、戦、狂等があるらしい。

結構多いんだな。

20話・精霊について（後書き）

少し長くしました。

21話：ペヒモス（前書き）

途中から

21話：ベヒモス

「結構多いんだね。」

「そりゃあな。んで、そいつ等の名前がその本に書いてないか？」

「ん？」

俺は本に視線を落とす。

確かにらしい事は書いてある。

「まあ、よく分かんないか・・・実際に見たほうが早いな。俺が契約しているのは火の精霊と、土の精霊なんだが、そのところを見てくれ。」

指示された通り、その欄を見る。書かれている名前は、

火の精霊

上位：フェニックス・イフリート

下位：サラマンダー

土の精霊

上位：ベヒモス・バハムート

下位：ノーム

と上下位精霊らしい。

結構聞いたことある精霊ばかりだ。

ほらあの某RPGのFだよ。

「その中のサラマンダーとベヒモスが俺の召喚出来る精霊なんだが見せてやろうか？」

と言ってくる。

「見たいです!!」

そりゃ皆見たいよな!!

よくある、「パパに新しい　買ってもらったんだー!!」と同じさ。

「そうか！んじゃあ、召喚してやるか！」

そう言うとおっさんは立ち上がり肩をグルグルと回す。

あんまり回し過ぎると肩の関節外れんじゃね？

と変な心配をする。

「おっと！忘れてた！坊主、部屋の隅に行ってくれねえか？・・・踏み殺されなくなかったらな!!」

「何が起きるんだあああああああ!!」

「当たり前だろ!!じゃねえとあいつ等収まんないって!!」

「どんだけでけえの!？」

この部屋も無駄に広すぎる。一つのデカイ公園並みの広さだ。これもなんかの魔法なのだろうか？それよりこんな広い部屋で踏み潰される程のでかさって!!

一体!？

「はいはい！行った行った!!」

「へいへい。」

そう急かされ俺は渋々と部屋の隅へと歩く。

そして、胡坐をかき直しその時を待つ。

「おっし！あいつ等は出たら床抜けるだろうから、シールド張らなきゃな。んっ　しよいやあ！」

おっさんはそう言うのと両手を床につけ、薄青い膜を部屋中にゆつくりと拡がらせる。

さっきの掛け声なんだ？んっしよいやあ・・・で。しかし、綺麗な色だなあ。俺は触ってみる。特に触り心地はさっきと変わらない。

「よし！んじゃあやりますか！」

おお！待ってました！

おっさんは片手を床につける。するとその床に赤い魔方阵が浮かび上がる。おっさんは片手を床から離れたその時、

ゴゴゴゴゴゴ・・・と、音を出しながら赤い光が部屋に広がり、

何かの影が見える。

これが、サラマンダーの影か!?

少しすると臙で光は消え、その姿を現す。

おおおおおお!!

緋色の光る肌! 燃え盛る背鰭!

そして、この小さな・・・え?

よく目を凝らす。

・・・見間違い無いよな? でも、大きさが・・・本当にトカゲぐらいなんだよ・・・

「どうだ!? 可愛いだろう!! こいつが俺の火の精霊、サラマンダーだ!」

と、サラマンダーを肩に乗せ優しく撫でる。

「ヘエ。」

「ほら、挨拶しな?」

とサラマンダーにいう。

「喋れんの!」

「当たり前だよ! な?」

【うん! おいちゃん!】

と小さい子供の声がある。

まさか・・・

「な? 喋ったろ?」

まじか! すごいえええ!

「あれ? おいちゃん。この人だれ?」

「この人は、具現士様だよ。」

【ヘエ! 凄いや! 僕、サラマンダー。具現士様の名前は?】

と、サラマンダーが聞いて来る。

「ん? 俺はタケトって言うんだ! 宜しくな!」

【うん! 宜しく!】

と俺に前足を左右に振ってくれる。

いい子だなあ！

「こいつは人懐こいからいいけど、他のサラマンダー達はそうは限らないからな。」

「え！？そうなの！？」

「当たり前だ。精霊も生き物だからな。じゃなかったら、感情なんて無いだろ。」

「確かに。」

【おいちゃん！ベヒモスは？】

「おお！今呼び出すからな？」

そこで俺は疑問が浮かんた。

「あ！質問！」

「ん？なんだ？」

俺はそこで疑問を聞いてみた。

「サラマンダーとかって普段どうしているんだ？」

「ああ、こいつ等は普段は私生活をしているぞ？」

と、けろっとした顔で言われた。

なんだと！？

「じ、じゃあ、いきなり呼び出すのか？」

「いや、なんて言えばいいかな・・・契約を交わした精霊達は精霊界と言うところに行き、生活するらしい。そこは人間が到底行けない世界らしい。召喚令が出されたら待合室みたいなところに呼ばれてからここに来るんだ。しかも、そこが不思議な部屋らしくてな？俺等の一分が待合室では一時間に感じるらしい。その間に、色々な事をしてからこの世界に来るんだ。」

どこのDBだよ。

「さて、ベヒモスを出すか。こいつが本命だ。さあ、隅っこへ戻りな。」

「あいよー！」

俺は戻り、体育座りをし、その時を待つ。おっさんはさっきと同じように行動し、魔方陣を浮かばせた。今度は黄土色の魔方陣だった。

すると、さっきのように光り出す。

その後、明かりが薄れ、閉じた目を開けると・・・

部屋に金色の毛並みの巨獣が居た。

しかも、半端無いでかさだ。

鋭い獣の目、長く鋭い犬歯。

俺は啞然とするしかなかった。

【グギヤアオオオオオオオオオオオ・・・!!】

と、ベヒモスが部屋が吹き飛ぶぐらいの叫び声を上げた。

俺は頬に何か冷たいものが蔦る感じを覚えた。

21話：ベヒモス（後書き）

誤字脱字報告待ってます^^

22話：あの狸（前書き）

あの狸の道具が・・・

22話：あの狸

どうも皆さん！おはよう、こんにちは、こんばんは！タケトです。
遂におっさんがベヒモスを召喚しました！！

めちやくちや怖いです。俺3適ちびったよ。

この年でちびるとかどうかしてるな・・・けど怖えんだもん。

【ああ？何か用かよ。】

と、どす黒い声が響く。声、口調からして悪そうな精霊だ。

「おお！悪いな！！俺もこいつもお前に会いたかったからな！！」
などとおっさんが

【わーい！！ベヒモスだぁー！！久しぶりー！】

と、サラマンドーが前足を振る。

【んで餓鬼がいんだよ。】

ベヒモス是不機嫌そうに言う。

「そう言うなよ！！な？」

おっさんがベヒモスに歩み寄り前足をバシバシと叩く。

おっさん！！おっさん！！殺されるから！！早くその手退けてえええええ！！

俺が心でそう思ってもおっさんは止めず永遠にバシバシと自殺行為に走る。

やめるんだ！！

「んでよ！呼んだ理由は、コイツだよ！」

と俺の方を見て笑うおっさん。

こつち見んなああああああ！！

【あぁん？何時からいた？】

あれ？僕気付かれてなかったのね・・・

「ずっと居ました・・・」

俺はか細い声で話す。

【あぁん！？！？もつとハッキリ物言えや！！】

と怒鳴る。

ひiiiiiiii!!

「まあまあ、そうカツカツすんなって!」

お・・・おっさぁーん!!

【ツチ! んで? この餓鬼がなんだって?】

「ん? ああ、こいつは具現土何だけだよ。精霊の事何も分かってねえんだよ。」

まあ、そうだけだよ。

【はぁん。こいつがねえ・・・じゃあよ。これ防げんだろ!!」
そう言って行き成り尻尾をこちらに向け叩きつけてくる。

なっ!?

ドオオオオオン・・・

と部屋に轟音が響く。

「坊主!!」

おっさんの声が聞こえる。

【ほう・・・】

ベヒモスが意外そうな声を上げる。

それもそうだろう。

俺は間一髪で下に穴を開け、下の階へと落ちたのだから。
え? 何を具現化したのかって?

・・・通り抜　フー

そうあの狸の道具だ。

いやぁー!! 駄目元でやってみるもんだね!
上手くいったよ!

今の俺ならどこにでも通じるドアを具現化出来る気がするぜ!!

「おーい！！大丈夫か！？」

と上からおつさんが叫んで俺の安否を確認してくる。

「ああ！！少し尻が痛いぐらいだ！！」

「そうか！！早く来いよ！！」

「ああ！！」

そう言いおつさんが顔を引っ込め、ガミガミとベヒモスを叱るような声が聞こえる。

そんなのいいのに。

おつと！！どこにでm（ry・・・を具現化してみよう！！
そういい念じる。

ピカッとその場にピンク色のドアが現れる。

よし！！さあ！！おつさんの所へゴー！！

ガチャ・・・

俺はドアを開け、飛び出す。

そこにはおつさんの姿もなく、ベヒモスの姿もない。

「・・・」

後ろを向き天井を見ると俺が造ったあれの穴が見える。

そう。俺はただのドアを造っただけだったようだ。

・・・俺はドアを消し、終始無言で元居た部屋へと戻る。
なにやってたんだろ・・・俺・・・

23話：アドバイス！

俺は元居た部屋に戻るとまだおっさんがベヒモスを説教していた。
・・・どんだけ長い時間説教してんだよ！！

そんな事を考えていると、おっさんがこちらに気付き

「おお！良かった！本当に無事みたいだな！」

と笑顔で言う。

「まあね！」

【ま、逃げるとはな。】

ベヒモスが悔しげに言う。

しょうがないだろ！！何で防げば良いのかも分かんかったし！！

「おいこら！反省せい！！」

【フン！！】

おっさんの説教も虚しく、ベヒモスは反省の色気も無い。

「ったく！まあ、こつからが本題だ。お前ら二人には無知なこいつにアドバイスをしたい。」

おおー！！なるほど！！精霊に聞いた方が詳しいと言う事か！！
俺が一人でウンウンと頷いていると、

【はいはい！！じゃあ僕から教えるー！！】

サラマンダーがおっさんの肩から身を乗り出し言う。

「うん頼むよ！」

【んとねー！精霊にも性格とかあるのは知ってるでしょー？】

「ああ。」

おっさんが言ってたな。

【だから、自分と気が合う精霊と契約した方が一番いいよ！】

「へえー！」

やっぱり一緒にいて楽しい奴という方がいいよね！

「ありがとう。」

俺がそう言つと、

【えへへーどういたしまして！】

と少し照れ気味で頭を掻く。

可愛いなあゝ！

「ほら！お前もなんかアドバイスしな！」

おっさんがベヒモスに言う。

【ツチ！わーったよ！・・・ったく。いいか？俺等精霊には契約条件ってのがあるんだ。】

「契約条件？」

【聞き返すな。叩き込め。それに該当すれば晴れて精霊共と契約が出来るってわけだ。これでいいだろ？】

「まあ、いいだろう。どうだ坊主。分かったか？」

おっさんが俺に尋ねる。

「うんまあ、分かりやすかったよ！」

「そうか！ならよかった！お前等精霊界に帰ってもいいぞ？ご苦労だったな。」

【はーい！んじゃまたねー！！】

そう言つとサラマンダーはおっさんの肩から飛び降り、床に落ちるスレスレで体が炎になり自然と消えた。

「すげえ・・・」

と自然とくちから溢れる。

【フン！退屈な時間だったな。もうこんなくだらなことで呼ぶなよ。呼んだらぶち殺す！！】

そう言つとその場からベヒモスの体が砂になり、サラサラと崩れ落ちる。不思議な事にその崩れ落ちた砂はゆかに残らず、床に落ちた瞬間に跡形もなく消える。

凄いみんな消えようだな。

「ふう！ま、これで少しは分かったかだろう。」

「ああ！為になった！」

「そうか・・・よし！今日はここまで！明日もやるから色々と予習しとけよ！」

「ありがとうございます！」

俺は頭を深く下げ、お礼を言う。

「おう！明日も早いからな！早く寝ろよ？」

「了解！んじゃまた明日ー！」

そう言い俺は自分の部屋へと走り、入り、電気を消し布団に潜る。

明日も頑張るぞお！

そう心に誓い二刀を抱いて眠りに着いた。

次の日、おっさんが慌てた様子見て俺の部屋に入り、俺をたたき起こす。

「おい！起きろって！女王様の招集がかかったぞ！」

「ふあああ・・・消臭？」

「違う！いいから早く来い！」

そう言いおっさんはおれを引っ張り家の外に出る。

エルストリアの城内の広場に兵士達がズラリと並んでいる。

何が始まるのだろうか？そう思う時、女王様が姿を現しこう告げた。

「魔狼、フェンリルがこの近辺で出現しました。直ちにこれを保護しなさい！」

と声を張り上げ言う。

フェンリル？

あの金髪兄ちゃんが乗っていたあのバイクか？

「なあ、おっさん。フェンリルってなんだ？」
頭がこんがらがったまま聞く。

「精霊だ。しかも、最凶最怖のな。」

「そんなに悪い奴なのか？」

「ああ。精霊の大半は人間との共存を主としているが、フェンリルは違ってな？人間を敵視しているみたいだ。」

「へエ。」

と、余談をしているとあつという間に女王様の話しは終わり、兵士達が一斉に城内を飛び出し、フェンリルの保護に向かう。

「おっさん。俺たちはどうすんの？」

「さあ・・・？」

23話：アドバイス！（後書き）

感想待ってます！

24話：ワンコと浮遊感！！

しょうがなく、おっさんと俺は女王様に話を聞きに王の間に行く。

王の間

「女王様。俺等も行った方がいいんでしょうか？」

おっさんが聞く。

「出来ればそうして下さい。」

「分かりました。」

そう言い俺等は小走りで城を出て、おっさんに着いて行く。

「おっさぁーん！どこ行くの？」

「ん！？アリエスの森だ！」

何処だよー！

「それよりさ！フェンリルの特徴とかないの？」

分からないと俺も探せないからな！

「うーん。強いて言うなら毛並みは白銀で、姿はさっき言ってたけど狼だよ。」

あれ？言ってたっけ？

「分かった！」

こんな事を話していると何時の間にか、大きな門の前にいた。そして、

「フン！又アアアアア！」

とおっさんが声を上げながら門を開ける。

しかも結構大きな門だ。

数十秒すると、

ドオオオオオオン

と門が完全に開いた。

門の目の前は木々が生い茂り、まるで熱帯のジャングルみたいなところだった。

多分此処がアリエスの森なのだろう。

その前に俺は何度も完全に開く前に行こうと言ったが、おっさんが「いいや！絶対最後まで開ける！」と子供のように駄々を捏ねるので仕方なく待ったのだ。

はぁ・・・

「よし行こうか！」そう言い歩き出す。

「おっさん。閉めないのか？」

俺がそう聞くと、

「いいんだよ。勝手に閉まるから。」

その言葉に疑問を抱きながら、門を出る。すると、

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

と門が閉まり始める。

「本当だ！」

「な！？言っただろ？」

と後ろを振り向き無邪気な笑顔で聞いてくる。

「うん！すげえや！」

俺もキラキラした目で答える。

何分か歩いていると、おっさんがいきなり身を隠した。俺もおっさんの手によって俺も木の影に隠される。何が起きたのだろう。

「こっちに居たか！？」

と荒れた声が聞こえる。俺が少し顔を覗かせると、居たのはエルストリアの兵士達のような身だしなみでは無く、真っ黒の鎧を身につけている。

「いや！こっちには居ない！」

「クソ！あの野郎、逃げるのだけじゃなく、隠れんばも得意ときやがった！」

「しょうがない！お前はあっち！俺はこっちを探す！」
「頼んだ！」

そう言うと、2人はバラバラになり探しに出かける。

「おっさん。あいつ等誰だ？」

おっさんを見ると、少し焦りの表情を見せる。

「あいつ等は、オルティガ。俺らの国をめちやくちやにした張本人だ。」

「な、なんだってえ！？」

分かりやすい演技をすると、

「馬鹿やつてる暇じゃねえぞ！下手したらフェンリルがあいつ等に捕まえられる！」

と、おっさんが恐ろしいものを見るように、あいつ等がいた場所をじつと見ている。

「も、もし捕まったら？」

俺もなんだか心配になって聞く。

「恐らく兵器として使われるだろうな。」

「そ、そんな！」

「安心しろ！だから俺等が先に保護するのさ！」
成る程！そう言う事か！

「んじゃ、俺も探してくる！」

そう言つて俺は先走つてしまった。

「何処にいるのかな？」

そこら辺をキョロキョロしていると、ある大きな木の近くで何か黒い物体があるのに気がつく。

俺が歩み寄ると、黒い物体がゴソゴソと動いた。

「うお！」

俺は少し驚いたが、よく見て見ると、黒い物体の正体は犬だった。しかも、体の周りに傷が何箇所もできていた。

大変だ！

犬に触ると、傷に触れたせいか、ジタバタとものがき始める。

「我慢してくれ！」

俺は全速力でおっさんを探した。おっさんなら何とかしてくれると思っただからだ。

しかし、何処を歩いても居るのはあのオルティガって敵国の兵だけ。しかも今までもがいていたワンコがいきなり動かなくなった。俺は最悪の場合を想定して、身体に手を当てる。

ドクンドクン・・・と鼓動が聞こえる。良かった！まだ生きてる！

早くおっさんを・・・そう思い、あたりを見回す。元来た道がない。そう。道がないのだ・・・いや、はつきり言う道に迷った。

どうしようおお！

早くしないとワンコが！！

トントン。

と肩をつつかれる。

ひい！

俺の思考はオーバーヒート寸前だ。

待て待て待て。

よく考えろ！もし借りに後ろにオルティガの兵士がいたとしよう。

うん。俺の勝ち目はまずない。いや、勝つ気もない。いや、やれば勝てるとは思ってないよ？本当。てか、振り向いたらどうなるんだろ？一瞬でザクリか？ザクリはやだよ！痛いもん。

それより、このワンコを手当しないと！そうだ土下座をして命乞いするか？いや、「お願いしますうゝ助けて下さいいゝ。」なんて言ってみろ！？

俺の首が吹っ飛ぶぞ？絶対あいつ等は敵国だったら容赦なく殺すだ

ろうな。けどオルティガの兵士じゃなかったら・・・

などと永遠に頭を廻る。

皆も一回はあるよね？

すると、

ガシツと俺の肩を掴み、グイッと強引に俺を後ろに向かせる。ああ、とうとう俺の人生もここまでか。最後にもう一度皆に会って感謝の言葉とか言いたかったな・・・

そう俺は心から悔やみながら人生に別れを告げる。しかし予想は外れ、立っていたのは、血みどろのネルだった。

ほんのりと、ネルから錆びた鉄の臭いがプンプンとする。

「ネ、ネル！！」俺が少し大きな声で名前を呼ぶと、

「少し静かにしろ。バレるぞ？」と、人差し指を立て、シーっとする。

俺はコクコクと頷き、静かに質問する。

「なんで血みどろなんだよ。」

「ああ、これか？これは、敵国の奴等と殺し合ってたらしかな。なに、心配は入らない。これは全部返り血だ。」

そう言う問題じゃね！なんか服に肉みたいなのがチビチビこびりついているんだけど！？

「それより、その犬どうした？」

ネルが俺の抱えている犬に目をやる。

「昏睡してるな。早く手当てしないと手遅れになるぞ？」

「どうしよう！」

「少し手荒いが我慢しな。」

そう言うと、ネルは俺を抱え上げ、垂直にジャンプする。凄い圧力だ。体がしたに引っ張られる感じだ。俺はワンコが落ちないように

優しく、ガツシリと抱える。

すると、エルストリアが見えた。しかし、見え方が違った。いつもは見上げる方だった俺の視線が、今は見下ろす方になっている。

すると、瞬間的に浮遊間に浸った。そして落ちた。

「歯食いしばれよ？舌を噛む」

その言うと、木のとっぺんに綺麗に着地し、次の木へと飛び移る。そんな事を何度も繰り返しているとエルストリア国内に入った。

「さ、着いた。早く女王様に見せな。一番手っ取り早い。」

ネルは俺をそつと下ろす。

服に血が少し付いた。あの返り血は少し固まっていたみたいだ。

「え？ネルは？」

「俺はまだフェンリルを探さないといけないんだ。」

「分かった。気をつけてね！」

「ああ。」

そう言うのと、また高く飛び上がり、国を囲む塀を飛び越える。

俺はそれを見届けた後、王城へと走る。

24話・ワソコと浮遊感!! (後書き)

少し長くしたいえああああああ!!

25話：干し肉って硬さどんくらいだろう？（前書き）

皆さんは分かりますか？

僕は分かりませんwwww

25話：干し肉って硬さどんくらいだろう？

「女王様ああああああ！！！」

俺は王の間へと入る。

女王様の元まで走っていくと、隣にいた年老いた大臣が女王様と俺との間に立ち俺を止める。

「どうなされた！具現士殿！」

大臣が慌てた様子で聞いてくる。

「わ、ワンコが！」

俺は抱えているワンコを大臣に見せる。

「わ、わんこ？」

大臣はワンコを見て驚いた顔つきで俺を女王様の元に通す。

俺は女王様に傷つき昏睡したワンコを見せると

「まあ大変！早く手当てしなくては！」

と言って俺の抱えているワンコをゆっくり優しく持ち上げ、女王様の太ももに下ろし、両手を翳す。するとその手が眩しく光り、ワンコに降り注ぐ。

すると微かだが、傷が無くなりワンコが動くのが分かった。

そうして数十秒するとその光は消え、女王様はふう。と一呼吸置く。

「大丈夫です！もう少し時間がたてば意識が戻るでしょう。」

その言葉を聞き、俺は一気に緊張が解れ、その場に崩れ落ちる。

「良かった！」

「それよりも何故この犬を私のところに？」

「ネルが、女王様のとこまで連れて行って見てもらった方がいいって言ったから。」

「そうですか。後で礼を言わないと・・・ですね。そうだ！タケットさん。この子を放して来てくれませんか？」

と女王様が俺に聞く。特に断る理由が無かったので、

「分かりやした！」

と快く引き受けた。

治った治った

俺はスキップをしワンコを抱えながら門へと向かう。

門に着くと、兵士が何人かいて、崩れ落ちている。俺は慌てて近寄り、安否を確かめる。

「大丈夫か！？」

「ああ、大丈夫だ。ただ疲れて。」

「そうか。お疲れ様。」

「具現士様はどちらへ？」

一人の兵士が俺に聞いてくる。

「ん？ああこいつを放しに行くのさ。」

俺はワンコに目をやる。

「犬？どうしてまた犬なんて。」

「アリエスの森で傷ついてたの見たからさ。ま、そう言う事だよ。」

「そうですか。気をつけて。」

「あい！」

そい言い門を出て、あの傷ついていたあの場所を目指す。前と違って目印を付けながら進む。

目印は、具現化した小石だ。

どこのヘングレと思われるかもしれないが、これぐらいしか思いっかなかったのだ。下手に目立つやつだったら他の敵にバレるかもしれないからだ。

そうして辺りをうろついているとあのワンコが倒れていた木の前にたどり着いた。

俺はまだ意識が戻っていないワンコを下ろし意識が戻るのを待つ。待たなければこいつがどうなるのか分からないからな。

数分後、ワンコがゆっくりと起き上がり辺りを見渡す。

「気がついた!!」

俺が大声を出すと瞬時にこちらを向き、俺を人間と判断した後毛を逆立たせ俺を威嚇する。

「ご、ごめんよ！驚かせるつもりは無かったんだ！」

本当です！許して下さい！・・・誰に謝ってんだろ俺。

しかしワンコは俺を威嚇したままだ。

今にも襲いかかって来そうだ。

仲直りがしたいので俺はポケットを漁る。

お、あつたあつた！

俺がポケットから出したものは・・・朝、途中おっさんに貰って隠し残した干し肉だった。

・・・なんで残したのかった？

固さが半端なかったんだよ。あれだぞ！？おっさんの噛む音、ゴリゴリとかバキバキってすごい音したもん！俺こっさり床に落としたら、カランっていったもん！

しかしそれをワンコにあげようとする俺もどうかしている。

しかし、ワンコの方は警戒を解き目を輝かせながらその干し肉を見る。

「あゝ、やっぱいる?」

俺はワンコに聞くと、さっきまで俺に襲おうとしていたはずなのに今は俺の左手にある干し肉を狙っている。

「はい!」

そう掛け声をかけ、干し肉を投げる。

「ハゲ!」

何時の間にか宙を舞っていた干し肉が黒いワンコに撃ち落とされ、餌食となった。

「ガリガリ!!バキバキ!!」

とおっさんが噛んだ時の音が聞こえる。

あっという間に干し肉を食い終わり、俺を見る。まるでまだ寄こせと言っているかの様に目を輝かせている。

幸いまだ干し肉はある。

俺が食う事はないからあげても構わないんだが。

カラカラ・・・

幾つか残っていた干し肉を全部取り出し、放り投げる。

あ、軽くだぞ?

ポトッと鈍い音をして地面に落ちる。

瞬時に干し肉を取りに行く。

そんなに好きなのかよ!!

そんな事していると周りがガサガサと騒がしくなる。

「ん？」

26話：焦り

よく目を凝らすと、全方位をオルティガの兵士に囲まれていた。その囲まれている先にいるのは俺と黒ワンコだ。

うん。詰んだな。

冷静過ぎるだろ俺！！
もう少し焦ろっや！

幸いワンコはまだ干し肉を食べている。

ジリジリと縮まる距離。

持っているものは、抜けない二刀だけ。

具現化すれば持ち物は無限大になるが、生憎何を具現化すればいいのかわからない。

いや、武器などを造ったところで勝ち目はない。
そう。もはや俺の死は・・・いや、俺とワンコの死は確実なものとなったのだ。

「ごめんなあ・・・」

俺はワンコに謝った。

ワンコは俺の方を向き首を傾げる。
今更ながら後悔した。

すぐにここに連れてきたから・・・

すると一斉に兵士が飛び出し完全に俺らを囲んだ。

「おお！エルストリアの兵か！こいつはいいぜ！ブツ殺してやる！」

そついい一人の兵士が俺に飛びかかる。

殺られる！！

俺は怖くて目を瞑った。

しかし相手は襲って来ず俺は目を恐る恐る開けると、あのワンコがその兵士に噛み付いていた。

その兵は藻掻くがそのワンコに抵抗出来ずそのまま動かなくなってしまった。

そう。ワンコが兵士を噛み殺したのだ。俺は初めて人が死ぬのを真近で見たのだ。

腰を抜かして立てない。

綺麗に光っていた黄緑の草が血で真っ赤に染め上がる。

ぷうんと血独特の錆びた鉄の臭いが鼻に突き刺さる。

ワンコは無我夢中でその死骸を貪り尽くす。

内臓や肉などの塊が飛び出る。

俺は気持ち悪くなり吐き気と目眩に襲われた。

兵士達は只々立ち尽くしたままだ。

するとワンコは周りにいた兵士達を睨む。

兵士達は怖気づき走り去って行った。

俺は未だに足の震えと、吐き気が収まらない。

ワンコは俺を向きゆっくりと近づいてくる。

口の周りは血塗れ。剥き出しの牙はさっきの綺麗な白では無く真っ赤というよりは黒に近い色になっている。

よく見ると、さっきまで抱える事が出来るぐらいの小ささだったワンコが犬よりも一回りデカイ図体になっている。何だかおかしい。これじゃあまるで犬じゃなくて狼………!!

そこで俺は一つの可能性を見出した。

もしこのワンコが狼だったら？

もしこの毛並みが黒では無く白銀だったら？

だとしたら目の前にいるのは……

フェンリル

しかし、それは悪魔で俺の推定。まだ可能性は低い。

確かおっさんはフェンリルは人間を敵視していると言っていた。

だったら問いかけるまでだ。あの時に会得したワンコはと話せる能力を使う。駄目元で!!

「ストップ!!」

するとワンコは止まり首を傾げる。

「いいか？今から質問するから答えてくれ。」
するとワンコはコクリと頷く。

よし！通じているみたいだ！！
そして俺は単刀直入に聞いてみた。

「お前・・・フェンリルなのか・・・？」

ビクンツ！！と体が大きく動いた。

【だとしたら？】

と聞こえないのにそんな言葉が頭に聞こえる。

「だったら証拠はないのかな？ってさ。ほら！毛の色とかさ。」

【ふん！これでいいか？】

そう言つと、あの黒かった毛がみると白銀と変わる。しかし血がついている部分はそのまま残り顔が血だらけなのがよくわかる。これでこいつが完全にフェンリルだと言う事が分かった。

しかし俺はこの毛並みについて見惚れていた。

「・・・綺麗だ。」

そんなことが口から零れる。

【当たり前だ。我は誇り高き魔狼だぞ？】

「だからってこんな綺麗な毛並みが普通って凄いな。」

【む？そうか？】

「そうだよ。」

俺が思っていたよりもフェンリルとはいい精霊なのかもしれない。と心の中で思った。

【さて、正体を知られた。これはもう生かしてはおけぬ。】
え？

【死ねええええええええええ！！】

フェンリルが飛びかかる。

生身の人間の俺が狼に追いつかれない訳がない。

俺は押し倒され頭に噛みつこうとするフェンリルの顔を押し戻す。しかし力が強すぎて、押し戻す事も出来ず、逆にギリギリと顔との距離を詰められる。

「ぐぐぐぐぐぐ．．．！」

【ほう？まだ耐えるか！】

当たり前だ！！耐えないと死ぬだろうが！！

【早く！早く殺さないと！！】

何故かフェンリルは焦った様にその言葉を繰り返す。

するといきなり目の前が真っ暗になり、俺は意識を失った。

26話：焦り（後書き）

後少しだ！w
w

27話：昔の恐怖1

ここは・・・

俺は仰向けの身体を起こし辺りを見回す。そこは俺がフェンリルに襲われた場所だった。しかもそこには、フェンリルがいた。

「ヒイ！」

俺は怯えて後退りをするが、何故かフェンリルは襲って来ず俺を見ている。

「居た！」

俺の後ろから何人かの子供の声がする。

次の瞬間

ビュン！と小さな塊がフェンリルに目掛けて投げられる。

小さな塊とは石ころだ。

フェンリルは驚きながら避ける。

【や、やめてよ！】

フェンリルの声が聞こえる。が、あの子供達の耳に届いて居ないかのように石ころを投げ続ける。

「父ちゃんが言ってた！真白な狼は僕たちに悪い事するって！だから消えろ！！」

「居なくなれ！」

などと罵声を浴びせる。

俺は我慢出来なくなり、フェンリルの前に立ち庇うようにして立った。

「いい加減にしろ！」

しかし、その言葉は子供達に届かず、また石ころを投げつける。俺は身を呈して受け止めようとしたが、その石ころは俺をすり抜けフェンリルに当たりそうになる。心臓がドキンと疼く。

後ろを振り向きフェンリルの安否を確認する。

【ガッ！！】

鈍い音が聞こえ呻き声も聞こえた。

そう。とうとう当たったのだ。

フェンリルはその場に突っ伏し動かない。

「やった！当たった！」

一人の子供が大笑いした。

それに便乗し、また投げつける。

俺は何も出来ず只々見ているだけだった。しかし次の言葉に堪忍袋の緒が切れた。

「やっぱり殺そうか！」

小さい子が口にする言葉じゃ無い。小さい子好きだった俺にとってはとても腹だだしい言葉だった。子供は子供でもやはり個人の性格があるのはわかっていたがココまでとなると我慢の限界だ。

「好い加減にしろよ？」

身体が熱くなるのを感じた。

「あれ！？こいつ居た！？」

「いいや！知らない！！」

その言葉からして俺が見えたのだろう。

俺はそっとフェンリルの頭を撫でながら子供の方を向き

「てめえら・・・命をなんだと思ってやがる。」なんて、何処ぞのヒーローが言いそうな言葉を発する。

「な、なんだこいつ!」

「帰ろう!?! なんかヤバイよ!」

俺は帰す気はない。

こいつ等を拷問する。命の尊さと言つ物を叩き込んでやる。

さっきまでの俺が考えそうもなかった事だった。

「「「ワー!!」」」

一斉に子供達は後ろを向き逃げ出す。

それを俺が逃すはずも無く、具現化したロープで子供を締め上げ木に吊るした。

「ウワン! 母ちゃん!」

「助けてー!」

「見てろよ?」

そう言つてそこに居た小鳥を捕まえ強く握る。

しかも子供達の目の前で。

「やめてー!!」

子供が泣き叫ぶ。

「何でだ? お前等がやろうとしていた事を俺がやって見せるんだぜ?」

正直俺も怖い。

鳥の心臓の鼓動も早まり、口も開いたままだ。

「ごめんなさい! ごめんなさい!」

27話：昔の恐怖1（後書き）

文少なくてすみません＞＜

28話・昔の恐怖2そして・・・（前書き）

やっとなります。

これから更新していくんで宜しくお願いします！

28話：昔の恐怖2そして・・・

しかし俺はやめずに力を入れ続ける。

「ああああああああああああああ！！」

とうとう子供が狂い始めた。

と言うより何秒かジタバタした後動きが止まった。

恐らく気絶でもしたのだろう。

本当はまだ痛み続けるつもりだったのだが、これ以上すれば危険だ
と思ったので子供を降ろし、フェンリルのほうを見る。

フェンリルはもういなくなっていた。

するとどうだろう。また意識が無くなり目を覚ませばほら、また地面に仰向けで倒れていた。

【・・・起きたか。】

と聞いた事のある声が聞こえた。

「フェンリル！！」

そう。紛れもない俺に襲いかかったあのフェンリルだ。なぜ判ったかというと、顔にあの兵士の血がついていたからだ。

それじゃあさつきまでのフェンリルは・・・

【・・・見たんだろう？あの忌々しい記憶を。】

とても弱々しく話す。

「・・・ああ。」

【どうだった？さぞ愉快だっただろう。】

愉快だった？何を言っているんだ？

「んな訳ないじゃん。」

【・・・何？】

俺もそう言う奴等をたくさん見て来た。不良にボコボコにされて、
また虐められる奴等を。

現に俺もそうだった。と言っても俺の場合1日2日で決着がついた

けどな。

ほら、兄貴だよ。

直ぐ俺の変化に気がついて一方的に聞いてきて俺が白状したんだ。案の定、その不良共は直ぐに病院送りにされた。

だからその気持ちはよくわかっている気だ。

「怖かったんだよな。」

俺も怖かった。何もしていかないのに行き成り殴られたし、蹴られた。

【黙れ。】

フェンリルからそんな言葉が出るが俺は無視して言葉を続ける。

「辛かったよな。」

俺も辛かった。家族にも友達にも言えなくて只々ずっと心の中に溜め込んだままだった。

「だからさ・・・【だからなんだ？仲良くしよう？巫山戯るな！人間風情が！！】

最後まで言う前に言葉を止められてしまった。しかしフェンリルが言ったとおり仲良くしようと言おうとしていた。

そりゃあそうだろう。似た経験をした者同士、仲良くしようとするのが普通だろう。

「巫山戯てない。俺は本気だ。」
ああ。本気だ。

【・・・ならば我を力尽くで認めさせてみよ！！】

するとフェンリルのいる足場から湯気なの冷氣なのかよく分からない物が漂う。

まじかよ。さつきも死にかけたのに真剣に戦うだなんて・・・イヤ
アアアアアアア！！

すると行き成りフェンリルが姿を消した。

【緩い。】

背後から寒気を感じた。振り向くとフェンリルが口に何やらあの漂っていた蒸気のようなものを溜めていた。

まさかあのよくあるなんちゃら光線とかを出す気か！？
ほんのりと薄く輝き、その明るさがどんどん増す。

ビュン！と蒼白の閃光が俺の身体の横を通る。

態と外したのか分からないが助かった。

【外したが、次は当てる。】

すると、フェンリルは魔方陣を自分の下に出す。

俺は体制を立て直しフェンリルの方を向く。

何が来る？また光線か？それとも他の技か？

そんな思考ばかりを頭に巡らせているとフェンリルが軽く跳ね上がり地面に着地した。

すると、同時に地面から鋭い氷の塊が空へと飛び立つかの様に凄

スピードで放たれる。

それがどんどん俺へと近づく。

無理だろ！避けねえって！

俺は何も思いつかずそのまま身を守る様に防ぐ。
股間に当たりません用に！

ガガガガガ・・・

とうとう俺の足元から無数の氷が飛び出す。

「うああああ！！」

幾つか身体に当たる感覚を覚えたが、痛くない。

「あれ？」

氷の襲撃が止んだのを見計らい俺は身体を見回す。

無傷だった。

服は少し裂けていたが傷一つ身体についていなかったのだ。

変わっていた事がもうひとつあった。俺の持っていた刀の一つが青い濁った光を放っていたのだ。

それを見ておっさんのある一言を思い出した。

確か、刀に心があって気に入った人にしか抜けなくて、もしそうだったら起こった被害を最小限にしてくれると。

もしこれが本当なら・・・

今の俺ならこいつ等が抜けるはずだ！！

俺は光った方の刀の柄を撫で、「頼むぞ。」と小声で語りかけてギョツとその刀の柄を握る。

そしてゆっくりと鞘から引き抜く。

走って飛びつこうとしたフェンリルが足を止め、目を細くしている。

その時、俺は初めて刀を鞘から全て抜いていた。

28話：昔の恐怖2そして・・・（後書き）

なんか思いついたので

新しい小説書いてみたんでそちらも

お時間があればお願いしますwwww

29話：ピンチ！！

「ぬ、抜けた・・・」

まだ光が消えない刀を見る。

そこで俺は気づいた。

刀の刃が無いのだ。

「あ、あれ？・・・ええええ！？」

何でえ！？

俺は刃があると思われる部分を触ってみるが何も感触がない。

だって、抜いた時確かにあった感じしたもん！擦り合わさる音聞こえたもん！

【ふん！脅かしおつて！】

素晴らしいフェンリルが飛びかかってくる。

「うわ！」

俺は咄嗟に刃の無い刀で防ぐ。

なにやってんだよ俺えええ！！

バチイイイイ！

と静電気よりも大きな独特の音が聞こえた。

瞼を開け、前をみるとフェンリルが倒れていた。

な、何が起こったんだ・・・

すると、行き成り頭に何かが入り込んできた。

”我が主、具現士様・・・”

と言う言葉が頭に現れた。

勿論声はない。

ただ何となく聞こえた気がするだけだった。

「誰だ！」

俺はフェンリルを警戒しながら心の中で呟く。

” 今、あなた様の持っている刀です。”

「こいつ？」

俺は刀に目をやる。

「だとしたなら聞きたい事がある。」

” 何故刃が無いのか・・・ですか？”

「！！！」

驚きだった。まだ言って一秒もしない内に答えたからだ。
多分自分でも自覚しているのかもしれない。

” それはですね、私の造りは他の刀と違うんですよ。”

「??？」

何を言っているんだろう？

” 私ともう一つの刀の事は知っていますね？”

「ま、まあ。確か世界一の鍛冶屋に作られたとか。」

” その通りです。そして・・・まあ、長くなるのでいいです。”

「何だよそれ！」

少し頭に來た。言おうとして途中で止めるのが大嫌いだからだ。

” 申し訳ありません。そろそろあの者が起きます所以、簡単な説明だけ教えます。”

「まじ！？」

俺はフェンリルに目をやると身体を起こそうと必死になっていた。

” いいですか？私の刃の部分は具現化をして頂ければ使用出来ます。”

「成る程。」

” 刃の部分に念をかけて頂ければ、どの様な形にも構造にも変化出来ます。ただ、形を変化すると、重量も変化するのでご了承を。”

と言う事は、あんまデカすぎると、重さも増えるって事か。
「わかった。」

” さあ、来ますよ！防ぎは任せて下さい！”

「了解！！」

【んん・・・ぬう・・・甘くみ過ぎておった。だが今度はそうはいかん！】

フェンリルが立ち上がり、また魔方陣を出したが、今度は俺の足元にあった。

気にせず俺は持っている刀の刃を想像する。

”随分と拘りますねえ。”

と感じた。

「頼むよ。」

”分かりました。”

念じ終わったので、目を開けると、まだ刃はついていなかった。

すると

【これで終わりだ。】

そんな冷徹な言葉を発した後、直ぐに魔法が発動した。

足元から出た吹雪が俺の周りを渦巻き、逃げ道を塞ぐ。

うう・・・寒い！

それと同時に俺の持っている刀の刃が根から順々に形成されていく。その間、吹雪から小さな礫が俺に絶え間なく襲いかかる。

幾らこの刀で防げていても、当たる感覚はするし、寒さまでは防ぎ切れていない。

そんな事を考えていると、刀の刃が出来上がっていた。

俺が想像したのは模造刀。

そう。形は刀だが斬れない刀だ。

これだったら、あいつも死ななくて済むしな。

そんな事より、ここをどう潜り抜けるかな？

上を見上げると、結構高いところまで渦巻いている。このままこの渦巻きに身を委ねようかな？でも着地出来なそうだし。

”我が主様。このまま突っ切って下さい。私が防ぎ切ります。”

「だ、大丈夫か？」

”私は平気ですが、主様には大きな負担がかかるかと。”

「どう言う意味だ？」

”はい。主様は寒さを感じておりますよね？”

「あ、ああ。」

”私と言えど、温度までは防ぎ切れません。そうなってしまうと、あの吹雪の温度が推定-50°ですから、大きな負担がかかると申しております。”

「と言う事は、-50°の中を潜り抜けるか？と言う事か？」

”・・・そうなります。”

oh・・・ナントコッタ。

”ま、まあ、一瞬ですから！頑張ってください！”

「いや！まだ行くなって決めて無いんだけど！？」

【所詮、貴様も他の人間と同じって事だな。】

フェンリルが呆れたように放つが吹雪の音でよく聞こえなかった。

「くっ！待ってやがれ！今そっちに行つててめえを捕まえてやる！
」

俺はそう言つて準備体操をする。

「一、二、一、二！よし！」

そおつと一歩踏み出す。

ひい！足が！

さっきよりも寒い！

視界も悪い。

目が開けられなくなってきた。

” 一気に行きましょう！大丈夫！抜け出して倒れて襲われても守りますから！”

あ、それ前提で言ってるのね・・・あー！もうどうにでもなれ！

そう思つて俺は吹雪に挑んだ。一瞬浮遊間と寒気が襲い、俺は止まりそうな足を必死に前に出す。数秒後やっと吹雪の中から脱出できた。

しかし刀が言つたとおり、俺の身体は動作を停止し、そのまま突っ伏した。

言葉も出ない。

【ほう。あの中から出て来るとは、中々だがもう動けまい。ゆっくりと、一秒一秒を楽しむ様に俺に近づいてくる。】

確かに動けない。

ふっふっふ。だがこっちには刀さわがいのだ！

「任せたぞ！刀さん！」

”すみません。私も動けません。”

出たのは余裕を表す言葉ではなく、謝罪の言葉だった。

「は？」

”軽率でした。まさか私まで動けなくなるとは思いませんでした。”

「と言う事は・・・」

た、食べられる！！

嫌あああ！痛い嫌あああ！誰か！誰か助けてえええ！

”落ちついて下さい！まだ方法があります！”

「グスッ・・・どんな？」

俺は弱々しく刀に問う。

”もうひとつの刀を説得してきます。”

「????」

” 幸い、あちらはもう勝ったつもりでいる様でじつくりと時間をかけて殺しに来るでしょう。”

「やっぱり殺しにくるんだ！」

” そうですが、その前に手を打つ為に説得しに行くのです。”

「な、成る程。」

” わかってくださったなら、そのまま辛抱していて下さい。”

「わ、わがっだ！」

” では。”

頼んだよー！！

それから数分経つと、フェンリルが俺の身体の周りを警戒しながら回る。

【さて・・・どこから食ってやろう？足か？腕か？それとも・・・顔か？】

顔はダメだろ！

30話：カウントと火達磨。

そんな事より、さっきからフェンリルが俺の周りをグルグルと回り続けている。

刀さーん！早く来てー！

” お待たせしました。”

俺の願いが通じたのか戻って来てくれた様だ。

「 んでんで！？なんて言ってた？ 」

” はい・・・あのぉ・・・ ”

と歯切れが悪く頭に伝わってくる。

「 何かあったのか？ 」

例えば力を貸さないとか。

” い、いえ。 そんな事は。”

「 そうか？ 」

” はい。 ただ・・・ ”

「 ただ、何だよ。」

” 非常に申し上げ難いんですが、残りの一刀は力を貸してやってもいいが、どうなっても知らないぞ？ って・・・ ”

あー、そりやまあなんと非常に意味深な・・・
けど、こんなやり取りを続けていたら俺は死んでしまう。

「わかった。そう伝えてくれ。」

” 畏まりました。”

すると、顔に何やら生暖かい感触がした。感触が無くなった後、やけに肌が冷たく感じた。
目だけを動かすと、フェンリルが俺の顔を舐めていたのだ。

【ふむ。中々柔らかそうだな。】

え？あれか？下味か！？

おいおい、まずいぞ！二つの意味で！

食べても不味いと言うまずいと、そろそろまずいと言うまずいだ。
言わなくてもわかるか！

しかし、ある事に気づいた。

どうなっても知らないと言われた恐怖より、顔を食われると言う恐怖の方が怖かった事だ。

い、嫌ああああ！

” 言っ て来ました。 それではカウント始めます。 5、 4、 3、 ”
刀さんが帰って来たと思ったら直ぐに数字を数え始める。

はい？カウント？え？何の？

「あ、あのおゝ・・・カウントって・・・何の？」

” 2、1、あ、はい。何でしょう？ ”

0

俺が刀に問いかけている時に、そんな数字が浮かび上がった。

そして、また一つ気づく。

俺、どっちにしろ死ぬんじゃない？

その瞬間、フェンリルが覆いかぶさる様俺の身体の上に跨り、に大口を開け、俺の顔を一口で食う勢いで牙を剥き出しにして迫ってきた。

それに比例するように、俺の身体中に熱が迸る様に熱くなる。
うん。うん。ジワジワくるわあ。

すると、ゴオオオオオオオオオオと、俺の身体から大量の炎が噴き出し、俺の身体は火達磨になった。

あっちゃい！あっちゃい！

こんな声ですんだらいいんだろうが、そんな余裕はない。
はつきり言っただけ息ができない。

苦しい。目も開けられない。

しかし、その炎は跨っていたフェンリルにも着火し、フェンリルも

火達磨になり跳ねて俺から遠ざかった所で転げ回る。

俺も転げ回る。

まあ、普通は反射的にするよな。

そしてわ何だかその熱さにも慣れたが、身体が動かなくなってきた。

その瞬間。

身体の上から、熱湯がかけられるように何かが流れてくる。

それはどんどん冷たくなって、ようやく冷水をかけられている事に気づいた。

しかし、誰がかけてくれたんだろうか。

目を開けようとすると、皮膚が溶けてくっ付いてしまったようで、開けられない。身体も手は刀を握ったまま開けない。

耳は聞こえない。全身の皮膚も溶けたようで何かと擦り合うだけで激しい痛みに襲われる。

しかしよく死ななかったものだ。

”主様。ご無事ですか？”

声が聞こえないせいか、他人事の様子に聞こえて腹立つ。

「この通りだよ。」

”申し訳ありません。残りの一刀を説教して、戻ってみると主様が転げ回っていて、少し経つと動かなくなったので、水をかけました。”

「あ、ああ。有難う。けどどうやって水を？」

” 刀にも属性がありまして、しかも私や残りの一刀は心を持っているので、勝手に発動できるのです。”

へエ。

「改めて有難う。けどもう一つ・・・説教や見ている暇があったら、早く助けて!？」

” 以後、善処します。”

「頼むよ。あと、この身体治せる?」

” 任せて下さい。”

すると、何かが身体を包み込み、気持ちいい感覚に襲われる。

まるで、水中の中にいるみたいだ。

身体が少し動かせたので、目を開けてみる。開けたが、まだ少し痛む。首をゆっくりと動かし、身体を見る。

まだ完治していないからか、とてもグロかった。

皮膚は無く、血と肉が剥き出しの状態だった。

うおえつぶ。

30話・カウントと火達磨。(後書き)

一日更新いよおゝ><

31話：休戦と火達磨擬き。

はあ・・・俺は首を元の状態に戻し、目を瞑る。

見なきゃよかった。

吐き気がヤバイ。

ん？そう言えば、フェンリルはどうなったんだろう。そんな事が頭を過る。確か、俺と同じく火達磨になったはずだ。そのまま放ったらかしにして、治療を受けてるけど、大丈夫だろうか。

”フェンリルなら大丈夫ですよ？”

俺の心を読み取った様に語りかけてくる。

「本当か？」

”はい。自分の氷で辛うじて炎を消したみたいです。”

「そっか・・・待てよ？つう事は、あいつはまた襲って来るんじゃない・・・！」

安心して安らかに閉じた目を不安で一杯にして開ける。

俺、結構心配性なんだよね！

”それはありません。”

きっぱりと、言い捨てる。

「何で？」

”それは、恐らくフェンリルの発動させた氷は絶対零度。つまり、自らも凍って動けなくなっただのではないかと。”

「じ、じゃあさ。凍ったまんま？」

さつきからわからない事だらけで頭がぐちゃぐちゃになって来た。

”それもあります。フェンリルが自分で出した氷なので、次の日になったら氷の中から出ているかと。”

「そうか。」

”・・・はい。これでもう安心でしょう。”

そう言い終わると、俺を覆っていた何かの感覚は消えた。それと同時に擦れると痛かったあの痛みが消えている。

「有難うな。」

お礼を言って、柄を撫でる。

”いえ。お褒めに預かり光荣です。”

「ははっ。堅っ苦しいなあ。もっとフレンドリーに話せないのか？」
はつきり言っであんまり話し方が堅いのは苦手だ。そういう人を相手にした事がないからどう話していいものやら分からないんだ。ま、相手は人じゃないけど。

”フレンドリーですか。・・・やってみます。”

「はいよ。」

おっと、そうだ。

俺はフェンリルに近づく。

” 主様。触るならばおやめになって下さいね？先も言いましたが、フェンリルの氷は絶対零度。もし触ってしまおうものなら、恐らく主様も凍ってしまうでしょう。そうなってしまつと幾ら私でもこれは防ぐ自身がないのでそこだけご了承を。”

と早口で告げる。

「あいよ。警告どうも。」

けど、刀が言う警告をする気はなかった。
空を見上げれば夕暮れ時。

そろそろ帰らないと、おっさんや、リクさんが心配するだろう。しかし、このまま放置するとフェンリルが逃げる可能性や、敵国に捕獲されるかもしれないので、保険をかけておくだけなのだ。

俺は檻を想像した。

それを感じ取ったのか、

” そんな必要はないかと。”

と刀が言う。

「いいんだよ。ただの俺の自分勝つてな行動だから。」

” はあ。”

そう言って、俺は集中する。

そして、ちゃんと形を想像出来たら、位置を決めそこに具現化する。

ガッシャン。

完璧な檻がフェンリルの氷のまわりにピッタリとはまる。

そして、焼け焦げた服を脱ぎ、具現化した服を着る。
そうしないと心配されそうだしね！

良し！

「帰ろう。」

そう言って俺はエルストリアに帰る。

おっさんの家に着くと、もう皆ご飯を食べていた。

「遅かったな。」

「何かあった？」

と、おっさんとリクさんが訪ねてくる。

「ううん。何にも。」

「おにーちゃんなんか、臭い。」

ちっちゃい子に指を指された。

な・・・何だと・・・？

「クンクン。んー、確かに何か臭うな。」

おっさんまで言う。

「それじゃあ、ご飯の前にシャワー浴びて来て？」
ミースさんが俺に言う。

「はい。」

返事を短くして、そのまま居間を出て、シャワー室へと猛ダッシュで駆け込む。

一刻も早く子供達に嫌われない様に良い匂いにしなければ！！

そんな事を思いながら、身体を凄い勢いで泡立てたボディタオルで擦る。火達磨の時ほどではないが火が出そうなくらい凄い熱かった。

32話：対策

皮が少し剥けてしまったが気にせず擦り、泡を洗い流す。洗いすぎでよく見えなかったけど全身真っ赤だった。しかもお湯なだけあってヒリヒリする。

「ふう。」

そのまま上がり、身体を拭いて服を着て居間へと戻る。

「ただいま。」

「お！良い匂いだな！！」

「ほんとだー！おにーちゃん良い匂いー！！」

先ほど俺を臭いと言った子供が満面の笑みを浮かべて言う。よっしゃああああああああ！！

「けどずいぶん早かった。」

リクさんがなんか不潔な眼で俺を見る。な、何でだ・・・？

ちゃんと身体洗ったし、服だって新しいのに変えた。けどリクさんは何でそんな死んだ目で俺を見るんだ？

「多分、シャワーを浴びるのが早すぎたからじゃないかしらあ？」
などとミースさんが・・・あれ？

「ミースさん。俺の心読んだ？」

俺が尋ねると、

「え？何言っているのかしら？」

と、とぼけた様に顔をキョトンとする。

「・・・」

ミースって綺麗だなあ。

「あら！そうかしら？嬉しいわあ！」パアアア

と俺の顔を見て笑顔で喜ぶ。

「やっぱ読んでたんじゃないですか！？」

これで俺の疑問も解決した。

「あらあ。私を騙したの？・・・いけない子ねえ。」

何故かミースさんの背後に何か黒いオーラが見える。俺が周りの人に目をやると、おっさんは目で俺に早く弁解しろ！と言っていた。リクさんも同様だ。唯一子供達はニコニコと俺の顔を見ていた。

「い、いえ！全然！ほ、本当の事です！僕がミースさんを騙す訳ないじゃないですか！アハ！アハハハ・・・」

俺が笑い飛ばすと皆も合わせてくれた。

そして、笑いが消えると少しの静寂が流れる。

「・・・そうよねえ！タケトさんがそんな事するはずないですものね！すう・・・ふう。それじゃあタケトさんの分の料理を持って来るから待っててね？」

そう言いルンルンとキッチンへスキップしながら向かう。

た、助かった～！

こっそりおっさんが手招きして来たので耳を寄せると

「よくやった。」

と小声で褒められた。

飯も食べて子供達とじゃれあつて、そろそろ寝る時間。

「坊主。明日も早いからな。気を引き締めておけよ！」

「わーってるって！お休み！」

俺はそう言つと颯爽と部屋まで走る。

よし！

フェンリル対策を練らなければ！！

思い立つた俺はおっさんから貰つた書物を全て横に並べ、使えそうな本から読み始める。

一番最初に読んだのは精霊集だ。

確か、フェンリルは氷の精霊だったから載っていると思ったのだ。

そのページを捲ると、レトンのような写真では無く、ただの絵だった。

何でだろ。

そんな事を思いながら読んでいくと、

フェンリルに出会つたら、写真なんて撮つてはいけない。フェンリルがキレて食い殺すからだ。

と書かれていた。

おおそつ言つ事が！！

そんな呑気に思いながら読み進める。

色々まとめるとこう言う事らしい。

・出会ったら固まれ。必ず動くな。

・精霊にしたいのなら、死を覚悟で挑め。

・フェンリルの吹く息吹は最終的には凍らせるが、その間は極寒と灼熱を交互に感じさせるらしい。

・もし、自分の精霊にした事が公けに暴露た（ばれた）場合、自身も他国から狙われるだろう。

との事だった。

33話：魔術

そしてその部分に具現化をした付箋を挟め今日は休もうと床につく。

次の日、おっさんと建物の修復へと向かう。

「今日は坊主は俺の方だぞ？」

「えー！マジかよー！！」

「おいおい、そんな嫌な顔をしなくってもいいだろーが！」
ハハハと笑いながら作業を進める。

「随分直ったよなあー・・・」

おっさんがしみじみと言う。

「ま、まだまだかかりそうだけどね。」

なんか空気読んでねえな俺ww

「そうかもしれないけど俺等からしてみればここまで直ったのは久しぶりだよ。」

何時もなら俺の言葉に反応するおっさんだが今回は全く反応せず、晴れ渡り、何一つない虚空の空を見上げとても優しい笑顔を溢していた。

そんなに嬉しい事なのか？

すると空を見上げるおっさんが行き成り悲しい顔になり

「前はなあ・・・」

などと語り始める。

あの・・・作業・・・

その話が10分以上語り続ける。
それを聞いた俺はシヨックを受けた。

何でも直しても直しても敵国に攻められてまたやり直し。その繰り返しばかりだったらしい。

「ま、俺等は根が強いからそんなんじゃへこたれる訳なかったんだけどな！ガハハハ・・・」
と大笑いをしていた。

あっという間に昼になり、俺とおっさんは稽古に移る。

稽古は前とはさほど変わりわしなかった。

時間が少々余ったので、おっさんが

「魔術でも教えてやるか。」

と言ってきた。

「マジで！？」

「ん？まあな。でも簡単な魔術だけだぞ？」

「わーってるって！」

俺はウキウキしながらおっさんの次の言葉を待つ。

何やんのかなー？

「ま、ガキでも出来る奴だな。いいか？見てな。」

するとおっさんが人差し指を立てる。

するとボツ音を立てた後、ちいさな火の玉が人差し指の上にプカプカと浮かんでいた。

すげー！

俺は心の中が凄く熱くなった。とても俺にとっては物凄い感動出来る出来事だったのだ。あっちの世界だと一生見れるはずの無い事が見れたのだから。

「ま！やり方からだな。」

そう言い、俺に手解きをしてくれた。

「いいか？まずは炎を想像するんだ。」

おっさんは俺にとって、具現士にとつての核になっている想像をし
ると言った。

俺は言われたとおり想像する。

赤い、メラメラ何でも思つた事を想像した。

「そしたら、その炎の特徴をしつかり思い出せ。」

言っている事はよく分からなかったが、多分こつこついう事だろう。

俺は火達磨になつた時を思い出した。

それしかないじゃんか！

「いいか？より感覚や特徴を明白に思い出せているかいなかで威
力が全然変わってくる。そしたら一気にその想像を人差し指の上に
解放する感覚を想像したら放て！」

はい！？どういう事！？放つてどうやって！？

”主様。放つとはそのままの意味でございます。人差し指に力を入
れ出る！と念じるのです。こう言えば理解して頂けるかと。”

「刀さああああああん！！」

ありがとおおおお！！おっさんよりわかりやすいなおい！！よ
つしゃあ！やってやるぜ！

俺は決め刀さんに言われた通りに念じた。

出る！！

ゴオオオオオオオオオ

俺とおっさんのいる部屋が劫火の波に呑み込まれた。しかし、刀さんのお陰でなんとか怪我をせずにすんだ。

しばらく経って何故か部屋はあまり被害がなかったみたいだ。見渡しても少し焦げている程度だった。

「あ、有難う。死ぬかと思った。おっさんは！？」
俺はおっさんに問いかける。

「あ、え？あ、ああ。大丈夫だ。」少し動揺していた。そりゃそうだよな。行き成りだったもんな。俺も怖かった。

「・・・お前。何があった。」

33話：魔術（後書き）

読んでくださる方々いつもありがとうございます!!
これからもよろしく願いします!!

34話：調整と発狂

おっさんが真面目な顔で聞いてくる。

俺はおっさんが何を聞いているのか分かった。

確か感覚や特徴をハッキリ覚えていないかで威力が変わると言っていた。多分おっさんは、お前に何があつてあんな異常な炎が出せるんだ。

と言いたいんだろう。

あれをハッキリ言っても多分笑われて信じてもらえないだろう。

〈想像〉

「フェンリルとやり合った時に体が凍っちまったみたいで俺には何もできなかったら刀に頼んだら火達磨になっちゃったんだ？」

「え？wwwちょw大丈夫か坊主www」

〈終了〉

こんな事になりかねん。

「ん？どうした？言いにくい事でもあったのか？」

「ま、まあ・・・そのお・・・。」

どう言い訳をしよう・・・

そんな事を考えていると

「ま、そんな言いたくない事ならこれ以上深入りしないけどな、言いたくなったら言ってくれよ？あんまり辛い事とかだったなら話は聞いてやるからよ。」

おっさああああああああああん！！

輝いてるよおおおおおおお！！

何時振りだろうか、おっさんの後ろが輝いて見える。

「ありがとう。」

「良いつてことよ！それよりあの炎を調整できるようにしないとな
！！」

そう言い調整の練習に打ち込む。

そして大きさも調整出来る様になり、少し練習をした後にフェンリルのいるアリエスの森に行った。

昼の食べ残しの干し肉オツケー！！イメトレオツケー！！よし！これで闘って勝つぞー！

俺は勝つと言う想いを拳に込めながら全速力で走る。

そしてフェンリルのいるあの御神木のある場所に出た。

檻の中にいるフェンリルを覆っていた氷は刀の言ったとおり溶け切り、そのなかで身体を丸め寝ていた。

「よー」

俺が軽く挨拶をすると、薄っすらと目を開けこちらを見る。そして、直ぐにそっぽを向く。

「あ、そうだ！干し肉を持って来たんだけど食うよな？」

そう言つと

【我を餌付けようとしても無駄だぞ？】
なんて言い出したんだ。

「おいおい。ただ腹減ってるだろうから腹ごしらえて事でさ、な
？」

餌付けってなんだろう？

よく意味分らないんだ。

そう言つてポケットに手をつ突っ込む。するとたんまりと入っていた干し肉が少なくなっているのがわかった。

まず檻を消し、解放する。

【やっぱり貴様は具現士だった様だな。】

「まあな。悪いけど、少ししかないんだ、いま拾ってくるから待ってるよ！？絶対だぞ！！」

そう言つて俺はあつた干し肉を投げ落としてしまった元来た道を行く。

「あつたあつた！運が良かった。全部固まって落ちてやがる。」

広い集め、御神木の場所へ戻る。

「あつたぞ！これ食つた後勝負・・・だ・・・から・・・。」

俺は言葉をなくし、持っていた干し肉を地に落とした。

フェンリルの身体が血塗れ。返り血じゃない。ただのフェンリル自身の血。その周りには血のついた剣を持っているオルティガの兵士。

俺は直ぐに悟った。

こいつ等がフェンリルを殺つたんだ。

俺はそこでガラスが割れた様に頭の中が弾け飛び、

狂
っ
た。

34話：調整と発狂（後書き）

更新遅くなってすみませんでした。

35話・夢と命と誓い（前書き）

次話はキャラ紹介に使いたと思います！！

それしか頭になかった。

散々人様の国を壊し、生きている者を容赦なく殺す。そんな奴らが生きていると思うと・・・俺らと同じ人間だと思っただけで反吐が出る。

他にもたくさんいると思うが、まずは一人でも多く減らそう。

「あつれ〜？逃げないの？あ、分かったー！！怖くて動けないんだろ？だいじょーぶ！すぐに楽にしてやるからさあ。」

兵士は持っていた剣を相手が振りかざす。

すると突然世界が止まって見えた。

「・・・！？」

俺は体を動かしてみる。

他の兵士は動いていないみたいだ。

「・・・」

”主様・・・”

ハッキリではないがそう聞こえた。

「なんだ。」

”もう一刀が話したいことがあるようです。”

あの火達磨野郎か。

「頼んだ。」

しばらくすると

”・・・”

言葉は感じなかったが雰囲気があからさまに違うのがわかった。あの刀さんを感じた時はとても涼しい風が体を駆け巡っていた様だったが今は灼熱の炎が溢れだしそんな感じがする。

”・・・おい。あいつ等が憎いか？”

「・・・ああ。」

”どんな風に？”

どんなって・・・

ただ感情に身を委ねて何も考えていなかった。

「・・・人間として。あんな奴らが同じ人間を語ってるなんて思うだけで俺が・・・俺という人間の存在が嫌になってくる。」

”それで？”

「は？」

”それで本音は？”

何を言っているんだ？

これが俺の本音だ。どこも間違っているところはない。

「助けてやりたい・・・守ってやりたい。」

俺の口が勝手に喋っていた。頭には憎しみだけしか無い筈なのに。
な、なんで・・・

”何をだ？”

あの、灼熱の感覚がドンドンと優しく・・・というよりも弱くなっている。

「フェンリルを・・・いや、あの国も、世界に平和が訪れる事を願っている奴を・・・その為に俺はこの世界にいる。一日、一秒でも早くその願いを叶えてやりたい。」

”その為に何をしなければいけない？”

「戦う！！生き物全てに笑顔を取り戻すために！！」

”あなた一人でか？”

「それは・・・」

痛いところをついてくる。この一刀が言っている事は分かっている。あなた一人だとできないだろう。と言っているのだろう。しかし、分からないのだ。俺一人だと何もできない。だからといって皆俺をどう思っているのか。俺が手を差し伸べたら皆その手を引いて一緒に夢、希望の実現へと歩んでくれるのか。

”怖いのか。他の者が自分の夢物語に乗ってくれるのか。”

「っ！！」

図星だった。俺は何も言えずただ下の草を見つめる。

”その答えは俺にもわからない。ただ、ついてくる奴はついてきてくれる。これからそいつ等を増やしていけばいい。違うか？”

その通りだ。

けど増やし方が・・・いや、その前に増やしていけるか心配だ。

”・・・少なくとも俺とあいつはお前の夢物語に付き合ってる。”

「え！？」

”二度も言わない。”

「本当か!？」

” さっきも言っただろう。二度も言わない。”

俺は心底嬉しかった。

俺と一緒に夢を叶えようとしてくれる人・・・いや、刀か。それがいたから。

” ま、その前に軽々しく人を殺そうと考える事。もう少し同じ人間として受け止めてその命の重さを弁えた上で・・・殺せ。”

「殺してもいいのかよ!？」

俺は勢いあまりツツコンでしまった。

” やつと元に戻ったか。”

まさか・・・

「お前ワザと・・・」

” いや、本気だ。”

「そうですかあゝ。」

” これを誓えるか？”

俺の答えは一つ。

「当たり前だ!！」

” 分かった。俺もお前に力を貸そう。”

そう言つと俺の持つ一刀が緋色に輝く。

” 今からこの空間を元に戻す。俺を抜く準備をしておけ。 ”

「あ、ああ。」

俺は言われた通り柄を握り抜刀の構えをする。
なんか行き成り緊張してきたああああ！！

” いくぞ。3、2、1、0。 ”

兵士の右腕が勢いよく振り下ろされる。

「ああああああ！！！」

俺は力強く刀を抜いた。

ザシュツ

相手の体を切り裂く感覚が手に広がる。

・・・ドサツ

相手が俺に倒れ掛かってきた。

ビックリしたが、すぐ正気に戻る。いつもと違ったのはあの錆びた鉄の匂いがしなかった。

兵士を地面に下ろし、握っている刀を見る。

その刀はもう一刀の刀と対照的に激しく燃え盛るような緋色の光を放っていた。

36話・キャラ紹介（前書き）

続きます。

36話：キャラ紹介

作者「どうもー！作者でえゝす？今日はお話しを休んでこの作品に出てくるキャラクターを紹介したいかと思ひますゝ！」

『わー！！』

作者「それでは早速やつて行きましよう！！まずはこの方！この作品の主人公！！おかざきたけと丘崎丈人君です！！」

丈人「ど、どうも／＼／」

作者「お久しぶりだねゝゝ！！」

丈人「そうっすね！」

作者「後で話しの場を設けるのでまずはモニターにあるプロフィールをご覧ください。」

名前：丘崎丈人 おかざきたけと

性別：男性

年齢：17

誕生日：4月12日

趣味：妄想、音楽鑑賞

特技：イメージを人より高度にできる。

使用武器：刀

好きな・・・音楽、ご飯、そうぞう自分の世界
嫌いな・・・悪人、トマト

主人公

空想や妄想が大好きな少年。

容姿は、髪が黒、目は茶色。どちらかと言えば細身な方だ。家や学校で暇な時間があれば自分の妄想に入り込む。

特技の通り、イメージ力が凄いため昔から美術や、家庭科、技術などは全て5。その他他の教科は普通。

担任は「もう少し先生と会話を増やして欲しい。」と語る。

部活動は一年の頃は水泳部に所属。しかし、二年生になつたら退部理由は泳ぐ度に何故か足を攣つてしまふからだ。そのため、ろくに部活動を出来ず一年を過ごした為、退部したのだ。

作者によって異世界に送り込まれる。その際に授かった能力、イメージを物体化、具現化させる能力と伝説の具現士レトン愛用の刀を得る。

只今敵兵と戦鬪中。

作者「はい。まず丈人君は言いたいことあるかな？」

丈人「金沢てめえええええ！」

作者「担任兼ね国語教師の金沢先生のことですね？」

丈人「ああ。アイツいつも俺を変な眼で見やがるんだ。」

作者「成る程。何となく気が合いそうですね。」

丈人「なんで!？」

作者「さ、て、と。次の方は……」

丈人「無視かよ!!」

作者「さっきも言った通り話しの場を設けるんで勘弁してちょ!!
つてことで、二人目の方はヒロインのリク・アナスティアさんです
!!」

リク「よ、よろしく。」

丈人「あ、リクさん。」

リク「ああ、久しぶりだなあ。私ヒロインだったのにこの頃出番が・
・」

丈人「ま、まあまあ!!」

作者「大丈夫!!これを機会に次からドンドン出していくから!!」

リク「本当か?よろしく頼むよ。」

作者「任せてちょうだい!!それではまずはモニターにあ(r)y」

名前:リク・アナスタシア

性別:女性

年齢:16

誕生日:5月29日

趣味:散歩

特技:魔術5式

使用武器:ランス、名称ゲイ・ボルグ

好きな・・・:住民、子供

だっけか

嫌いな・・・：オルティガ

ヒロイン

エルストリアの騎士団隊長。

容姿は、髪が金、目が碧。背は丈人より少し小さい。

異世界で丈人の存在を一番初めに知った人。

デガルドの家から出勤している。何故デガルドの家から出勤しているかと言うと、まず部屋が豊富、そして何より子供をこよなく愛している正義のお姉さんだからだ。

丈人をこの頃意識している。

特技の魔術5式とは魔術、つまり魔法を一気に5つ出せる難易度が非常に高い技だ。

只今、帰宅途中。

作者「はい。何か言いたいことは？」

リク「年齢があやふやだ！！ハッキリさせて欲しい！！」

丈人「あれ？俺を意識つてもしk・・・」

リク「違う！！お前の考えていることとは別だ！！」

丈人「ですよねぇ」。

作者「いいねぇ青春だねぇ」。

丈人「違う！！」

作者「はいはい。それでは次の方は、身体能力が他より長けているネルオーネ君です！！」

ネル「……」(なんで俺まで……)

丈人「ネルもか。」

リク「そうガツカリするな。」ニヤニヤ

ネル「楽しそうにするな。」

作者「さて！早速プロフィールに、ドン！！」

名前：ネルオーネ

性別：男性

年齢：17

誕生日：9月10日

趣味：観察

特技：瞬撃

使用武器：ダガー

好きな……：高いところ、パン

嫌いな……：兄

もう1人の主人公と言っても過言ではない

女王様直属の部隊、クゲンの隊長。

魔術と武術、どちらと聞かれると断然武術派の人。その印に武術家の憧れ瞬撃を覚える。

部隊では、どちらかと言えば厳しいがプライベートや任務遂行中は隊員に気を遣う。

オルティガに兄がいるらしい。昔は仲が良かったらしいが今では縁を切り対立している。

只今、任務中。

作者「さて。何か言いたいことは？」

ネル「あいつの事は思い出したくもない。」

丈人「へえ、ネルに兄貴いたんだあ。リクさん知ってた？」

リク「いや、何も話さないから。」

ネル「話したくないことだってある。察しろ馬鹿。」

リク「なっ!？」

作者「さて、喧嘩がおつ始まる前に次行きましょう!!次は我らが守護神!デガルド・シャープネス!!」

シーン・・・

作者「あれ?ええとなになに?少し時間がかかるらしいので次の方を先に紹介してください。・・・なんでえ?」

丈人「だとしたら、次は誰なんだ?」

ネル（早く終わってほしい・・・）

作者「・・・・・・・・スカリオ・ビフォルマ・・・・・・・・」

丈人「・・・チェンジは？」

作者「ないだろう・・・しょうがないさっさと終わらせよう。」

リク「そうだな。」

作者「それでわどうぞ。」

スカ「ジャジャーン！！皆のヒーロー、スカリオ・ビフォルマ参上
！！」

作者「それではモニター、ドン。」

スカ「なんか早くない！？」

丈人「気のせいだよ。」

名前：変態

性別：ホモ

年齢：21

誕生日：1月27日

趣味：丈人弄り。

特技：無詠唱

好きな・・・：丈人

嫌いな・・・：バカ

驚異の変態

以上。

スカ「なんか扱いが酷い!!」

37話：キャラ紹介2（前書き）

次話から話を進めていきます!!

37話：キャラ紹介2

作者「さて！！後半に入ります！」

丈人「んで？おっさん来た？」

作者「いえあゝ！！おっけ。」

リク「それではどうぞ。」

デガ「おうおう！何やるんだ？」

ネル「あなたを紹介するんだ。」

デガ「何！？なんか照れるなあゝ／／／」

作者「まずトーキングはここまでにして、モニターをどうぞ！！」

名前：デガルド・シャープネス

性別：男性

年齢：50

誕生日：6月11日

趣味：子供と遊ぶ

特技：あやとり

使用武器：手甲リストアーム

好きな・・・：ミース、子供達
嫌いな・・・：オルティガ

役職は策軍師。

策を練り、それを実行させる役職。

18と言う若さでこの役職になる。

その残る幼さと人を惹き付ける何かを持ち周りから大きな信頼を持つ。

初代具現士のレトンとも交流があったみたいだ。

初めて会った時は19の時。その頃レトンは29。丁度死の前年だったらしい。

武器の手甲はその時にレトンから貰ったものだ。

特技のあやとりだがレパトリーが数え切れないほどあるらしい。

唯一勝てないのは妻のミース。

作者「それでは何か言いたいことは？」

デガ「この手甲は絶対離せない、いや離したらいけない代物なんだ。

」

作者「よっぽど大切なんでしょうね。」

丈人「ってかおっさん！レトンと交流あったなんて聞いてねえぞ！？」

デガ「当たり前だ。言ってねえもんwww」

作者「さて、最後はそんなデガルドさんの最愛の妻、ミースさんに登場していただきましょう！！」

デガ「マジで！？」

ミー「あら？イケない事でもあるのぉ？」

デガ「ま、まさかっ！」

作者「それでは、まずはプロフィールを見ましょう！-！」

名前：ミース・シャープネス

性別：女性

年齢：秘密

誕生日：3月28日

趣味：料理

特技：背後立ち

使用武器：お玉

好きな・・・子供

嫌いな・・・^{いびき}鼾

デガルドの妻。

年齢不詳。

好きな料理は伝統料理のダスパのギロチン煮。

食べるのはミースただ一人。

子供を愛し、デガルドを足蹴にし、皆に良い顔をしてくれる良い奥さんなのだ！！

背後立ちとはいつの間にか背後に立たれているのだ。

作者「さあ！何か言いたいことは-！」

ミー「ダスパは凄い美味しいのよぉ？」

デガ「それより、俺をもう少し愛してちょうだい!!」

ミー「あら？十分可愛がってあげてる気がするのにまだ足りないの？」シャキーン！

デガ「結構でした!!十分でした！満足しました!!ありがとうございます!!」

丈リネ変「・・・哀れだな・・・」

作者「さてそれではそろそろお時間です！それでは紹介を一旦終了し、話に戻ります!!これからこの小説を」

全「宜しく願いしまーす!!」

38話：もう1人の火達磨人間

「これが・・・」

” そう。これが俺。”

緋色に輝くその刀を見て俺は新たな発見をした。

さっきの血の臭いがしないのと、剣の周りに白い煙のような何かが漂っているのだ。

「これは？」

” 斬った野郎の魂だよ。”

「マジかよ!!」

気持ち悪い!! さっきから刀を伝って、俺の腕をグルグルと回っている。

ブンブンと振っても取れない。

” これは放っておいたら消える。それより前、来てるぞ

へ？

「っらあ!!」ブンッ!!

「うわっ!!」

俺はそのまま尻餅をついていた。

「ハッ! 単なる腰抜けかよ! しかも良い刀持ちやがって。さっさと殺して奪うか。」

おいおい! 途中から本人の前で言うセリフか? 俺だって怒るぞ!?

「やられて堪るか・・・っよ!!」ブンッ!!

俺は両手で柄を持ち、大きく薙ぎ払う。

キィイン! と相手が寸で止めに入り、刃が互いに打ち合う音が聞こえる。思い切り振ったにも拘らず簡単に止められてしまった。

相手は一気に表情を変え笑いながら剣を無造作に斬りつけてくる。

「オラオラオラオラ！！さっさとくたばれよ！！」ガッガッガッガ・
・・！！

俺はギリギリ見えた剣筋を刀で防ぐのみ。

相手は本当の戦場に出てる兵士だぞ！？

素人が勝てる相手じゃねえよ！！

”早くしないとあの獣、死ぬぞ？”

「！！！」

すっかり忘れていた。

瀕死のフェンリルの事を。

俺は空いた片手をもう一本の刀に手を伸ばす。

片腕で相手の攻撃を防ぐのは難しい。

そして最悪の事態が起きた。

ドサツと地面に何かが落ちる音が聞こえたのだ。それは俺の使ってた刀だ。

そう。俺はとうとう刀を飛ばされてしまったのだ。

すぐに次の一撃が来る。

「これで終わりだあああああ！！！」

刀を抜いて対処する隙もない。

かと言ってそのまま最期が来るのも嫌だ。

”私もこの一撃を受け止める事は難しいです。”

抜こうとしていた刀にも否定された。

こうなったら一か八か！

「良いから膜張ってくれ！！！」

そう言い捨て、膜を張ってくれた事を願いながら賭けに出る。

出る！！

そう。俺が選んだ選択は、具現化でも、抜刀でもなく魔術だ。

具現化だと何を具現化したら良いのか思いつかず、抜刀は自信がなく、咄嗟とっさに思いついたのが魔術だったからだ。

しかし咄嗟とっさだったせいか調整をする猶予ゆよもなく、あの劫火しゅうか出ると想像できたため刀に防ぐための膜を張らせたのだ。あの劫火の波から俺とおっさんを守ってくれたから自信があった。何より早くあいつを助けてやりたいという気持ちのほうが大きかったからだ。

案の定、激しい炎が俺の人差し指から噴き出す。

「うわ！んだコレ！！やべえええええあああああああ！！！」
と叫び声を上げながらその炎で閉ざされた壁から見えた影が消えるのが見えた。恐らく、転げ回っているのだろ。しかし、それよりも刀が守りきってくれたのが凄く嬉しくて胸が一杯だった。

すぐに炎の噴出を止め、相手の現状を確認する。

予想通り、俺と同じ火達磨になっていた。

のたうち回り、ジタバタと動いていた体は動くことを止めそのまま固まっていた。

俺は立ったままその炎の中の相手の最期をを看取っていた。

38話：もう1人の火達磨人間（後書き）

これからも宜しくお願いします！！

39話・お休みなさい。(前書き)

さあ〜て、どうするもんかねえ〜・・・

39話：お休みなさい。

煙と混ざりながら臭いが俺の鼻にすうっと入ってくる。

臭いはまるで焼き肉を焼いているような臭いだった。

本当だって！！

黒焦げになったその体は、生々しい動作のまま固まっていた。

右手を何かに縋り付く様に伸ばし、左手はよっぽど熱かったのか胴体の胸の真ん中辺りに耐えるように服を掴んでいる様に見える。

当然、焼き肉類は食す気にならないだろう。

「それより！！」

飛ばされた刀を拾い、鞘に収めながら瀕死の状態のフェンリルに近づく。

「おい！！生きてるか！？」

頼むから生きていてくれ！！

そんな願いをしながら、その横倒れた体の前にしゃがみ込む。

【・・・フツ。逃げればよかったものを。】

「馬鹿言うなよ？俺はお前に絶対に認めてもらって仲間にするんだ！！それまで死んでもらっちゃ困るんだよ！」

【・・・無駄だ・・・なんて言っても止まらないんだろうな・・・
我も貴様を殺したい気持ちはある・・・残念だ。】

「おい！残念ってどういう意味だ！！」

ふざけ半分で変なツツコミなんかできる場合じゃない。例えば、俺を殺せなくて残念なの！？とか・・・あ。

まだ息はあるみたいだが、それ以降言葉を発する事はしなかった。

「なあ！どうにか出来ないのか！？」

俺は最後の頼みの綱の刀に話しかける。

”・・・一つだけ方法が。”

すぐに切れそうな言葉が頭に入ってくる。俺はそれを聞き逃さなかった。

「なんだ！？言ってくれ！！」

何でもいい！！救えるのならなんだってやる。

”主様は輪廻転生りんねてんせいをご存知ですか。”

「聞いたことはある。」

しかし、聞いた事があるだけで意味などは全く知らない。

”簡単に意味と方法をお教えします。その後にお答えをお出しください。”

「早くしてくれ！！」

”・・・輪廻転生とは大まかに言うと死んだ者の魂が生まれ変わり再び違う肉体に魂、命を宿す事を言います。”

ここで変な感覚を覚えた。

「おい待てよ。それじゃあ死ぬこと前提で話してるみたいじゃねえか。」

そう。これじゃあフェンリルを殺す事を前提にしているように聞ける。

”はい。その通りです。そうしないともう私たちには打つ手段はありません。”

「クッ！！」

俺は齒軋りする。

”続けます。そして、それをするにはまずフェンリルが生きている間に私で殺すのです。死んだ状態だともう二度と魂は戻ってきません。”

「・・・俺が殺すのか？」

”はい。ただ、この方法は人間にしかやって来なかったなので今回は上手くいくかは保証できません。しかもそれが何時、何処で、どのような姿で生まれ変わるのかもわかりません。”

それを聞いて色々と反対念が洪水のように頭の中を渦巻いた。そんな中あいつが生き返る保証がないとか、殺すとか。俺にとつて厳しい選択だった。けど他の奴に殺されるよりならとか、生き返るならとかポジティブに考えて渋々承知した。

”それでは、私を抜いて下さい。そして、突き立てるのです。”

言われた通り刀を抜き、刃を想像しそこに宿す。

時間が経つと刃も具現化され、準備が整う。

【・・・殺すか。】

フエンリルが消え入りそうに話す。

辛い・・・本当に辛い。

「なあ・・・聞いていいか？」

声が震えた。そろそろ俺も限界を迎えそうだ。

「まだ生きたかったか？」

すると苦しそうな顔から安らかな顔になった。

【こんな世の中に未練なぞない・・・と言いたいところだが、少し人間というものに興味を持った。出来るものなら、もう少しこの世の中を見てみたかったものだな。】

「そつかあ・・・。その気持ちを大切に？またいつか会おうぜ？その時にはお前と干し肉を食べるようにしとくからさ。」

【フン・・・もう少し柔らかい肉が良い。あいつは硬すぎだ。】

「ハハッ。そいつはすまなかったな。・・・それじゃあ・・・そろそろ・・・助けれなくてごめんな？」

【謝るな。我はこれでもよかったと思っっている。さあ、そろそろ寝よう。またやり合う事を楽しみにしておこう。・・・。】

「ああ・・・そうだったな。それじゃあ・・・」

お休み。」

俺はその後声が枯れるまで叫び、赤く腫れているだらう目で家へと戻って行った。

40話：時過ぎて・・・季節は冬（前書き）

よし！

ストーリー構成直さなきゃ！！

40話：時過ぎて・・・季節は冬

家に帰ると俺の顔を見て心配になったのか皆が俺に歩み寄り不安の表情を浮かべ「大丈夫？」だの「何かあったのか？」などの繰り返し。

俺は「大丈夫。何もないよ。」と言いそのまま部屋に戻り、眠りに就いた。一刻もあの事を忘れたかったのだ。俺が殺した。相手はどう思っているかは分からなかったが俺は、親近感が少しあったので結構前の自分を重ねて見ていた。そんな相手を自分の手で殺した。そう思い深く言ってしまうえば自分を殺した気分だった。

まだ手に感触が残っていた。

何人が斬ったがその感触と全く違う感覚だった。まだ手が震えてる。俺は早く寝るために布団を深く被って寝た。

次の日から俺は人一倍働いた。

いつかまた目の前で俺が誰かが死ぬ時が来ないように誰よりも強くなるために。

その決意から何カ月が過ぎ・・・季節は冬。

あの時枯らした声は少し低くなり、前よりも野太く。あの時枯らした涙は、悲しみよりも感動や笑い泣きに。

俺は、おかしくなりそうだった頭の中をやっと整理をつけて、今ではいつも通りに過ごしている。

国も半分以上直ってきている。

おっさんとの修行も頑張ったおかげで結構体力や知識が付いてきたと思う。

具現化したマフラーを巻き、ヘンプロールを被り、手袋を履いて完全防寒対策をして外に出ていた。

「雪が好きなのか？」

後ろから聞き慣れた声がするので振りかえると、そこには何ら変わらない格好のリクさんと、半袖のシャツを着て腕を組んでいるネルがいた。

「まあね。雪奇麗だし、星空も奇麗だからお得な感じで嬉しいしさ！」

本当の事だ。

「私は春が一番好きなんだがなあ。」

「俺はどれも苦手だ。」

「ははっ！ネルらしいやー！」

こんな笑いの絶えない日常が続いていた。

「そうだ！雪合戦やらない？」

「なんだそれ？」「なんなのそれ？」

二人とも知らないみたいだ。

「あれだよ！！雪を丸めた球を相手にぶつける・・・まあ、小さな戦争って感じかな？」

「楽しそうだね！」

とリクさんが笑いながら雪を丸め始める。

そういえばリクさんは喋り方が変わった感じがする。

前までは少し引き締まった男っぽい喋り方だった感じが今では、女の子らしくなった感じがする。

・・・少しだけど。

「下らない気がするが？」

「やってみる？もし俺かリクさんが勝ったら言つこと聞いて、ネルが勝ったらなんでも言つこと聞くよー！」

「誰がそんなかけ・・・ブッ！」「パァン！！」

とリクさんの投げた雪玉がネルの顔面に命中。

「やった！」

げらげらと腹を抱えて笑う。

「・・・こんの・・・野郎！」ブン！！

一瞬で作った雪玉をもの凄いスピードで投げるがそれを紙一重でかわして、空投げになったようだ。

・・・て

「ここだと近所の人達の迷惑だろうから広場に行こうか！！」

「はぁい。」

「ツチ！」

おい！そこ！舌打ちするな！！

41話：もう一方と裏腹に

あのおっさん達と炊き出しをやった広場に出る。まだ昼過ぎなので老若男女が沢山居る。

え？復興か？冬に入ってしまったから作業が困難だからやらないんだとさ。しかも、日本見たいに四季があるらしいし。

「さ！早くやろう？」

もう、リクさんはやる気満々だ。

もう既に雪玉を作っていた。

「そうだね！それじゃあ、周りに気を付けてやろうね。」

俺が注意を促すと

「わかってる。」

とネルが無愛想に返事を返す。

そんなこと言って本当に合戦になったら危ないでしょうが！！

「それじゃあ、開始！！」

俺がそう言って、雪合戦が始まった。

その頃、丈人がいた世界では・・・

「えー、17歳の少年。丘崎 丈人さんが未だ行方不明になっています。何か情報があったら・・・」ブツッ

やはり行方不明という事になっていた。

「兄貴い・・・ぐすっ」

「くそっ！もう一回探して来る！！」

丘崎家は一気に精神が麻痺してきた。

海外出張の父親もその事を聞きつけ戻って来たと思ったら、出て行っただけで帰ってこない。

母親は精神状態が不安定になり幾度となくリストカットなどの自殺行為をしようとし、更には病気にかった。

今は病院に入院している。

政府の調べによると、誘拐、自殺、殺害などが大きな原因だとして、いるらしい。

そうなんです。

政府が調べているのです。

なんでかって？いきなり何の証拠もなく消えたからだ。・・・トイレの個室で。

世界的に有名な事件として取り上げられていた。

「トイレ個室少年消失事件。」

そんな題だ。

17歳の高校生が友人にトイレに行くと行ったきり帰ってこない。

トイレに入るのを数人が目撃。

そんな中どうやってそのトイレから消えたのか不思議すぎるからだ。聞いている人にとっては非常に下らないような事だが、ネットでその真相を突き止めようとする輩が増え、掲示板で多くの書き込みがされているが、その真相には誰も辿り着かなかった。

一度だけ異世界の話が上がったが、現実であつたならなどと考え、実施したが何も起こらずその考えはなしになった。

先程から兄の嘉人^{とこみ}が住んでいる県内を探し回っているが、一向に見つからない。

妹の詩音は、頭の中の整理がまだつかなく、家に籠りつきりだ。

親友の要は探したり、女の子に声かけたり、探したりと繰り返していた。

そしてそんな事とは知らず、丈人達は・・・

「いけえ！！皆の者！！奇襲じゃあ！！」

『わー！！』

「タケトてめえ！ガキ使うとは卑怯だぞ！？」

「ネル。勝ちやあ良いんだよ！！」

子供を使った卑怯な戦法でネルを倒そうとしていた。

ちなみにリクさんは

「お爺ちゃん達100歳なんだー！！すごいですねー！」

「いやいや、そんな事はないんじゃないよ。」

などと世間話をしていた。

42話：温かい が待っている。(前書き)

は色々ですのでww

42話：温かい　　が待っている。

広場がハチャメチャになり、空もすっかり夜の色。

俺らは公園で一緒に遊んでいたおっさんの子供数人を両手に連れて薄明るい夜道を歩く。

「まるで皆家族みたいだね！」

女の子が言い始める。

「だとしたら兄ちゃんパパでお姉ちゃんママだね。」

「んな！？」

顔を真っ赤にして驚いた顔をしている。

はっはっは！まさか照れているのかい？ww

「ないないない！！絶対にない！！」

そんな拒否んなくても・・・

「・・・俺は？」

あ・・・ネル気になるんだあww

「ううゝん。ワンちゃん！！」

プツ！！

「だあゝっはっはっはっは！！」

俺は馬鹿笑いしていた。

「そ・・・そんな・・・。」

よっぼどショックだったのか、目が虚ろだ。

「ククク・・・良かったじゃないか犬で・・・プツ。」

リクさんが凄く反発を買うような言い方をするがネルは一向にボートとしたままだ。

「犬・・・俺が・・・犬・・・」

そんな事を永遠に繰り返している。

そんなこんなをしていると、おっさんの家に着いていた。

子供達は握っていた振りほどこき一目散に家の中に入り込む。

多分、寒かったから早く家に入りたかったんだろうが、何だか悲しい。

温かった手の温もりが消え、冷たい風が吹きかかり、一気に手を冷やす。

「ううゝさびいさびい。俺らも入ろうぜ。」

そう言って子供を追って二人よりも先に家に入る。

温かい家で温かいご飯を食べて温かい布団に潜り込む。

何時も寝る前に寝転がった状態で軽く本を読む習慣をつけるようにしている。

前よりもずっと本が増えた。

俺も何かしら働いて金銭を稼いでいたのだ。

え？どんな仕事かって？

例えば、お爺ちゃんの肩叩きとか、お婆ちゃんの荷物持ちなどとか、けどコツコツと貯めたお金で色々買っていたのだ。

家具は具現化すればいいんだろうけど、それだとなんかシックリこなくってさ。

だからなるべく金貯めて買うようにしていたら結構本も一緒に買っ
てしまっていたんだ。

「・・・ふう。読んだゝ読んだゝ。」

”今日は何を読んだんですか？”

ティアが聞いてくる。

良い忘れていたな。ティアはこの刀の事だ。

刀さんと呼ぶのは一々面倒くさいから。

なんか、話によると刀になる前は二刀は刀ではなく剣だったそう
だ。しかも、聖剣と魔剣だった物を再加工したらしい。

その時は、ミーティアと言う聖剣だったらしい。

あ、因みにもう一刀はリベリオンと言う魔剣だったらしいが、呼びにくいので縮めてティアとリベルと呼ぶようにしている。

「今日は子猫大図鑑を読んでいたよ。」

”そうですか。可愛かったですか？”

「ああ！ものすごく可愛かったよ！！」

”そうですか。”

「そろそろ寝るよ。お前らもゆっくり休めよ？」

”ああ。お休み。”

”お休みなさい。良い夢を。”

「お休み。二人とも。」

そう行つて俺は深い眠りに就いた。

43話・早起きは三文の徳？（前書き）

皆さんはそういう体験はありますか？
僕は一度もありませんでしたww

43話：早起きは三文の徳？

「ふああ・・・まだ5：00かよ。」

俺は何時もより早く起きたみたいだ。早起きは三文の徳と言うが本当にそうなのだろうか？

ふと思いつながらも、温かくなった布団から重い体を起こし、凍ったような部屋で背伸びをする。

「たまには一人で散歩でもしようかな。」

そう決意をして防寒対策をしてまだ薄暗い外へと出た。

そんな外を照らしていたのは電灯というよりも、油灯だろう。何か明治時代を思わす感じた。

月は沈み切り、その明かりだけを頼りに雪降る道を歩き始める。

「うわっと！こころ辺はよく積もってるなあ。」

俺の右足が思い切り嵌りきってしまい、なかなか抜けない。

するとあることに気づく。少し手前の方に丸いボールぐらいのものが転がっている。

「ん？」

目を凝らして見るとそこにあつたものは、人の顔。

・・・おい。どういうことだ？あれかな？そろそろ目がおかしくなったのかな？

「あええい・・・」

しっ喋ったあああ！？

・・・俺はそのまま頑張つてその雪の中からお爺さんを救出。
凄かった。俺も埋まってそこから少しずつ魔術を使って雪を溶かし
ていったんだが、それまでお爺さんが無言で俺をガン見してきたの
でやり難かつたんだよ。

只今、お爺さんの家にいる。

お爺さんは一人暮らして、着ていたビシヨビシヨの服を新しい服に
変えて、暖炉前で毛布に包まっている。

「お爺さんさ、何がどうなつたらいなつたんだ？」
俺が聞くと

「ああ。それは・・・婆さんの形見の指輪だよ。」
「指輪？」

「そうさ。今日は婆さんの三回忌でねえ。夜から今までずっと墓に
話しかけて帰りの途中あの様さ。そしたら持っていた指輪がねえ・
・」

そつかあ・・・ってか、何故今まで!?

お爺さんがすごく悲しい顔をしているのを見たらどうにかしてあげ
たい。そんな感情が湧き上がり、

「よし！俺、探して来るよ！」

できそうにもないことを言ってしまった。

「本当かい？」

もう後戻りできない。

だったらトコトン探してやるぜ!!

「おう！任せてくれ!!」

そう言い残してお爺さんの家を飛び出し、あの埋れた場所に向かう。

「さつてと。どうしようかな！」

俺は具現化したスコップを肩に担ぎない頭をフルに回転させる。
つかスコップ使うのか？

44話：爺さんの決意と女王の決断

「おお！！これだ！！・・・ありがとう。本当にありがとう。」

と泣きながらお爺さんが俺にお礼を言ってくる。

何だかこそばゆいな／＼多分今俺は顔が少し赤いだろう。ちよつと顔が熱くなるのが俺でもわかる。

「いいって！それよりもこれから気を付けなよ？」

俺が気を付けると言っているのは、あの雪道の時の様に埋もれるなと言つのと、指輪の管理を気をつけると言つ事にだ。

「ああ。分かっているよ。それより何かお礼がしたいんだが何もなくてねえ・・・」

部屋を見渡し、何かないものと探し始めるお爺さん。確かに言っちゃあ悪いが家の中には日用品ぐらいしかない。恐らく、復興前の幾度とないオルティガの攻撃で国を荒らされた時に何もかも無くなつたのだろう。

「だからいいんだってば！俺が好き好んで勝手にやった事だからさ！」

「・・・今時、物乞いをしない子がまだいるなんてねえ。」
そうか？

「ま、物欲しさにこんなことするほど俺は馬鹿じゃないよ。俺そろそろ行くけどさ、もし何かしらしてくれるんだつたらまた来ていいか？今度会う時は恩人とか関係なくただの友人としてさ。」

おお！！なんか俺結構まとめるの上手くないか！？ｗｗｗｗ

「ああ、いいともさ。こんな老いぼれになつてもまだ友人が増えるなんて光荣だねえ。」

「おいおい。そんなに自分を嘲るもんじゃないぜ？奥さん想いの良夫じゃないか。」

「そりや言いすぎだよ。」ハハハハハハ・・・

俺は一人、歳の離れたお爺さんの友人が出来た。

「・・・ふう。それじゃあ行くよ。またね!!」

そう言つて暖かかった家から飛び出し、散歩を再開した。

「婆さん？ワシはまだ生きたいと思うよ。あんな場所で自殺しようなんて考えるもんじゃないねえ。そのせいで良い若者と出会ってしまったよ。こんな自分勝手な男でごめんなあ・・・」

そう一人寂しくなった家の中でお爺さんは亡き妻の形見の指輪にその姿を重ね合わせながら呟いていた。

その後、特に何も起きず三文の徳というのは嘘と断定しそのまま不満足の状態で家へと戻った。

するとおっさんが顔色を変えて俺を探していたみたいで俺を見るや否や、もの凄いスピードで詰め寄ってきて、いきなり

「女王様がお呼びだぞ!？」

なんて言い出す。

いきなり言われてもー。

「なんで？」

すると、おっさんはそのまま

「いいからさっさと行け!!」

なーんて怒鳴り散らして俺を急かす。

「わーっ たつて!」

俺は進まない足取りを無理にでも玄関へと向けて歩き始める。

王の間へ入り、一番奥にいる女王様へと近づく。

「何か後ようですか？」

俺がそう言つと女王様は真剣な顔つきでそつと口を開く。

「これから、他国との全面戦争をしたいと考えています。」
と冷静に告げる。

俺は啞然としたまま大口を開けて目を見開いていた。

何だつてええええええ！？

45話：嵌められました。

「ち、ちよつと待って下さいよ！！いきなりそんな事を言われても・
・・」

ビックリしてめっちゃ心臓バクバクしてんだけど！？

「驚くのも無理はありませんが相手側からの宣戦布告がありましたので・・・」

そう言つと右に立っていた大臣が1つに便箋を取り出し、俺に渡してくる。なんか生温かいんだけど・・・

「これが宣戦布告です。」

そう言つて悲しげな表情をしながら元居た場所へと戻る。

開き中身を全て取り出すと一枚の写真が一番最初に目に留まつた。

「・・・ひでえ。」

俺は怒りを覚えた。そこに映し出されていたのはエルストリアの兵士数人が体を縛られ鞭打たれる生々しい光景だった。次に文に目を通す。

見ていただけましたかな？

これはまだ序の口といったところです。

何故このような事をしたのかは女王様自身がお分かりかと。

もしこれでもご不満だと仰られるのなら、宣戦布告をしたいと思いません。

その場合、言伝を寄こして下さいようお願いします。

レオニス

と書かれていた。

なんともまあ下手くそな文だろうと思っってしまった。

確かレオニスと言えばこの世界、ディオジ・アースの中で最も商業が発達している国で、世界の貯蔵庫と言われていたはずだ。しかも今までレオニス国王とは俺も女王様も何度も面識があった。とても温厚な性格でカリスマ性にも長けていた良い国王だった。

ま、カリスマ性っていまいちわからないがww

そんな国王が宣戦布告をしてくるなんて・・・

「んで？この文に書いてある女王様自身が分かるってどういう事ですか？」

俺が聞くとそのまま黙り込んでしまったので言わなくていいと言い、俺をここへ呼んだ本当の理由を聞かせてもらっ事にした。

「そこで、です。これからこの国でもう一度具現部隊を発足したいと考えています。」

具現部隊。嘗て（かつ）初代具現士、レトンが作った部隊。それを作って貰えたら有難いっちゃ有難いが・・・

「無理でしょ！？だってこの国の具現士って俺だけですよ！？」

そう。月日が経っても未だこの国の具現士は俺唯一人。ハッキリ言っってそんなの部隊でも何でもないと思う。

「はい。だからあなた一人で土台となる基礎を気築き上げるのです！！！」

そんな無茶苦茶なああああ！！

「良いですか？この戦いでこの具現部隊が活躍すれば貴方は一躍皆の的。世間に知れ渡り、何処からか入隊の可能性が上がるかと。そう思うのですが。」

なんか言っちゃ悪いが腹が立ってきた。

「あなた一人だけだと部隊でもない訳ですし、他の具現士がいた方が色々と向上するかと思ひまして・・・」

ツンツンと人差し指と人差し指を合わせて下を向いている。

まだ少々いらついているが、女王様もそれなりに考えてくれている

のだろう。

「・・・分かりました。んで、そうなるとしたら俺はどうしたら?」
俺は折れて女王様の考えに屈した。

すると女王と大臣はパアアアアつと顔を明るくした。

・・・もしかしてしてやられた!?

「それじゃあ今から説明しますね?」

・・・やられた。

「ええゝまずは・・・」

それから大臣が淡々と話していく。

俺の話す隙がねえ!!

説明も終わり、眠たくて閉じそうなしよぼしよぼの目を頑張って見開いた状態で家へと戻る。

うええゝだりい。

大臣に説明された事は、前まで騎士団内にあった具現部隊を騎士団内から外し、単体としての行動になる。以前使われていた部隊の勤務していた小屋の改築、そこへの移転、そしてそこで何かしら知らされる依頼などで仕事をする。ということだった。俺まだ未成年だけど、給料がもらえるらしい。

大まかに言くと、戦争の日まで十分にレベルアップを図る事を付け加えられたままそこで暮らせという事らしい。

おっさん達になんて言おう・・・

45話：嵌められました。（後書き）

いつも、読んでくれている皆様。
本当にありがとうございます！！

46話：古時計（前書き）

更新遅くなりました！！

46話：古時計

家に帰ると、荷車に何かを乗せて何所かへ持って行こうとするおっさんが見えた。

「おいおっさん。何処に持ってくんのだ？」

俺が歩み寄り聞く。もしかして・・・

「おお、これか？女王様の命令でお前の新しい住居に持って行くところだ。いやあ、丁度良かった。これが最後だから序でに案内してやるからついて来い。」

やっぱり。ってか情報伝わるの早くね！？

「はいはい。」

そのままおっさんの後ろをずっとついて歩く。

「まあ、これからはあっちで住むらしいから頑張るな？」

「え！？そうなの！？」

しかも、そこである違和感に気付いた。

だからここ毎日家事させられてたのかああああああああ！！
そう。この頃朝昼晩とミスさんと一緒に家事を切り盛りしていたんだ。一番重要視していたのは料理だ。作れないとだめだからな。
まあ、凄い時間はかかったけど今では普通の料理が作れるようになった気がする・・・多分。

「ってか、女王様も無理言うよなあ。俺だけで具現部隊を再発足しようなんて言いだすんだからな。」

「がっはっは！精々頑張るな。たまには顔出しに来いよ？」

「ん？まあ考えとく・・・って、逆に来てくれても良いんじゃない？」

「ま、考えといてやるよ！！」

「お願いします。来てください。」

そこで改まっておっさんをお願いをする。

俺結構一人ぼつちは慣れてないんですよ？絶対一人になったらさ孤
独死するって！！

「わかってるって。」

そう言っただけで正直ホツとしている。

「……ほら、着いたぞ。」

ガラガラと荷車の車輪が止まると同時に俺とおっさんの足も止まる。

〈想像〉

そこには、誰もが羨む様なとても清楚な白で彩られた少し大きめの
小屋があった。

〈想像終了〉

な〜んて、ニコニコと考えていた俺の予想は大きく外れた。

そこを見渡すとただの国を取り囲む高い防壁のみ。

……壁ですよ？

「おっさん。何処にあんの？俺の勤務場。」

「ほらあそこだよ。」

そう言っただけで指さす方を辿るとそこは曇り空だった。

「おいおい！冗談は無いだろうよww」

俺は冗談だとずっと心の中で唱えていた。

「いや。マジだって。よく目え凝らして見な。」

んん？

俺はあまり目は良くないので、双眼鏡を具現化し、そこから覗いて
見ると、遥かに高い所に小さな小屋のようなものがあった。

「何でええ！？」

空いた口がふさがらないとはまさにこの事。俺はそのままあんぐりと大口を開けたままその小屋を見ていた。

外見はただの木製の小屋だ。

色が黄土色でも茶色でもない、どっちかというところ、茶色をもっと黒くした色だ。

「さて、行きますかな。」

おっさんが腕をブンブンと回した後、荷車を肩に担ぎだした。

「おいおいおい！なにをするきだよ！？」

その荷車には俺の大事な・・・

「ん？なにって、飛ぶんだよ。ま、正確に言えば跳ねるんだけどな！？ガハハハ！」

笑えねえよ！

ってかみんなに話してるんだから邪魔しないで頂戴！！

おっさんが飛ぶと言ったのは恐らく風跳ふうちょうと言う技だ。

風跳とは風の魔術を少量使い高いところまでジャンプ出来る技だけど、着地に失敗すればお陀仏な厄介な技だ。

みんなが見た、ネルが高い所まで俺とフェン・・・まあ、その時担いで飛んだ時に使った技だ。というかそうらしい。

「行くぞ！」

そう言った瞬間、凄い風と共に飛んで行った。

久しぶりに見たよ。

よし俺も！

因みに、余り上手くはない。

・・・死ぬかも。

「すう・・・つぶ！！」

足と地面の間に風を通らせ一気に跳ねる。

ビュン！！

耳には凄いいゴオゴオと風がかすめて行く音だけ聞こえる。

近くなる距離。

おっさんは無事、入ったようだ。

何故わかるかと言うと、姿が見えないからだ。

小屋の真下で危なかったので、少し軌道を変え、その小屋の上を越してしまった。驚いた事に屋根がない。

屋根がないぞおおおお！！

そおっと、保護術のカバーという術を使う。

この術は全ての属性に対応している。

風なら風、水は水などその属性によりその名の通りカバーをしてくれる。

まあ・・・炎の属性だとわからないけど・・・

ストーンとその小屋の玄関の様な所に降りる。

その幅僅か30cm。ドアにしがみつく様に体制をとり、そのドアを開ける。

そこは腐りきった木の臭いと、ボロボロと靴の裏の感触が気になるところだ。

結構広いが、屋根が崩れ落ちたみたいでそこらへんにその残骸が残っている。

奥に大きなホールクロックがある。

多分、そのホールクロックはグランドファザークロックと言う部類に入るだろう。

その名から想像できた人はいるだろう。

その時計は、あの有名な童謡「大きな古時計」に登場する大きなのつぽのお爺さんの古時計のような時計だ。

殆ど^{ほん}の家具などが屋根でダメになったのに関わらず、そのホールク

ロックはまだ動いていた。

46話：古時計（後書き）

誤字脱字報告お願いします!!

大きな古時計の古時計ってグランドファーザークロックと言つ柱時計が元になっているらしいですね！

47話：ビフォーからアフター

その柱時計は、新品同様のまま機能していた。

「お！やつと来たな！！」

気付かなかったためか、おっさんが横から肩を叩いてきた瞬間、俺は反射的にストレートを放ってしまった。ま、おっさんもそれに反応してくれて簡単に止められたけど。

「悪いおっさん。」

「んま！どうせ来るだろうと思ったよ。しっかし強くなったもんだなあ。すんげえヒリヒリすんだけど。」

おっさんは俺のパンチを止めた片手をブンブンと軽く振りながら二カニカしている。

その後ろ側にあの荷車と、残りの家具が置かれていた。

あ！リベルとティアもいる！

荷車から少し飛び出した状態だ。

”主様。どこに行つてたんですか？”

何時もは穏やかな感じを放つティアだが、今は大津波のような威圧感を放つ。

「おいおい。そんな怒るなつて。ただ散歩行つてただけだよ。」

”本当ですか？”

「本当だつて！」

はあ・・・なんで疑われないといけないんだ。

”それよりも久しぶりに来たな・・・”

しみじみと懐かしむリベル。

あ、そつか。こいつ等元はレトンの刀だもんな。一緒にいたんだよな。

「んで、このままだと住めねえだろ？だから後はここを改築しないといけないんだが。」

おっさんが腕を組みうーんと考え込む。

「けど、けどさ。これどうやって改築すんの？」

そうだ。この小屋は宙に浮いているんだ。そんなところで改築したら下に落ちちまうんじゃないのか？

”それは問題ないです。”

ティアが断言する。

「どうしてだ？」

”ほら。その柱時計があるだろ？あれはあいつが造った魔時計って言っもんだ。何かあった時のためにある念を込めてるんだ。”

「ある念って？」

”時戻し。あの時計の針を逆に過ぎた年の回数分回して最後にその柱時計の中にはいるんだ。その後に、指定空間だけ時を戻せるという念だ。”

「へえー随分と手の込む作業だなあ。」

ん・・・？待てよ？

「それじゃあ、あの荷車の物どうなんだ？」

”知らない。”

嘘おおおお！！

”何ならもう一度降ろしていただければいいのでは？”

怒られるよ！殺されちゃうよ！お陀仏だよ！！

そんな恐ろしい事・・・

く想像く

「おっさん荷物降ろしてきてくれる？」

「ああん？坊主。俺をパシらせる気か？いい度胸だなあ。おい。」

バキボキッ！

「ひ・・・ひいい！！」

（想像終了）

なんて事になりかねない・・・

そんな事を思っていると・・・

「そうだ！あの手があつた！」

途端何か閃いたのか、手をぼん！と叩き歩き出す。

「あの手つて？」

「時戻し！時戻しだ！」

後ろを振り返り企み顔で言ってくる。

「おい！なんでおっさん知ってんだよ！」

俺は驚いた状態で刀に聞く。

” 確か一度か二度此処にいらした覚えがします。”

「まさかその時にか！」

” 恐らく。”

「マジでか！」

「おい坊主！すまんがこいつを反時計回りに31回しといてくれ。任せた。」

なんか何気に指示出してるし。

「おっさんは？なにすんの？」

納得いかないが聞いてみる。

「俺あこいつを置いて来る。」

まじ！？wやったあ！！

殺されるかと思ったが自分から言ってくれるとは思わなかったので嬉しかった。

「分かった！31回だな！？」

「どっこいしょ。ああ。31回だ。んじゃあ頼んだぞ？」

そう言つてそのまま荷車を担ぎ始める。

「おお！任せとけ！！っとちよつと待った！！刀、刀！」

荷車から二刀を取った後、おっさんはそのまま風跳を使って飛び降りっていた。

「さてと・・・やりますか。」

近づき柱時計の針を言われた通り反時計回りに回す。

10回・・・20回・・・30回・・・そして

「31・・・つと。んで？どうすんだっけ？」

”その柱時計の中に入ってください。”

「え！？ここ！？」

そこを開けると俺が入るか入れないか分からない位のスペースしかなかった。

”早く入れ。一緒に消えちまうぞ？”

と急かす。

「分かったよ！ったく。」

渋々俺は入った。

ほんのりと優しい香りがした。

するといきなり目の前の小屋の中が見えなくなった。

”始まりました。”

ティアが言ったので初めてわかった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

と柱時計がガタつくのが分かった。

そして、数分するとそのガタつきも止まる。

プシューと音を立ててそのまま黙ってしまった。

「・・・あれ？どうしたの？」

少し怖くなって刀に問いかける。

”大丈夫。もう終わりましたよ？”

ティアが言った。

「え！マジで！？」

”もう出てもいいと思う。”

「おっしやあー！！」

ボタンと勢いよく開け飛び出す。

そこはあのボロボロで汚くて臭いがする小屋ではなく、とても綺麗な小屋というよりも一軒家みたいな状態の部屋だった。

47話・ビフォーからアフター（後書き）

部屋の構造などは御想像にお任せいたします！ww

48話：メンタル弱すぎ

「すっげー！！や、え、すげえええええええええ！！」

俺は一人、驚きのあまり凄いの言葉しか思いつかなかった。そのまま走り回っている。グチャグチャになったカーペットも新品同様になり、中身が飛び出したソファーも元に戻っていた。

「これが時戻しか・・・。」

はしやぎ疲れ、そのままふかふかのソファーに倒れこむ。

「ふかふかあ。」

何ともまあだらしい声と格好だろうか。

ガチャ。とドアノブを回す音が聞こえる。多分おっさんが来たんだろ。ん？ん？待てよ？おっさん荷車担いでいるよな。俺来る時、玄関の手前の足掛けれそうな幅が・・・30cmだったはずだぞ！？どうやって入ってきてるんだ！！

295

「ういゝ疲れた・・・お！！綺麗になったじゃねえかよ。ん？ん？」

荷車を降ろすや否や、俺に近寄りツンツンと体をつ突いてくる。くすぐったいです。

「ってか！おっさんどうやって入ってきた！確か玄関前は・・・」
と言葉を続けようとしたが、おっさんが人差し指を左右に揺らし、
「チツチツチ。甘い坊主。これを見な！！」

そう言っておっさんは玄関の外を指差す。

「な！？」

そこにはなかったはずの足場があった。

なんでだあああ！？

「ふっふっふ……実はな。昔ここにも足場があっただけの話さ！」

どうだ！と言いつうなくらい筋肉質の胸を張り、腕を腰に当て俺を見る。

．．．そんな偉そうな格好されても言つてゐる事は凄くないし．．．

外に飛び出すとやはり少し風が吹いている。

ま、空の上だし。

下を見るとエルストリアの周りを取り囲む防壁などがはつきりと見える。

しかも何気に……景色が……周っ……で。

「ま、周ってんのこれええええええええええ！！」

そう。国の頭上をクルクルとゆっくり回転しながら、動いていた。

”はい。この具現部隊は国の保護なども行っていましたから、このように国の周りを浮遊し、何かあった場合すぐに対処できるように工夫された場所なのです。”

$$\begin{matrix} \neg \\ \wedge \\ \neg \\ \vee \\ \circ \end{matrix}$$

それなら納得がいくな。うんうん。

「当たり前。この国を守るための初防壁だからな。しょぼうへき？」

「なんだそれ？」

”簡単に言えば敵からしてみれば第一関門、味方からすれば守りの要。とでもいいましょうか。”

ティアが軽々と言い払う。

「ま……マジかよ……俺、結構な大役を任されてるってわけか。なんか考えただけで目眩が……。」

視界がクラクラしてきたので部屋に戻る。

「おい。大丈夫か？ すごい顔色悪いぞ？」

おっさんが俺の顔をみて心配そうな顔をする。

「だ、大丈夫！ 少し目眩がしたただけだ。」

本当は結構辛いけどなあ・・・。

「ま、ここに荷物置いとつから、後は自分の好きなように使いな。」
そう言うとおっさんはドアを開け、ビュンと落ちて行った。

・・・何か、可哀想な言い方だなあ・・・。

「さてと。片付けの前に他を探索してみつかな。」

立ち上がり、二刀を連れて部屋巡りをする。

・・・は？ 部屋1つじゃないのって？

いやあ。小屋つちや小屋だけださ・・・トイレとか、寝るときとか、他の仲間が出来た時どうすんの！！

そのためなのか分からないけど、ちゃんと幾つかドアはあったんだよ！！

何気に中二階みたいな所に続く微妙な階段もあるし！！

” いや、正確にはちゃんと二階まである・・・が、二階は物置だ。”

リベルウウウウウウウ！！ そうなのおおおお！！？ ってか
何気にネタバレしないでええええ！！ 俺すっごく楽しみにしてたんだ
だけどおお！！

” それを早く言え、へたれ。”

リベルは俺を軽々とへたれと罵る。

俺のメンタルに9999のダメージ。

BREAK！！

「iiiiiiやあああああー！！」

俺はブンブンと抱え込んだ頭を縦横無尽に動かす。

”頼りない主だな。おい。”
追加ダメージ。

「おふいえあああー！」ダンダンッ！！
その頭を床に叩きつける。

”お、落ち着いてください。ほら、まだ他にも部屋はありますからね？”

ティアが俺を落ち着かせるために促す。

俺は叩きつけていた頭を止め、冷静に考える。

・・・そうだ。他にも部屋はあるんだ。リベルにネタバレされる前に調べつくしてやるぜ！！

ふふ・・・ふふふふ・・・フハハハハ！！

うおおおおおお！！

それから俺の探索劇が始まった。

48話：メンタル弱すぎ（後書き）

おそくなりました。
すみません。

49話：変態から兄貴

「く・・・くそう!」

俺は惨敗。

唯一ネタバレされなかった部屋は、トイレ。

恐らくリベルは、お前はトイレ同様だ。と言いたいのだろうか。
何たる屈辱!!

因みに他の部屋も同様にリベルにネタばれされ、打ちひしがれた。

〈回想〉

「ウオオオオオ!!」

”そこは他の隊員の寝室だ。”

「スエプテンヴァアアアア!!」

”そこはシャワールームだ。”

「ツツアアアア!!」

”そこは・・・”

「オツシャー!!俺の勝て・・・」ガチャ

「え・・・?と、トイレ?」

”っは!”

〈回想終了〉

二階は言った通り、物置部屋だった・・・とは言っても誰かが住んでいた形跡はあったんだけど。机とかその上にペンでなんか書いてたみたいだし。

玉ねぎ、ニンジン、ジャガイモその他・・・

なんかの料理の具材か?

特に気にせずその部屋から出て荷物を移動させることにした。

選んだ部屋は中二階。

理由？簡単。珍しかったからさ！！

生憎ドアはついてないけど、十分広いし何せこういう初体験できそうな機会がないんでねww

そのまま下にあった荷物を全て中二階に持っていく。

や、やべえ・・・腰にくる。

そのまま俺はへたり込んで息を荒げる。

「そっぴゃあ、ここで初代や皆は何やってたんだ？」

ふと疑問に思った。

” そうですねえ・・・皆は下のテーブル囲んでトランプでダウトをやっていましたね。前の主様はそれをただただのめり込む様に見えるだけでしたが。”

「なんで？入ればいいじゃんww」

” 弱かったんだよ。アイツすぐ顔に出てバレちまうからな。やるより見る方がいって言うて絶対入んなかった。”

へえゝそりゃ知らなかったよ。

” ま、貴方も弱かったですけど。”

ん？なんか引つかかるぞ？

「貴方って誰だ？」

” リベリオンですよ。よく主様の代わりにやってやると言って惨敗しまくりましたけど。”

「へえゝ弱いんだあゝwww」

” 黙れ。前みたいに火達磨にしてヤンぞ。”

ふと少し前の事を思い出した。

「・・・そ、それは勘弁だわゝ。」

「フツ！」ブンツ！！

俺は間髪入れずにストレートを繰り出す。

しかし、突っ込んできた相手はひらりとかわし俺に抱きついてくる。

「おひさあゝ！！元気だったあゝ！？」

すりすり頬を上下に動かしてくる。

「痛い。痛いよ。兄貴。」

俺が兄貴と言っているのはあの初めて模擬戦闘をした変態。スカリオ・ビフォルマである。あんな毛嫌いしてたんだけど、ネルやリクさん、おっさんなどが居なくなったら何かと助けてくれたのはスカリオだったんだ。と言っても、勝手にやってただけだけど。

「んゝ 堅い事言っなよゝ。さっき任務から帰ってきたばっかなんだからさあ。少しは労わってちょゝ。」

「考えとく。」

任務は確か、アリエスの森の巡回だったな。

あそこは国と直に繋がってるから敵兵が稀に潜んでいるから巡回してるんだそうだ。

「そんなことより行くぞ。」

そう言っただんとおっさんの家に入る。

「・・・兄貴。苦しいから離して。」

「行けー！！突入じゃー！！」

「はいはい。」

無邪気すぎてどっちが年上なのか分からない。

そのままノシノシと家に入る。

ブンブンッ！バシユッ！！

部屋に入るとネルが瞬撃を繰り出していた。

瞬撃って言うのは、武術家なら誰もが憧れる技。見えない軌道。凄まじい破壊力、スピード。その凄さに誰もが目を凝らすほどだ。ただ欠点は、繰り出した後の硬直だ。

このせいで多数を相手にするのは不利とされている。

それを何とか連続で出せないものかとネルが試行錯誤しているのだ。いやあ、熱心だねえ。

「俺等もやるつか。」

「おう！やろうやろう！！」

・・・テンション高いな。

”私、コイツ嫌いです。”

「こら、ティア。」

49話：変態から兄貴（後書き）

スカリオさんは

変態から兄貴に急成長しました。

50話：ダスパのギロチン煮（前書き）

覚えているでしょうか？

50話：ダスパのギロチン煮

それから交互に交互に模擬戦闘をする。

途中から兄貴は疲れたと言って休みっぱなしだけど。

そりゃそうだ。ティアにボコボコにされてたもんなwww

〈回想〉

” さつさと終わらせます。” シャキン！！

「 え！？ ちょー！！ なんて勝手に刃生成されんの！？ しかも結構な重量だよ！？ 」

” 失せろおおお！！ ”

「 いやあああああ・・・ 」

〈回想終了〉

お陰で利き腕がグニャングニャンだよ。

初めてティアの負の念感じたし。

しかもその逆の腕もネルとの対戦でかなりヘトヘト。

「 余所見はするな。 」

そっぴい俺の腹に拳をねじ込む。

「 へぶう！！ 」

そんな声と共に壁に叩きつけられる。

そろそろ辛い。

「・・・休憩だ。そろそろ腕が限界だろう。」

ネルが兄貴を叩き起こし、模擬戦を始める。兄貴は顔色が優れないのか青白く見える。

お気の毒に・・・

そんな事をしている間に日は暮れ、寒さも一層増してきた。

「そろそろ時間だ。どうだ？ なにかコツは掴めそうか？」

「ああ！！バッチシ！！」

俺は親指を突き出す。

「えゝなにになに何の話？」

「兄貴には関係ないよ・・・ってかその格好寒くない？」

ネルと俺・・・と言うよりもティアとの対戦のせいか服がボロボロで肌が見える。

「さ・・・寒い。」

「やっぱりね。」

そのまま放置をしてネルとの会話に戻る。

さつきから話しているのは、技の会得に関してだ。

初代具現士、レトンが使ったとされる技だ。

完璧に扱ったのはレトンただ一人らしい。

技の特色は具現化と魔術の融合。

そこからページがごっそりと抜かれていたからよく分からないけど多分、魔術さえも具現化してしまう凄い技なのかもしれない。そう思っずっと考えているのだ。手始めに魔術の属性を想像し、それ＋その属性の形を何かに変え、具現化するのだが分裂し、魔術は魔術。具現化は具現化となってしまう。

・・・さつきまではな！！

やっと手がかりを掴んだんだ！！

これには比が関係しているんだと思うんだ。そして、具現化に対しても幾つか条件？みたいなものがあつた。

まずは、魔術と具現化の比を7：3にするんだ。この比は力の入れ具合に関する比だ。俺は同等に力を入れていたみたいで分散されてしまったらしい。そこまで俺も頭が回ら無かつたよ。

んで、どっかの比を上下にしてみると、具現化したものにその属性がくっ付いていたり色々ところんがらがつてきたんだ。

普通の魔術はあまり形は作らないらしい。

例えば炎なら放射、弾丸などと、放つ状態か、玉として飛ばす事しかできないらしい。

雷なら落雷や、放電しかないと、多々弱点があるのだ。

ほんと、ゲームと違うんだなあってつくづく思うよ。

なんか、こう、悲しい。

おっさんが見せてもらったのだと、手から炎を纏った鳥や、指から水の人形が動いたりと形を宿していたという。

それをするには、具現能力の比率3を使うみたいだ。

ま、よく俺も使い方がわかんないんだけど・・・

つくそぉ〜後完成まで少しなのになぁ〜!!

「今日はこれ位にして明日明後日に備えな。どうせ誰かしら助けを求めてくるだろうよ。」

仕事があるのが分かったのか、ネルが俺に言ってくる。

「・・・分かった。んじゃ、先に行くよ!今日はありがとうね!」

「おう。」

挨拶を交わしあの小屋へと戻る。

寒々とした外を小走りしながら通る。

雪が深々と降りより一層と寒気が増す。

冷めた体を摩りながら小屋に戻るとテーブルに袋と紙が置いてあった。

袋の中は何かが含まれていた。

次に手紙に目を移す。

あまり無理はしないように。

これは私とミースさんで作った物だ残さずに！！

と丁寧な字で書いていた。

私とミースさんと出ているから恐らくリクさんだろう。

え？違ったらって？

他に誰かいるのか？おっさん？（ぐノ．．）ナイナイ

あつたら吐くってwww

そんな事を思いながら包まれた食べ物を覗いてみると、鍋があつた。

やった！！鍋だ鍋！！

俺鍋大好きなんだよね！！

そう思いながら、袋から取り出し、具現化したガスレンジで温める。

その間に、マフラーを脱ぎ服をジャージに変え、ティアとリベルとお喋りをする。

いつの間にかグツグツと鳴り出しそろそろ食べごろだ！！

・・・そう思ってた俺は絶句した。

ダスパのギロチン煮

だった。

ダスパのギロチン煮。

ダスパと言う牛をギロチンにかけ、その顔の出汁で作られる伝統料

理だ。

そう。開けた瞬間に変な臭いと、牛の顔が汁と具から飛び出し俺を見つめていた。

俺は黙って鍋のふたを閉め、ガスの炎を消し、一人二刀を抱いて泣いていた。

51話：レオニス国王！？

起き上がったても現実には現実。

ダスパのギロチン煮は消える事は無かった。

ため息をついてもしょうがないから、異常な悪臭を放つ鍋に近づくくつ！！なんて圧力だ！！

なあゝんて言ってるけどただ臭くて近づきたくないんだよ・・・

” さっさと片付けてくれ。これじゃ俺まで腐る。”

リベルが俺を急かす。

「分かっているって！つくそ・・・失敗した。」

何に失敗したのかって？鍋を温めて、蓋を開けた事だよ。

やっとの事で触った鍋は完全に冷めていた。

「なんかこう、持つと何とも言えない感情が襲ってくるんだが・・・

」

皆なら分かってくれるよね・・・って皆って誰だよ。

ぶつぶつと愚痴をこぼす。

始末の仕方はいたって簡単！！

土の魔術を使って、鍋の中の汁と具を閉じ込める。

それを今度は風の魔術を使って遙か空の彼方へとぶっ飛ばす。

これで終了！！

なんともまあ清々しいこと。

ただ注意することは、その土を国内に向かってぶっ飛ばさないこと。でないとなんか大事になってしまうから。

手をパンパンとほろい、残った鍋をキッチンで洗う。すんごい狭いです。

洗ったら疲れたせいか目がシヨボシヨボになってきた。眠気を堪えて洗い流す。

終わるとすぐに部屋に戻り布団を敷く。まだ整理していないから布団しかないのだ。一気に力を抜いて眠りに就く。

数分すると

”・・・寝たか。”

”多分。それより内緒にしていいいんでしょうか？”

”構わないだろ。まだ時間はある。それにあいつの驚く顔を想像すると・・・笑えてくるぜ。”

”そうですね。ゆっくり考えましょう。”

と刀達がこっそりと話しあっていた。

俺はその会話を知る由もなかった。

次の日になると仄々（ほのぼの）とした生活が一変、慌ただしい生活に変わっていた。

小屋に鳴り響く鐘の音。

これが俺の生活を変えた事を告げたんだ。

この鐘は、国の情報部が俺に送ってくる出勤を告げる鐘だ。鐘が鳴り終わると同時にその仕事の内容を俺に教えてくる。今回が初仕事なんだが・・・

「寒い・・・辛い・・・」

昨日の疲労がまだ溜まっているようで、やる気が起きない。渋々その仕事の内容を聞く。

「国の東門の道より！何者かが大群に追われている模様！！すぐさま保護してください！！」

「！！分かった。東門だな！？」

俺は気だるい体に喝をいれ外に出て望遠鏡を具現化し東門を覗く。よく見ると、数人の兵士と一人派手な格好の男が後ろの兵士の大群からこちらに逃げてくるのが見えた。「行くぞ！！」

足場から勢い良く飛ぶ。凍て付く風が俺を遮る。そのまま風の魔術を使つて飛行する。結構気力を使うんだよこれ・・・数秒すると東門の真上に来た。

「よしここらでいいか。」

東門の上に降りて想像を開始する。

あ・・・足が痛え！！うおおおお！！

そんな事を考えている場合じゃない。

想像を開始する。形は正方形・・・全長200M・・・出現場は・・・そこだ！！

出現場。俺が新たに覚えた能力。今までは光の球として具現化していた物を狙った場所に出現できる能力だ。ただ弱点が動いていない物限定だ。

ま、人も止まっていれば範囲内だけど。

「そおつらよ！！」

タイミングを図り上に手を思い切り振りあげる。

ゴオッと凄いい音と共に雪が積もった地面が盛り上がりそこから正方形の壁が出来ている。

「今のうち！！」

風跳で一気に転げた数人に近づく。そこで俺は驚いた。

逃げて来ていたのは少し痩せ細った体に威厳を象徴するかのような派手なマントをひらひらと靡^{なび}かせているレオニス国王だった。

おかしい。あの宣戦布告をしたのはこのレオニス国王本人のはずだ。そんな人がなんでうちの国に逃げ込もうと・・・？

考えても仕方ないので、この数人を運ぶ事にした。皆、俺の顔を見るや否や泣きそうな目をする。

「話は後です。少し荒いですがお許しを。」

具現化した数枚の紙にエルストリア東門と書いて皆に渡す。

「絶対離さないで下さいね？」

そう警告した後、魔術を発動させる。

シルフの言伝。

それがこの術の名前だ。

風の精霊、シルフが風に頼んで言伝を飛ばしたという説から来た技らしい。

広範囲の移動は人間の力ではできないのが弱点だ。

ビュンと風が一吹きすると同時に兵士達は一直線に東門へ飛ばされた。

「さてと・・・こいつ等どうしようか。」

壁の想像を崩し向こうにいる敵兵たちと対峙する。

「はぁ・・・お前ら一体何の真似だ？」

派手な金ぴかの鎧を身にまとい、武器を構えるレオニス兵。いつ見ても眩しいなぁ・・・凄い目が痛いんだけど。

「黙れ！！俺等はいつを殺さないといけないんだ！！」
焦り気味の様で俺に喰って掛かってくる。

「頭冷やしなつて・・・いいか？あんたらの殺そうとしてんのはあんたらの国の王様だろうが。どう言う神経してんだよ。」

「お前に何も分かるまい！！」

「当たり前だ。何にも聞いてないからな。さて、言っておくぞ？帰ってくれ。俺もお前らを殺したくない。」

どっかのキャラの台詞っぽいけど本当の事だ。アイツみたいな事はしたくない・・・もう・・・

しかし、俺の注意も聞かず構えに一層力を入れる。

「・・・分かった（スウ）俺も容赦はしない。」
そつとティアを抜く。

派を形成する。今回は分が悪いから太刀にする。あのセフ ス以上の長さで力に任せて体を捻る。

『おおおおおおおお！！』

全員俺に飛びかかってくる。

大半に当たり真つ二つになった者もいる。やっぱり俺血苦手だわ。

しかし、まだまだ溢れてくる。

「死ねええええええ！！」

そう言つて何十人も兵士が俺に再び襲いかかる。

払い戻すのに時間がある！！具現化も間にあわねえ！！

そう思っていると、後ろから何かが飛んできた。それはいくつもの
槍になって飛んで行った。振り返って目を凝らすと金色の乱れた髪
を靡かせ、手をパンパンとほろろりクさんの姿が見えた。

52話：レオニス国王、拘束される

・・・マジかよ。距離が半端なく遠い。

東門から数歩歩いただけの距離から投擲したみたいだ・・・ええええええええええ！？だつてあの・・・ええええええええええ！？

俺の口は空いたまま塞がらなかった。あのリクさんだ。これぐらい出来そうな気もしたけど、仮にも女の子だ。そんな子があんな距離から投擲するなんて・・・

ん？何か合図を出している。

そ・い・つ・を・と・れ

何かそんな気がする。言われた通りリクさんの投げたランスを回収する。

そこで気がついたことが一つ。投げたのは一本だったはずなのに幾つもの心臓を捕えていた。他に目をやっても、ランスは一本。だったらあれは一体なんだったんだろう・・・

抜いて後ろを振り向くとリクさんが立っていた。

早ええよ！！どうしたらあんな距離を短時間で！？あれだよ！ギネスブックに載るよ！！

「ふう。」

ただ一呼吸置いただけのリクさん。

「おかしいだろ！？普通もつと息切らすもんでしょ！？」「まったく！どうかしてるぜ！！」

「そうなのか？私はあまり苦しくなかったけど・・・」

「そうなの！！」

やっぱり少し男の子・・・まあ、並みの男の子以上ですよ。

”おい！まだ後ろに数人いるぞ？”

リベルに言われた通り後ろをみると数人の兵士が弱腰になっている。

「もう一度忠告すんぞ？帰んな？俺も殺し合いはしたくないんだつて。」

「ック！一旦退くぞ！！」

一人の掛け声と共にソソクサと逃げて行った。

「・・・こいつ等どうしよう。」

俺の疑問に即座にリクさんはこう答えた。

「焼くよ。」

残酷すぎんだろおお！？

ほら！！焼き肉食えなくなるから！！同じ匂いだから！！

何も言わず炎を死んだ兵士達に当て燃やす。

鎧が溶けて、嫌な臭いになる。

「そろそろ戻ろう？」

リクさんが俺の片手を引っ張って行く。なんともまあ・・・男らしい／＼／

「私は女だ。」

し、思考を読まれるだど！？ばかな！！

「東門に誰がいなかった？」

誤魔化しついでに俺が聞いてみると、

「いたいた！凄いい派手な恰好だったけど・・・」

どうやらあったらしい。

「うん。あれ、レオニス国王。」

「え！？あれが！？・・・知らなかった。」

結構普通の反応だな。

「しかも周りにいたのは、こちらの兵士たちだったから驚いたよ。」
ん？そうだった？

「今頃、国王ということは、王城に行つて女王様と謁見を申し出て
いるんじゃないか？」

「・・・どうだろう。リクさんレオニス国の事知ってる？」

何となく嫌な予感がする。

「いや、商業の中心国という事しか・・・何かあったの？」

やっぱり！！

「ごめん！！話は後で！ヤバい事になりそうだ！！」

「ち、ちよつと！！」

そのまま、俺も王城を目指す。

”主様。何を慌てているのです？”

「ティアか！やべえぞ！！レオニス国王がエルストリア国内に入つ
た！！」

”それがどうかしたのか？”

「大有り！レオニス国王は前に宣戦布告の手紙を寄こしやがった！」

”と言いますと？”

「ああーだからー！！その国王が国内に入つたとしたら、兵士に捕
らえられてなにされるか分かつたもんじゃない！！」

それが俺の一番恐れていること。何時首を刎ねられてもおかしくない。

しかし、国王が態々（わざわざ）なんで危険な目に合っているんだ？そんなことを気にしていると、街中で一際目立つ姿が見えた。

「レオニス・・・いたぞ！！捕らえる！！」

この声には聞き覚えがあった。おっさんだ。

その声と共にレオニス国王は囲まれ呆気なく拘束された。

「おっさん待ってください！！なんか理由があるはずなんだ！！」

俺はおっさんに喰いつく。

「坊主。こいつは知ってるだろうが！！内の仲間を痛めつけた野郎だぞ！！？」

「知ってるよ！！けど・・・何か変な感じがするんだ！！」

おっさんとの口論が聞こえたのか、レオニス国王が俺の方を振り向く。囲まれているせいで俺は良く見えなかったが。

「その声はタケット君かい？」

紛れもない国王の声だった。

「国王！！何かの間違いですよね！！俺知ってますよ！何か理由があるんですよ！！？」

絶対何かあるはずなんだ！！

「・・・ここでは言えない。すまない。」

「ほら歩け！！」

一言謝ると、力ずくで体を押され歩かされて行った。

「・・・おっさん。国王どうなの？」

「ああ、まずは女王様と謁見させる。」

良かった・・・まずは俺も行かなきゃ。

「ちよつと待て。いったい何があった。お前の慌てようと言い、レオニス国王の顔色と言いおかしいぞ？」

「・・・」

俺は有りのままの事を話した。

「成程な。それで何かあるはずと。」

「ああ。」

「ま、こんなところで話してても始まらねえ。ホラ、王城行くぞ。」

あんたが止めという誘うなんておかしくないか？

そんな疑問を廻らせながらおっさんと王城に向かう。

53話：協力と感謝と馬鹿発言（前書き）

タケト君はおバカみたいです。

53話：協力と感謝と馬鹿発言

王の間

「それで・・・どういう裏返しですか？」

女王様は怒りを抑えながらレオニス国王に語りかける。

「・・・私の国は・・・」

そう言っていると俯いてしまった。

私の国と言っているとレオニス国の事だろう。それがどうかしたのだろうか？

「私の国はオルティガの手に落ちました。」

『！！』

辺りがどよめき始める。

そっか、この国もオルティガにやられたんだっけな・・・

「それで？」

女王様は冷徹にその言葉を放つ。

「どうかお力をお貸してください。」

レオニス国王はその場で土下座をする。

おいおい！！国王様だぞ！？んな簡単に頭へコへコしていいのかよ！！

「・・・あの。」

一人の兵士が出てくる。

鎧は身にまとわず、毛布に包まり他の兵士さんの肩を借りて女王様の前へと向かう。

しかし顔は凄い腫れている・・・と言う事はこの人はレオニス国に捕まった人間だろうか。

「レオニス国王は我々一般兵の命の恩人なのです。」

泣きながら話す。

・・・やっぱり。捕まった兵士か。これで合点がいく。

「捕まった我々を必死に逃がしてくださったんです。その際我々を庇い手を矢で・・・お願いです・・・どうか助けてください・・・！！」

泣けるじゃねえか・・・

「・・・分かりました。まず今日はひとまず休んで下さい。これから考えて行きましょう。」

「あ・・・ありがとうございます。」

そう言つて再び頭を下げる国王様。

だくかゝらゝ！！頭へコヘコしないでって！！

なあゝんて言えないけど。

「それでは寢室を手配しますので少々お待ち下さい。皆さん？お願いします。」

『は、はい！！』

元気よく返事をして慌てふためく兵士達。

・・・俺どうしたらいいんだ？

「タケト君。さっきはありがとうございます。庇おうとしてくれて。」

レオニス国王が俺に向かって礼を言ってくる。

「いえ！！全然！普通にわかることですよ！！ただ皆、仲間を捕まえた国王本人が出てくるから我を忘れたんではないかと。」

「流石タケト君だね。そこまで見分けているなんて・・・」

「いやあゝそれほどでも／＼／」

照れちまうぜ！

「そうそう！謙遜はいらないよ！そっちの方が自然だからね。」
確かに。そこまで配慮はしてなかった。

「けど、国王様よくここまで逃げてくれましたね。」

「まあね・・・抜け道とか、たくさん使ったお陰で傷ばかりだけだね。」

恥ずかしそうにポリポリと頭を掻く。

その手にも傷はあった。包帯・・・と言うよりも布切れをグルグル巻きにしている。恐らくさっきの兵士が言っていた庇った時の傷だろう。

「それで？なんで国が乗っ取られたんだ？」

上から目線の声。

振り向くと銀色の髪、真つ赤な目の青年が立っていた。

「あ、ネル。何処居たの？」

そう、女王直属の部隊、クゲンの隊長を務めているネルオーネだ。

「さっきから後ろにいたが？」

あらら、ご機嫌斜めだなあ。

「悪かったって！な？この通り！！」

俺は両手をパンと合わせ頭を下げる。

「・・・はあ。ま、いいさ。んで？さっきの質問だが。」

「あ、ああ、そうだなあ。先ず事の初めは3日前。何時もの様に輸送する資源契約書にサインしていた時のことだ・・・」

「ちよい待った！！」

「ん？タケト君どうしたんだい？」

「3日前って最近ですよ？宣戦布告の手紙が来たの昨日なんですけど・・・？」

そう。昨日宣戦布告を知らされたばかりだ。一体どゆこと？

「・・・馬鹿だな。いいか？レオニスからここまで何百？も離れたんだ。言伝寄こすのにそんな位かかっても不思議じゃないだろうが。」
あ・・・そっか。

「フフフ・・・続けるよ？」

軽く笑われながらその後のレオニス国王の話を聞くことにした。

53話：協力と感謝と馬鹿発言（後書き）

これからも宜しくお願いします。

54話：国崩壊の理由（前書き）

今回は文章だけです。

読みにくかったらすみません＞＜

54話：国崩壊の理由。

「契約書のサインも一段落したところで、僕は一休みしたんだ。僕は自分の国が大好きだから毎日歩いて皆と友好関係を築き上げているんだ。そんな時にエルストリアの兵士数人が資源が尽きそうだから少し足してくれないかと言われてね。もちろんokしたよ。それでご機嫌になったエルストリアの兵士達は国を去ろうとしたんだがね？まさにその時警報が出されたんだ。」

「敵が進軍中！！鎧からしてオルティガだ！！」

ってね。

そしたら、エルストリアの兵士が僕の国の兵士と一緒に応戦すると言いだして、勝手に飛び出して行ったんだ。目に見えている戦いだった。何せあの三魔称^{さんましよう}がいたからね。」

「ち、ちよいたんま！！秋刀魚症って何？なんかの障害？」

「・・・三魔称な？三魔称ってのは、オルティガを支える刺客の事だ。ま、名称の通り三人いるんだ。」

「へえ〜。」

「まあ、言っでは何だけれど、僕はその時点で諦めたよ。三魔称の一人、魔眼のアイリンが来たからね。」

「まがん？アイリン？」

「・・・ホント。何も知らねえのかよ。魔眼のアイリンつつと、有名なのじゃ一夜の石城^{せきじょう}だな。」

「そうですね。タケト君。その一夜の石城と言う話はある国王がある国を作ったが、その国は一夜で崩壊した。という話なんだけどね

？凄いのこれからなんだ。次の日、その国を視察した兵士はそれを見てビックリ。兵士、民間人、国王さえも石になっていたんだ。しかも形は人間のまま・・・ね。」

「・・・まるでメドゥーサみたいだな。」

「なんだいそれ？」

「いや、ええ〜っとその・・・そ、そう！！僕のいた国の昔話に似ているんですよ！！」

「へえ〜どんなお話かな？」

「ま、まあ。昔話ではメドゥーサの目を見た者は石にされるって言う話ですよ。アイリンって言う人はどうか分かりませんが。最初は体が硬直だけするらしい話だったんですが、現代では石になると解釈されたみたいで・・・って聞いてます？」

「・・・それがね・・・アイリンも同じなんだよ。」

「え？」

「アイリンも目を見たものを石化するんだ。片目が魔眼と呼ばれる目だね？それを見た人は確実に石化するらしいんだ。」

「・・・勝ち目ねえ！！」

「だからそう言ってただろうが。」

「そだっけ？」

「ハハハ・・・話が脱線しすぎたね。それでアイリンは僕に交渉してきてね。この国と僕の地位を寄こせてね。かなり横暴だけど、

でないと国民達の命が危なかったからね。渋々了承して監禁されていた君等の国の兵士と逃げてきたって訳です。まあ、亡き者にしようと追手を寄こされましたがね。」

「国王……」

「そ、そんな顔せずに！！ほら、力を貸してくれるのでしょうか？」

「も、勿論！！」

「それは良かった。よろしく頼みます。」

「はい！！」

「しかし妙だな。師匠は手を出さなかったのか？」

「師匠？」

「ああ、ルナさんの事ですね？彼女は世界を放浪してと思っていますよ？」

「癖は直らず……か。」

「ネル師匠さんいたの？」

「当たり前だ。俺一人だったらここまで強くはなれなかっただろうさ。」

「へえ……」

「ただ、彼女が国に帰ったら厄介な事になるでしょうね……」

「確かに。俺も何を仕出かすか見当もつかん。」

「……どんな人だろう？想像出来ねえ。」

「それより、国王は休まれて方がいいんじゃないですか？ほら、あつちに兵士が待機してますし。」

「おっと、本当だ。すまないけど先に休ませてもらうよ。本当に今日は有難う。お陰でこの命を救われたよ。」

「そこまで言わると照れますっば／＼／」

「はっはっは！それじゃあね。」

「お休みなさい。」

「さ、俺もお前も仕事に戻るか。」

「え！？俺も？」

「当たり前だ。多分山の様になってるだろうよ。」

「そんなあゝ！！」

55話：番外 再会

皆さんこんにちは。

いきなりですけど僕は丘崎丈人の兄の嘉人と言います。

早速ですが、少し前に弟が行方不明になっているんです。

家族皆、精神がおかしくなってきました。

妹はいつもの覇気が無く、学校でも何か呟いているらしいんです。母さんはショックのせいで入院。父は海外から態々（わざわざ）探しに。毎日毎日警察の事情聴取。弟はどんな人か。学校では虐めを受けていないか。家ではどうだったかなどと永遠に繰り返してくる。本当にうんざりしている。

「詩音？兄ちゃんまた探しに行つて来るけど、待っていてくれるよね。」

自室にいる妹の詩音に尋ねると「いつてらっしゃい。」と感情のないロボットのよう言い放つだけ。

「はぁ……」

息を吐き出し、また探しに出かける。

「全部行つてみたんだけどなぁ。」

そう思つて弟の居なくなつたトイレの個室のある学校へと向かう。

黄色い線を通り越し個室に入る。

うー！く……臭い！！

「まさかあいつ用を足して・・・」
変な想像はやめよう。

そんなことを考えていると後ろに人の気配がする。

「誰ですか？」

誰もいないが今度は頭の中に何かがいる感じがした。

「・・・あなたは誰ですか？」

「ん？私わたくしですか？私は・・・いえ、詳しいことは教えられません。」

「もしかして。丈人さんのお兄さんの嘉人さんですか？」

「！！なんでそれを！」

興奮気味の気持ちを抑え、軽い咳払いをした後、改めて質問をする。

「それはいいとして。あなたなら弟の丈人の居場所知ってますよね
！？」

最後の頼みだ。

「まあ・・・」

やはり。

「教えてください！！僕の弟は何所に居るんですか！？死んでない
ですよね！？大丈夫なんですよね！？」

「そう焦らないでください。大丈夫です。死んでいません。」

ホッとした。良かったそれだけでも知れて本当によかった。

「けれど、今はあなた達の所に返せません。」

「え・・・？」

その一言で頭が真っ白になる。

「どういうことですか！！弟は何も悪いことしてないじゃないですか！！」

僕は喰って掛かる。

「そう言われても・・・。」

「分かりました。ここには呼べませんけどあなたを丈人さんのいる場所へ送ってあげましょう。」

！！

「本当ですか！？本当に本当ですか！？」

「二言はありません。」

キリッつと言ってみせる。

やった！！これで丈人に会える。無事が確認できる。

「ただ悪いんですけど、時間制限させていただきましたよ？」

「それでもいい！！お願いします！！」

早くしてほしい。

「・・・はい。制限時間は・・・今4：30ちょっとですから7：00ぐらいですね結構長い方なので。後は時間が経つの目を瞑って待っていてください。」

言われた通り時間が経つのを目を瞑って待つ。

すると数十秒すると、意識が無くなり目が覚めると、見知らぬ世界に居た。

何処かの家みたいだ。

日本の家とは違う、木の家だ。

辺りを見回していると、ギィ・・・とドアのあく音が聞こえる。

割果たしてるスカリオって言うんだ。」

そうだったのか。

「初めましてスカリオさん。僕は実の兄の嘉人といいます。」

「おう！！初めまして！！こっちで兄貴分やらせていただいているスカリオって言うもんツス！！」

それから色々と話をしてあつという間に別れの時間。

一枚記念に撮った写真をポケットに大切に詰め込んでその時を待つ。

「兄貴。俺の心配いらないから。大丈夫！」

そう言つて無邪気な笑顔をみせる。

「ああ。そうだな。皆にも元気だったって言っておくよ。スカリオさんも弟をよろしくお願いします。」

「兄貴さん・・・分かりました！タケットは任せといてくださいえ！！このスカリオ！命を賭けてお守りします！！」

「兄貴。大袈裟すぎ！」

丈人が顔を真っ赤にしている。

「はっはっは！！そりゃ頼もしい！お願いします。それじゃあ。じゃあね。」

そう言つて、元の世界に戻ると真っ暗な臭い個室にいた。

「丈人さんは元気だったかい？」

作者さんが立っていた。

「はい。今日は有難うございました。」
本当に感謝してます。

「いえいえ。気を付けて。」

「はい。それでは。」

そう言つて一礼をした後に走って帰る。

ポケットを裏返すとあの写真がきちんとあった。
「あー！それ大事にとっておいてくださいね？」

あの個室から顔を出し手を振っている。

恐らく奴さんは何かを使つて、これをこの世界まで残してくれたのだらう。

「あ、有難うございました！！」

僕は深く深くお辞儀をした後に走つて家に行った。

しかし、奴さんはあんなところに住んでいるのだろうか？

家に帰ると、妹がテーブルで黙々と自分で作つたであろうご飯を食べている。

「詩音！！見てくれ！！」

僕は持っていた写真を詩音に見せる。

「！！」

案の定驚いた表情で僕を見て来る。

「兄貴！！これ！！」

よくよく見てみると、裏に何かメッセージが書かれていた。

それを見る前に僕は詩音に丈人の事を話す。

「そつかあゝ兄貴元気かあゝ。」

柔らかな笑みを浮かべ写真を見る。

「それで裏には何て書いているんだ？」

僕が聞くと、

「皆にメッセージある！！」

と喜び顔で言う。

僕はそれを取り上げ、見る。

母さんへ

体大丈夫？突然消えてごめんな？俺大丈夫だから元気出して？ほら、写真見て見てよ。友達できたんだ！だからさ。早く良くなってね。

父さんへ

海外出張から帰って来たんだって？大それた事になってるなあ。大丈夫だから仕事復帰して皆をお願いします。

詩音へ

鬱状態だって？情けないなあ。いつもの元気はどうした？大丈夫。元気出せ！俺も頑張っから！

兄貴へ

さっき会ったばっかでビックリだけど、皆を頼む。以上。

「あいつ・・・」

自然と涙が出てきた。

「お母さんに見せに行かなきゃ！！」

そうだね。

「よし。父さんに連絡付けてから、行こうか。」

「はい！！！！」

詩音も元気になったからよかった。

さて！あいつの無事を祈りながら僕も頑張るかな！！

56話：手がかり

いやあ〜ビックリしたぜ！！

兄貴が来るなんてな！！あれで皆元気になればいいなあ〜！！

「な！な！タケトの兄さん良い兄さんだな！！」

「黙れホモ。」

「ひっでえ〜」

こつちの兄貴は相変わらず。ってか兄貴の事異様に聞いてくるな。

「それよりもさ。あの技さ・・・ええ〜と何だっけ？レトン様の使っていた技だっけ？多分違うぞ？」

「へ？」

俺はスカリオにあの特別な技を話したのだがその答えがこれ。

「それどう言う事？」

「ん〜と。デガルドさん多分昔の話してたんじゃないかな？昔は術は形を宿さなかったらしいから。今では自由自在だよ。ホラ。」

そう言つと水を手に出し、形を作る。形は蛇のような形になった。

・・・じゃあ何が正解なんだああああああ！！

「・・・そ、そう落ち込むなって！！な！俺も考えつから！！」

有難いけど五月蠅い。

「少し黙れ。」

「は〜い！！」

懲りないみたいだ。

結局その後も答えは出ずに一日を過ごしてしまった。

やっぱり一人は寂しいね。

”主様？一人ではありませんよ？”

「おつとそうだな・・・って、心を読んだのか？」
”口に出してた。”
「・・・そっか。」

そんな話をしていると急に眠気が俺を襲う。

さて、寝る前の読書もこれ位でいいか。

「お休み。」

そう言つて二刀を抱いたまま布団に潜り込んだ。

次の日も、その次の日もやはり答えを見つけれないまま仕事をこなしていく。

さて、どうしたらいいものか。

「タケト君。どうしたんだい？」

「あ、国王様。」

俺の後ろにはレオニス国王が立っていた。

「いえ、少し考え事をね。」

「なんだい？言ってみてくれないかい？僕でも力になれるかもしれない。」

「・・・」

思い切つて話してみる事にした。

「あのレトン様の。」

レオニス国王もレトンを知っている。やっぱり皆に慕われていた証なのだろうか。

「いやあ。昔僕も小さい頃に遊んでもらった覚えがあるよ。まあ、今ではその記憶もぼやけているけれど。」

少し照れ気味に頭を掻く。
へえ、そうなのか。

「あ。一つ記憶に焼き付いている事はあったよ。」
ポンと手を叩き何かを思い出したようだ。

「それは!？」

「うう、ん名前は覚えてないけど、凄かったのは君の持つ具現能力と魔術の変化だね。」

「・・・?」

よくわからない。

「ええ、つと分かりにくかったか。」

少し、戸惑い気味の国王。

「い、いえ!! 違います!! 俺の脳が悪いんです!!」
そう言ってその考えを否定する。

「そ、そうかい? まあ、簡潔にまとめると、具現化したものが魔術になったりその逆になったりしたんだ。」

「!？」

衝撃だった。

そんなことができるのか?

56話・手がかり（後書き）

ははは・・・設定が・・・

57話・試行錯誤です（前書き）

小説内も、設定も今の僕も

57話：試行錯誤です

その国王の話の後俺は礼を言い、仕事をした後、その稽古をするためにおっさんの家の部屋の一室を借りている。

「さて！！ティア、リベル。始めるぞ！！」

”張り切り過ぎだ。”

リベルが呆れたように呟く。

「そう言うなって！！」

俺は気にも留めず稽古に打ち込む。

変化・・・か。

まずは手始めに積み木の一つを具現化する。

ええっと？これを魔術に変えんだっけか。

「フン！！」

魔術を唱えても積み木は全く変化しない。変化したのは只、積み木の周りが水浸しになっていただけ。俺は水に変化させようとしたのだが失敗に終わった。

「難しいな・・・」

”根本的過ぎじゃないか？”

遠回しに頭を捻ろと言われているようだ。

「だったら、リベルはわかんのかよ？」

少し反抗。

”知っていたらさっさと教えてる。力になると言い出したのは俺だからな。”

きつぱりと言いきられてしまった。

「そつか。」

なんか・・・キュンと来たわ。

・・・いやいやー！刀に恋するほど俺は馬鹿じゃねえー！ましてや口調が男勝りだ。元魔剣だしー！男かもしれない！いや、女だったらグヘヘとかじゃなくて、刀だからー！うん！俺人間オンリーだからー！

とまあ、バカな事に気を取られ過ぎてしまった。
全く情けないことで・・・。

「やつぱ駄目かあー！！」

どさりと音を立てて床に背中をくつつける。

”主様。気分転換に外に出かけてみては？”

ティアが気を利かせて言うが

「ん？ああ。そうだなあ。」

俺は天井の何処か一点を凝視しながら軽く相槌するだけ。いや、特に何もないんだけど、何かあるかもしれないと思って見ているだけです。

”・・・えい。”

そんな掛け声と共に薄い青色に体を包まれる。

「ゴボツ！ゴガガ！！」

い、息ができない。

”主様が悪いんですよ？私が言った事を適当に返すから・・・”

とてもドス黒い何かの塊が頭を過ぎった。

何処そのヤンデレだー！！

そんなツッコミはどうでもいいー！！

早く抜けなくちゃー！！

「んー！！んー！！」

俺は力を振り絞り何もない空間に向って土下座をする。

” え？謝るから助けてくれ？”

そ、そうだ！！許してくれ！！

少しするとその何かから開放され、大量の酸素を体に取り入れる。
ああ！！何て生きるって素晴らしいんだろう！！

”・・・今回は許しますが、次からは・・・ふふふ。”

声にはなっていないので感情は伝わらないが、感覚ではその言葉一言で何を意味しているのか伝わった。

ティアって・・・ドSだったのかな・・・

そんな事を思いながら立ち上がり国の巡回がてら気分転換をしに外へと出て行く。

所々に善からぬ輩がいれば行って成敗しと言った何処かの詩のような木偶の棒の人の様な事をする。まあ、一種の人助けと思ってやっているんだけど。

57話：試行錯誤です（後書き）

さあ！最後の何処かの詩の木偶の棒とは誰の詩の物を使わせて貰ったでしょうか？

分かりやすいですね。有名ですし。

58話：連想ゲーム

はあ、雪も降り始めたし、手も悴^{かじ}んできた。

「どう変化させろってんだよ……。」
「いない弱音ばかりが出る。」

” そんな事を言っただって仕方ないでしょう。
お母さんの様に俺に指摘をするティア。”

「ううん。そうだけさあ……。」
「そうなんだけどさあ……。」

そんな事を考えながら外を見歩く。するとある行動が目には焼きつく。
雪玉を作る子供達だ。

「雪」と言う物を「玉」に変えると言う行動に着目した。
元々違う形の物がある形に変える。その他にも幾つか例があるだろう。

魔術もその中の一つだ。ティアの刃の変化だって似たような物だ。
後は全然違う物質に変えれば良いんだが。

俺は再び、頭を抱える。特に行く所も無くなったので、おっさんの
子供達の所へと行く。

……なんつう視線だ。

ドアを開けただけでこんな視線が集まるのだろうか。

俺を見て数秒すると啞然とした顔が笑顔へと変わり、走ってくる。

「兄ちゃんだー!!」

「何処行ってくてたの!？」

キャツキヤ騒ぐ子供達に囲まれ何だかモテた気分になる。

「ごめんな？ちよつと急な事があつて出かけてたんだ・・・暇なら今から遊ぼうか。」

キラキラした目で俺を見つめる子供達。もう・・・遊び倒したいわ！！

”主様？そんな事をしている場合では・・・”
言葉を続けようとするティア。

「いいんだつて。少しは息抜き・・・だろ？」

”はい。”

渋々と了承をしてくれるティア。

「よし！なにしようか？」

そう言つと一斉に皆が話して一つも聞き取れなかった。

「・・・ごめん！聞こえなかったから、君から！！」

そう言つて一番左の子に指名をする。

「連想ゲーム！！」

そう言つと皆丸くなっている。やる気満々みたいだ。

「よし！それじゃあ兄ちゃんから時計回りな！ええゝつと林檎！」

「赤い！」

「炎！」

「ボオボオ！」

「ネルオーネ！」

・・・子供ならではの言い方だけど・・・ボオボオでネルつて・・・

髪を感じ繋がりが！？ぷっ！笑える！！

林檎 赤炎

・ ・ ・ これだったらいけんじゃねえか!?

この感じはリベルだろう。しかも何時もより感情が昂っているのが分かる。

首を傾げていると、右側の子が引っ張っていた。

可愛いなあ！！もう！！

「えくすかりばー。」

・・・どうすればこの短時間でエクスカリバーで回ってくんだよ！
！ってかこの子等エクスカリバーとか知ってんの！？この世界にも
あんの！？

”照れます。”

” 入ってんだよこいつも。 2 聖剣に。 ”

「お兄ちゃん早くう！」

「えと、強い、強い……ぱぱ!!」

思っているよ？
そしてまた回り始める。

”ま、俺は知られてないけどな。”

「？なんでさ。」

”知られてないんじゃないかって忘れられたんですよ。”

「・・・？」

”俺の存在を知っているのは、もう100年以上前の人間だ。
へえ・・・。

「寂しかったろ？」

”ふん。慣れたわ。”

「そっか。」

「お兄ちゃん！次い！！」

俺は思った。

回ってくるの早い！！絶対俺を潰しに来てると。
と。

59話：四面楚歌と女の子

子供達との戦いも治まり一段落したところだ。

ふう・・・皆の目が赤く光って見えたよ。

「兄ちゃん！今度は、雪合戦！！」

まだまだ続くようだ。

「・・・よし！温かい格好しなきゃな！」

「はあゝい。」

するとバタバタと居間を飛び出して行く。

・・・さて、あの連想ゲームの事だが・・・最後に一つ問題がある。物質を変えたとしてどうやって魔術にするか。具現化と魔術は全く違う技法だ。それをどうやって合わせるかな。

「お兄ちゃん行く？」

「あ、うん。」

全く支度が早いことで。

外で本気を出さないように手加減をしながら投げ合う。

意外と子供達でも飛距離がある・・・って言うか、俺全方向囲まれているんだけど。

「いつけえゝ！！」

「わー！！」

一斉に攻撃を仕掛ける。避けれる訳もなく、俺は全体に雪を浴びた。特に顔と金的が痛い。誰か、石混ぜてやがった。子供のくせになんちゆう高度な技を身につけているんだろうか。

「僕たちの勝ちゝ！！」

キヤッキヤとハイタツチやら抱擁やらしている子供達・・・俺の心

配は？

すると、ぶつ倒れている俺に一人女の子が近づいてくる。その子は何時しかの無限階段事件の時に褒めた子だった。

「だいじょうぶ・・・？」

おでこを優しく撫でてくれる。嬉しくて、涙が出そうだけど手袋を履いている訳で。それで雪玉作ってたから冷たいんですよ。出来れば人肌が嬉しいんですが・・・。なんか変態みたいだから前言撤回です。とても嬉しかったです。

「ありがとう。」

素直に感想を述べると、顔を真っ赤にする。あらら、そろそろ体力的に限界かな？

「っこいしょ！おっし！そろそろ帰ろうか。ほい！おんぶ！」

体の雪を全てほろい落し、頭を撫でてくれた女の子をおんぶする。

「いいなあー！！！」

他の子達が羨ましがるが、今回はかりはこの子に贔屓ひいきをする。

「だーめ！あんさん等兄ちゃんいじめただろ？今回は、慰めてくれたこの子をおんぶして帰りまーす！」

「ちえー！！」

ぞろぞろと広場から暗い道のりを気をつけながら帰る。

「ただいま。」

すると、奥からミースさんが顔を出して来る。

「お帰りなさい・・・あらあ、皆汚しちゃってえ。」

片手を頬に当て、困ったポーズをする。

「すみません。」

「ううん。いいのよお。でも、タケトさんだけ妙にびしょ濡れじゃないかしらあ？」

「ああ、これは俺滑っちゃって！」

まともな良い嘘だと思う。

「あらあらあ。しょうがないわねえ。それじゃあタケットさんと男の子達は後ね。女の子達は先に入ってらっしゃい」

『はい!!』

ドタドタとシャワールームへと向かう。

「よつと！ほら、行つてこい!!」

おんぶしていた女の子を送り出す。何度かこっちを見るが、トテトテと走つて行つた。

「タケットさん？」

ぬうつと俺の背後からミースさんが話しかけてくる。行き成りな声にビックリして、硬直する。

「な、何でしょうか？」

「本当はなんで汚れてるんです？」

「・・・雪玉まみれになりました。」

「やっぱり・・・あの子達は・・・。」

「いや！良いんですって！！結構楽しかったですし！！」

子供達を悪者には俺がさせない！！

「・・・そう？あんまり無理せずにね？」

「はい！ありがとうございます！」

そう言つてビシャビシャでずっしりと水を吸収した服を引き摺りながら自分の元居た部屋を借りる。

「つふう。これでいいか。」

あの服はシルフの言伝で勤務先に送り届けるように書いて送つた。

その後、訓練部屋に行つて連想の奴を考える事にした。

59話：四面楚歌と女の子（後書き）

さて、そろそろ展開を変えていかないと!!

60話：炎の成り立ち。

”主様。気がお済ですか？”

「なんだかご立腹みたいだなあ。」

心なしか、言葉に一々棘がある気がする。

”いえ、そんなことは。”

「そう？」

”はい。”

「ま！ティアが言っただから間違いないよな！それより、練習練習！」

気合を入れ直し、まずは物を具現化する。先ほどの連想ゲームでやった林檎を出す。

えつと林檎、赤い、炎。だったよな・・・なんかアバウトすぎる気がする。

維持している林檎から連想を始める。赤赤・・・どう、連想させればいいんだ？ええつと、赤だろ？林檎の形からただの赤一色に変える。

するとそれに対応するように、林檎もただの赤い球体に変化してしまった。

・・・これか！！

やはり、この方法で合っている事を確認できた。

「さて！炎 炎」

周りから見ればクレイジーな少年に見えただろう。しかあし！！俺は至って普通の少年だああ！！

さて。これから炎に変えるんだよな。

・・・やべえ。緊張する。

俺の集中力が途切れる前に変えてしまおう。

そう思い、変える想像をし始める。赤から炎。赤い球体を炎へと変

える。

目を開くと、球体は案の定炎へと変わる。

「やったー!!」

思わず歓喜を口にする。しかし、その喜びもつかの間。すぐに炎は消えてしまったのだ。

” 惜しいな。 ”

「うん。なんでだろう。」

” 主様。それは炎の性質にあります。元々炎とは酸化反応が起こり、その反応から見られる現象です。その時に、物質が必要になります。燃やす物質と燃える物質です。この二つがなければ炎は燃え続けません。 ”

「・・・って事は、これにはどちらかが足りなかったのか・・・。待てよ？それじゃあ、俺等はどうなんだ？」

魔術で炎が使えるのなら、その定理が魔術でも通用するだろう。そうだったら燃やす物質と、燃える物質があるはずだ。

” 燃やす物質は酸化の元、酸素。燃える物質は・・・あんた等人間だ。 ”

「は？」

” いいか？人にだって「油」って言う、立派な燃える物質がある。それを使つて炎の魔術をしているんだ。昔の魔術師は、炎を自由自在には出来ず一瞬しか出せなかった。それは、燃える物質が人間にはないと考えられていたからだ。ま、すぐに油があるって分かつて使われてるけどな。なんなら、魔術唱えてみな。掌が熱くなってるはずだ。 ”

長々と話し終えたりベルの言葉に従つて炎を放つ。そして、掌を触

るとジューつと音を立てる。

「熱ッ！！」

” な？これを使えば使うほど、体の油分が足りなくなる。だから皆は気力や自然のマナを使って軽減してるけどな。”

そうだったのか・・・

” 今じゃ皆、気力とマナに頼ってばかりだ。”

「・・・じゃあ今までの説明は何だったんだ！！」

” なに。ちよつとした知恵の吹き込みだ。”

「何か微妙だったんですけど！？」

” そうか。まあ、多分あの瞬間にお前の人油で変えるんだろう。”
え？面倒だなあ。渋々やり直す。

「よつし。一瞬も見逃せん。」

また炎へと連想させる。今だ！！俺は掌を炎に翳^{かざ}す。しかし、勢いのあまり、炎に触れてしまった。手が恐ろしい程の熱さを帯び、直ぐに手をブンブンと振って熱さを和らげたつもりだった。

結局、その日は一度も成功せずに眠りに着いてしまった。

61話：目つてぞじ？

そして日に日に近づく戦争への恐怖と技の磨きに追われる日々。

やっと技は完成はした・・・かかった日にちは二週間。

明後日、レオニス国との戦争を控えているエルストリアは、配陣や策を練っている。戦うところは、カルマ平原。俺が初めてこの世界にきた時の平原の名前だ。まあ、場所なんてはつきり言ってしまうは無い。悪魔でもそこが大荒れすると言う推測だ。

皆は先に国の防御を固める。

最前線に立つのは俺とネル。中線にリクさん、おっさん。そして後ろにスカリオと言う配置になった。そこで疑問が。

俺、初戦線なんですけど・・・

戦争や戦の勉強はしたけれど実際出たことはない。いや、一生出ないと思っていた。頭を抱える俺にネルは、

「勝手に死んでくれる。もし、襲われても俺と互角に渡り合えたんだ。死にはしない。」なんて自信満々に言う。

いやいや、めっさ恐いんですけど！？何を言われようが、今の俺には逆効果だ。

「ふん！」

俺はあの技に名前をつけた。連想術。まあ、ありきたりな気がするが下手に蛇足するよりはましだ。

” やつと様になってきたな。”

リベルが珍しく褒める。

「そうだろ!!」

俺は嬉し過ぎて胸を張った。

” あまり調子に乗り過ぎると後で皆様に足元救われますよ?”

ティアがもつともな意見を述べる。

「おっと! そうだな! 気をつけねば!!」

危うく戦死するところだった。いや、まだ戦争してないけど。

他の属性でも試してみると案外すんなりといけた。今は風の連想術を特訓中だ。具現化させた硬い壁へのフェイント攻撃を考案中。

風の魔術から、剣へと変化させる。

上手く行けば、自由自在に剣を操れるだろう。

しかし、とても危険だ。ヘマをしたら逆に仲間を傷つけてしまう。

「ふうっ!」

風から剣へと変化させ、一気に突く。

深く刺さった剣を風へと連想する。すると刺さっていた穴がよく見えた。

「はぁ・・・」

ため息を漏らす。

とても体力を消費してしまうんですよ。それを簡単にやって除けたレトンを本当に尊敬してしまう。

まだまだだ!

「うおおおおお!!」

時間が許す限り俺はその稽古に没頭した。

家に帰っても誰もいない。

まあ、当たり前だが。

”主様。今日は何をお作りに？”

ティアが聞いてくる。

「ん？今日は栄養満点の野菜炒めだ。」

沢山野菜が入っていてとても歯ごたえがいいんだよ。

「ティア。包丁。」

ティアを抜くと包丁の刃を形成させる。

トントントン・・・

水洗いした市場から買ってきた野菜をリズムよく刻む。

手際の良い音のみが部屋中に響く。

”あいつも結構手際良かったな。”

リベルがボソリと呟く。恐らくレトンの事を指しているのだろう。

へえ。

「・・・よく考えてみるとさ、2人とも、何処かに目とかついてんの？」

ほんの小さな質問だが気になってしょうがなかった。たまに敵が襲いかかるったときも教えてくれたし、他にも仕事を助けてもらったこともあった。

”んあ？あるさ。お前には見えねえが。”

なんと、目があるそうです。

「マジかよ！知らなかったぜ。」

この二刀の主なのに知らなかったことが何とも恥ずかしい。

”もう。何かいやらしいですね。人の身体を探るなんて。”

いや、探ってねえよ。

”一つ一つ部分を教えてやろうか？”

「まあ、一応主だからな。それぐらい把握したいもんだ。」
本音ですよ。変な意味はないんです。

”お前がさつきから気にかかっている目は柄頭に、胴は柄に。鐔を挟んで刃の部分は足だ。鞘は言っではなんだがズボンの役割を果たしている。”

その瞬間に何かが頭の中で引っかかり動いていた手を止める。

「・・・まじで？」

”まじだ。”

”いやん”

これで、ティアが恥ずかしがっていた理由がようやく分かった。俺が握っている部分は柄。という事は人と言う胴体を触っているわけで。この反応からしてティアは女と推測すると・・・

「ッー!!」

トトトトトトトトトトトト・・・ものすごいスピードで野菜を切り、汚くなつた刃を水で洗い、鞘に納める。

”・・・乱暴ですね。”

ティアが口出しをする。

「う、うるさい！！変に意識しちまうだろうが！」

”情けねえ奴。”

その一言で俺の頭がパンクする。

「ああー！！もう！」

からかわれたタケトであつた。

「・・・頂きます。」

黙々と食べ始める。

” 主様。先程は乱してしまいましたが、変に意識というのは・・・”

” コイツも男、って事だろ。”

「・・・／／／」

反論が出来ない・・・。

「はぁ・・・」

何だか・・・これからティアが使いづらくなりそうだ・・・幾ら刀
といえど、話しかけれる刀だから、何かしら反応されては俺も困る
からな。

これからは慎重に使う。

そう決めた寒い夜のことであつた。

61話・目つてどいっ? (後書き)

男の子ならば一度は女の子の体に興味を持つかと思います。

62話：戦争開始と狂乱者。

そして戦争当日。

体調管理はバッチリ！昨日で一応連想術はマスターはしたつもりだ。

「頼みます。」

女王様の一言で一気に皆の士気が高まった。

各言つ俺もその1人。絶対にレオニス国王の国を取り戻す！そんな覚悟で国を後にする。

地響きの様な国民の暖かい声援に送られて皆それぞれの配陣に着く。

「坊主。気を付けてな。」

「此処は任せて！頑張れ！」

おっさんとリクさんから声援を受け、ネルと俺は最前線へと歩き出す。リクさんは北の方へ、おっさんは南の方へと歩き出した。まあ、スカリオの兄貴は西側だから挨拶できなかったけど、エネルギーチャージとか言つて俺に抱きついてたわ。

因みに当たり前だが、東側は俺とネルだけではない。国の兵士もだが、ネルの部隊。クゲンの皆も一緒だ。皆無言で歩いている。話が好きな俺にとつては何とも言えない嫌な空気だ。

「・・・怖いかな？」

不意にネルが聞いてくる。

「・・・す、少し。」

嘘です。本当はめっちゃくちゃビビってます。もう漏らしそうです。足もガクガク言っし。

「気楽に行け。お前は誇り高い具現士だ。何も恐れる事はない。」

肩にポンと手を乗せ、緊張を和らげてくれるネル。
誇り高い・・・か。何時しか聞いた言葉だ。

「ありがとう。」

意は固まった。言われたとおり具現士と言う称号を誇りに闘う事を決めた。

陣形を整え、その時を待つ。

合図は女王様の精霊。光のセントエルモで伝えられる。息を呑み、滴る汗を袖で拭い、じつと平原の先を見据える。
ピカッと頭の中が閃く感覚を覚えた。

来た！！来た来た来た！！

「散！！！」

その合図と共にクゲンの皆が一斉に散らばる。

奥の方から敵が走ってくる光景が見える。数が多すぎる。パツと見軽く500体は越している。

「ふっ！1000ちょいとは本気だな？此方も本気を出してやる！！」

ちよつと待て！1000ちょい！？軽く二倍じゃねえか！！クソ！

「タケト！」

「あいよ！！！」

ネルの掛け声で俺の任務は実行される。

あの兵士全てを囲むと言うとんでもない任務だ。

「ふっ！！！」

風跳を使い遥か高く飛ぶ。

上から見えた風景は凄まじい。光り輝く軍勢が大量にエルストリアへと走っている。

壁、壁、壁、壁――四方を囲むように具現化させる。

「りゃあ――！」

出現場。停止しているところであれば何処でも具現化ができる俺の技だ。地面からものすごい勢いで壁が兵士たちを囲む。しかし数が多すぎて全員ははまらなかった。

「ネル！」

「破――！」

ネルの大声と共に、散らばっていたクゲンの皆が囲まれなかった敵を殲滅しに向かうのが見える。一般兵達もその加勢へと向かう。

ええーっとこれからどうすんだ？

”先に進むはずだ。あの中の奴らは白髪の野郎に任せて後で合流をするはずだ。”

「そだっけな。」

しかし、リベルもネルも口結構悪いなあ。

俺はそのまま囲いを飛び越え、100km以上あるレオニス国を目指して走り出す。

「ふっ。こいつらどうしようか。」

ネルオーネは壁の上に立ち下の兵士達の足掻く様を微笑する。

「なっ！貴様！そこから降りて正々堂々と勝負しろ！！」

ガヤガヤと喚く^{わめ}兵士達。

大量の魔術を放つが全て外れる。

「その割には魔術使ってんだろ。下手な鉄砲も数撃ちや当たるとは言うが・・・これは下手って問題じゃないみたいだな。」

「わ、我等を愚弄するか！？」

「今のお前らなんて、愚弄する価値はない。簡単に操られやがってそんなに相手して欲しいなら・・・」

ぐしゃつと嫌な音を兵士の頭から立て自分から四面楚歌の場所へと舞い降りる。

「相手してやる。」

彼の目から朱色が消え漆黒へと変わった。

すると彼は途端に消え、姿が見えなくなっていた。

「がっ！」

後ろの方から声が聞こえ、振り向くと1人の兵士の首が180°以上回転していた。

その瞬間、兵士達は絶望感と敗北感を一気に感じた。

彼の顔は先程の余裕で冷静な顔つきとかけ離れて、まるで殺すのが楽しいような狂人の笑顔で立っていた。

「ひい！！」

今まで挑発を買い、人数で勝てると決めつけていた兵士全てが一斉に壁に縋^{すが}り付き叫ぶ。

「助けてくれ。」

と。

彼の周りには大きな空間が広がる。唯一その近くにいる人間達も、う既にこの世にいない存在。

その空間を作ったが最期。彼は順々に近くの兵士達を確実に仕留めていった。

その罅の中は死体の山になっていた。

最後に彼は、壁の上から魔術で作り出した炎をぶつけその醜い死骸の山を焼く。その顔はとても楽しそうに、まるで好きな何かを見つけている子供の様な浸り顔で燃えている炎を燃え尽きるまで眺めていた。

63話：険悪

あたりも暗くなり、寒さがより一層ましてきた。

「ううゝ！寒！！」

肩摩っても何も温かくねえ！！

”我慢です。”

我慢つつてもよお！！

嘆いても仕方ないので渋々合流地点まで歩く。

しかしリクさん達が気掛かりだ。大丈夫だろうか。

「具現士タケトとお見受け致す！！いざ、お相手願おうか！」
武将のような話し方だ。暗くて何も見えない。

「あ、いえ、暗いんで遠慮します。」

俺は直様戦闘回避へと移る。

「うむう。一理ある。ならこれならどうだ？」

すると俺と相手の周りが炎の渦で囲まれる。

「うお！熱っ！！」

さっきとは打って変わり激しい熱気に包まれる。

炎の明るさのおかげで相手の顔が露わになる。

相手は干からびた皮と骨だけのような図体をしていた。

「ヨレヨレじゃん！しかも何故上半身裸！？」

「ほう。某を変態扱いとな？」

「気に食わないような顔するなよ！」

「仕方ねえじゃん！こんな寒い中そんな肌露出するなんて常人がすることじゃないだろ！！」

「ふん。まあいいわ！いざ！勝負！」

「わ、分かった。受けて立ってやる！」

”主様。足、震えてますよ？”

「こ、こりゃむ、武者震いじゃい！」

”その割には声も震えてるな。”

「これも「チェストオオオオ！」スパン！！

うおー！こいつ不意打ちしてきやがった！！

「ち、ちよい待て！不意討ちは感心しないぞ！！」

「うえええい！」スパパパ！！

相手は俺の声も聞かず、奇声をあげながら縦横無尽に剣を走らせる。

「クッソ！・・・リベル！」

”任せろ。”

俺はリベリオンを抜き相手の剣の軌道を相殺する。

「つう！」

ぶつかると金属同士の強い振動が手に響き渡り力が上手く入らない。

”あいつ、剣に遊ばれてる。雑魚だな。”

勝手に相手を評価するリベリオン。

「オラオラどうした！」

ドンドン調子に乗ってきやがる！

「はああああ！！！」

俺も渾身の一振りをする。相手が仰け反った瞬間を見計らい、剣を一本具現化をする。

え？なんでティアを使わないかって？・・・何となくさ！

また縦横無尽に走らせて来た剣を俺も返す。軌道は読めるが攻撃を与える隙が見当たらない。

「ふっ！」

出現場を使い相手の真下に剣を具現化させ一気に上へと飛ばす。しかし、難なくかわされ空中で身を翻す。

「はっ！」

今度は術を唱えてきた。

どこから来る！？

右往左往を見渡すも術はこない。

すると背後にある炎の渦を使い炎を放射して来た。

「ぐああ！」

見事に俺の全身へと着火。

背後からかよ！卑怯者め！

「はっはっは！苦しめ苦しめ！！！」

相手は高らかな笑い声を上げ俺の燃える姿を見る。

しかし、俺が死ぬことはない。

ティアの特性だ。肌では熱などの感覚を感じるが体には害は及ばない。

しかも俺は一度ならず二度も火達磨になった。この熱さならまだ耐えられた。

「おらあああ！」

俺は火達磨のままリベリオンを相手へと突き刺す。

「ぐっ！」

運良く刺さったみたいだ。

早くこの熱さから解放されたい。

「無念だああああ！！」

一声叫ぶと彼の魂はリベリオンの特性によって吸い取られた。

炎の渦もやっと消え、俺を取り巻く炎も消えた。

「ぐへっ！げへっ！」

思い切り酸素を取り込む。

” 呆気なかった・・・と言いたいところだが、何だ？今の戦闘は。俺で一刺しすれば良かったものを。しかも魔術には簡単に当たるし。いつからそんな戦い下手べたになったのか。”

先程の戦闘が気に食わなかったのか、俺に八つ当たりをしてくる。

「ハアハア。し、しょうがないじゃんか！熱いし行き成りだったし・・・」

” ま、まあ、殺されなかったただけ良しとしましょう。ね。今は喧嘩

より戦争を終わらせることが先決です。”

「うん。」

優しいなあティアは。

” チッ！”

舌打ちなんて酷い！！

燃やされた服を新しく具現化し、
険悪な空気の中俺は合流地点へと
歩き出した。

63話：険悪（後書き）

闘う場面とか難しいですね＞＜

書いている方々を尊敬します。

64話：師匠、元隊長登場！！

ほむら丸一日を徒歩で過ごし、日が明ける頃にやっとの事で合流地点へと着いた。

「遅かったな。」

ぶつきら棒な口調で真つ白な雪に座り込んでいるネルオーネがいた。
・・・尻冷たくないのかな？

「いやあ！早いなあネルは！俺が先に進んでたのにもう追いついたのかよー！」

「まあな。お前より経験は上だから対処法は腐るほど熟知している。」

「マジかよ！すっげー！！！」

俺も腐るほど対処法を熟知したいわ！！・・・いや、腐っちゃいけない気がする。

「ホラ。さつさと行くぞ。」

そう言つとレオニス国がある方へと足を進める。

俺もつ少し休みたいんだけど・・・

「けどさあゝ。ネルよくあんな大群倒せたね。」

あの壁で囲った軍勢をどうやって倒したんだろう。

「フツ。簡単さ。壁の上から油撒まいて炎でボン。」

「・・・アバウトすぎねえ？」

「まあな。お前には想像つかないだらからな。」

「ぶー！！！」

俺は頬を膨らませる。

おいそこ、キモイとか言うな。

1、2時間歩いていると前から又もや敵の兵士達が道を塞ぐ。

「ほい。」

俺の風の魔術で空へと舞い上がる。

放っておけば何れ落ちるが死にはしないだろう。他の敵たちもあんなに簡単だったらなあ。

「運がいいな。あの中に魔術師がいたら厄介だ。」

「へ？」

「あ？知らないのか？兵士はあくまでも兵士。魔術は使えねえんだよ。」

「知ってるけどさ、なんで魔術師がいたら厄介なんだ？」

本で読んだが魔術師は高い攻撃力は誇るが、体力的に滅法弱いのが典型的なはずだ。

「ああ。それは世界的に・・・だ。ま、レオニスは例外。あそこは体力もつけるために魔術、兵士の両方の訓練をつけているらしい。その分、給料は二つ分の役職の量だ。」

「すつげえー！！そこまで知らなかった！」

「当たり前だ。これは数少ないお偉いしか知らない情報だからな。」
「・・・え？」

「待て待て。と言う事はネルはお偉い？」

「いや、盗み聞きだ。」

そういう事をすんなり言えるあなたは凄い！！

「・・・行こうか。」

「ああ。」

微妙な気持ちのまま足取りを進める。

丁度その頃に飛んでいた兵士達が大声と共に色々な体制で落ちてる。

あ、頭から落ちたあの人が死んだ・・・。

「つちい！面倒くさい兵士どもだ。」

リクさんは北側から攻めに來た兵士達を一掃している。

「終末の紅炎^{こうえん}、プロミネンス！」

力強い詠唱と共に紅色の炎が3本の一直線になり前方へと放たれる。

その炎の通り道が行き成り爆発を起こす。

その爆発と共に近くに居た敵兵が跡形もなく消え去る。

「まだ湧いてくる！！皆お願い！」

「ハイ！！」

彼女が言う皆とはエルストリアの魔術師達の事だ。

「その必要はあゝナイ！！」

誰かが何ともふざけた様な声で攻撃を仕掛けようとした魔術師達を制止する。

「誰だ！！」

声の方を振り向くとそこには、酒瓶を片手に冬の格好とは到底言え

ない上下が半袖短パンと言う異常な服装の女性が立っていた。

「る、ルナさん!？」

そう。その女性はルナ。ネルオーネの師匠の名前だ。

「ウィーッす!おお!??リクちゃんじゃなあゝいの!おっくゝ!!」

「あ、お、お久しぶりです!!」

彼女は元騎士団隊長、つまりリクの前の隊長と言う事だ。

普段はキリツとしたとてもリーダー的存在だが酒に滅法弱い。

「ああゝんだからね、ここは、このルナ様にお任せしてリクちゃん
は東の方守って欲しいのよう・・・オエッブ!」

「・・・」

やはり飲み過ぎているせいで顔色が優れていない。

65話：アップルミント

「あ？なにに？その任せられないみたいな表情！ひーどーいー！」

ルナは何か不満だったのかリクをトロンとした酔い目で睨む。

「め、滅相もございません！ルナさんの実力は私やネルオーネがよくわかっています！」

下手に相手をしていれば拉致があかない。

「だしょー？ほらほら、早く行った行った！あんたらも！・・・んぶー！」

口に手を当てながら催促する。

「は、はい！」

少し不安気味だが仲間を連れて東の方へと走る。

「さ、て、と。誰から遊んで・・・あげようかあ？」

いきなり変わった眼光があり得ないほどの殺気を放つ。

その重圧に押し潰されその場に倒れ込む人間もいた。

「う・・・うあああああ！！！」

何とか重圧を振り切り走ってくる兵士もいたが。

「武器に身を委ね過ぎよオ。武器と自分を一体化しなきゃア」

素手で武器を止められ、間近での殺気に耐えきれず、その兵士はそのまま帰らぬ人となった。

「ンクツ・・・ぶつはあ！やっぱ戦場は良いねえ。己の信念のぶつかり合いつて奴？堪らんわあ。」

酒を飲みながらそうは言っているがルナの前ではその信念がぶつからない。

「ホイ！誰か相手して欲しい人いる？ヒック！」
完全に泥酔している。

そのままその兵士達は一步も動けず足止めを食らうことになった。

丈人 side

「はあはあ・・・。」

”主様大丈夫ですか？”

ティアが俺を心配している。

「ああ、やっぱりあの戦闘が後から効いたのかなぁ。」

”軟弱だな。”

一々心に刺さるから！！俺、メンタル弱いんだよ！！

「悪かったな・・・。」

「おい、大丈夫か？」

ネルが後ろの俺の方を向き心配そうな顔をする。

「んあ？ああ、後ろはばつちりだ！！」

「いや、お前だって。」

「だ・・・いや、結構辛い。」

頭がボーっとしてきた。

「やっぱりな。少し休もうか。」

「ああ、ごめん。」

俺は謝るとそのまま近くの岩に背を預ける。

「熱、上がってきたんだろ？」

！？なんで分かったんだ？

「待ってる。今薬作ってやる。」

そう言くと、腰に巻いているポーチから草を取り出す。

”何でも出来るんですね、ネル何とかさん。”

「ネルオーネ。な？」

”お前とは違ってあのネルネルネルネは役に立つな。”

「それお菓子じゃん！なんでお前知ってんの！？」

”なんだそれ。それと興奮しすぎだバカ。黙ってる。
”なんだかはぐらかされた気がする。”

「お前がいて本当、ラッキーだった。」

そ、それって……

「薬研やげんと乳鉢、具現化してくれ。」

「あ、はい。」

変な期待をしてしまった。いや、決してホモではない。そう、友情としてさ。うん。

「……薬研って何？」

いやあ。器具はちよつと勉強不足だった。

「薬作るために、薬草を磨する道具さ。こつやつて。」

そう言つとエアーで動作をしてくれる。そこでやつと理解する。あのよく時代劇とかで使われている奴だ。と。

「ほい。」

少し大きめの薬研と乳鉢を具現化する。

それを手に取ると無言で手を動かす。

「それって何て言う薬草？」

「んあ？これか？アップルミントって言うハーブの一種さ。鎮静、清涼、解熱の効果を持っているんだ。本当は、ハーブティーにして

飲めばいいんだが面倒だから練り込む。」

「そんなぁ！！」

嫌な事を聞いてしまった。よりにもよって練り込まれるなんて！！

「よし。じつとしてろ。」

腹を括り、目を閉じる。ネルの手は、俺の鼻筋、そして、おでこへと動く。少し生温かいが、後からスウッとハーブの匂いが鼻に入ってくる。まあ、アップルって言うほどだから林檎の匂いかと思えばそうでもなかった。

「ほらよ。効き始めるのは少々遅いかもしれないが大丈夫だ。」

「ああ。ありがとう。」

「それと、少しは大人しくしろよ？」

「分かった。」

そう言っただけでネルの肩を借りて、そのまま歩きだす。少しネルに迷惑をかけた事を後悔している。

65話：アップルミント（後書き）

因みに本当にアップルミントと言うハーブがあります！

普通はハーブティーで頂くんですけどね^^；
塗られました（笑

66話：足留め

大分体が軽くなつた気がする。

それまで出会でくわした敵はネルが倒してくれた。いや本当、情けないわ。

「そろそろ効いて来ただろ。」

まるで時間が分かる様な言い方だ。

「ああ、お陰様です。」

「何よりだ。・・・しかし妙だな。そろそろ敵兵が増えて来ていい筈なんだが・・・」

ネルが言いたいことはわかる。さっきから敵兵が一定の人数でしか闘いにこないのだ。

それ以降ネルは口を開かず黙々と足取りを進める。

「ん、そろそろオツケー。ありがと。」

俺は今まで借りていた肩から離れる。

「あまり無理するなよ？」

はっはっはっ！

「ネル、意外と心配症なのね！」

「いや、また体調崩されたら面倒なだけだ。」

ひ、酷い言いよう。はっ！もしかこれがツンデレって奴か！？おお
く生ツンデレ。

「ニヤニヤし過ぎだ。警戒は解くなと言った筈だ。」

おやおや、もう厳しいのね。

「分かつてるって。お！レオニス国見えて来たな。」

吹雪の中、視界がやつとの事でレオニス国を捉えた。

「よし、次の合図まであの近くの岩陰で待機だ。」

もう夜なのにレオニス国は灯りが灯っていないようだ。え？なんで分かるかって？目と鼻の先にレオニス国の門があるからさ！そうさ！俺等は凄い間近でレオニス国を捉えたんだ。吹雪のせいで全然わかんなかったんだよ！

なんて心の中で呟きながら、近くの岩陰で待機する。

国とルナの予想は大当たり。東のカルマ平原は大波乱。白い雪の地面が真っ赤に染め上げられその上に眠り込むような殺された兵士達の屍。

数からして圧倒的にこちらの不利。

しかし、死守する事は出来る。リクは死を覚悟して自分の力に身を委ね、戦場へと君臨した。

「あいつ大丈夫かなあ。」

真逆の西担当のスカリオは大きなステッキを松葉杖替りにし、タケトの心配をしていた。こちら側は敵兵が一体も出てこない。雪降る空をボーッと見つめほおけている。

「ふ、副隊長様あ。もう少ししっかりして下さい！うう。」

そわそわと辺りを見回しながらスカリオに話しかけてくる兵士、マルスは何か言いたげだ。彼は今月兵士に成り立ての新入り君だ。

「んー？あー。」

曖昧な答えしか出ていない。
すると向こうから誰か緋色のマントで身を包めた人がこちらへと歩いて来ている。

「！ーやべえわ。」

少々怯えた声でボソリと呟く。

「え？ど、どういうことですか？」
イマイチ理解できていないマルス。

「敵だ！突撃！」

敵をみるや否や闇雲に突撃していく兵士達。

「馬鹿！！引き返せ！おい！！」
焦るスカリオの叫びも聞かず、雄叫びを上げながら兵士と敵との距離が近くなる。

その瞬間、突撃したマルスとスカリオ以外の兵士が止まってしまった。いや固まったと言うのが妥当だろう。

「あ、あれって！」

「ああ。ありや今回の戦争の主犯。

魔眼のアイリンだ。」

突いていたステッキを抜き担ぎ、目線をアイリンに向けている。

「って事は……」おい、新米。今直ぐ俺の言った事を女王様に伝え

る。」

マルスの話を遮り、言葉が続けるスカリオ。

「いいか？タケト達を至急呼び戻せつてな。後はお前が適当に言つとけ・・・あ、そうそう。他の方角の兵士には伝えるなつて付け加えてくれ。」

「副隊長様は！？」

「足留めに決まつてんだろ？」

冷や汗を掻きながら苦笑いで言い放つ。

「けど・・・行けつつつてんだよ。」

さつきとは違い恐ろしい威圧を放つ。マルスは腰を抜かし逃げるように女王様の元へと走つて行つた。

それとほぼ同時にアイリンと対峙する。

「・・・」

「お久しぶりですね。」

「・・・どけ屑。」

彼・・・いや、彼女の方が人称としては正しいだろう。そう。魔眼のアイリンは女性だ。例の魔眼は眼帯で封じられており直ぐは発動出来ない。

「それは無理な相談ッス。」

「どけ。」

どけの一点張り。

「それよりお城はどうなされましたか？」

下手に怒らせないよう慎重に聞く。

「・・・殻。」

「やっぱり。」

「どけ。」

また最初に戻る。

「だったら、俺を倒してからにするんだな。」

「馬鹿。」

確かに馬鹿だ。三魔称の1人相手に1人でぶつかりに行くのだから。

「それだけで俺はどかねえよ。」

「・・・」

無言を貫き通す。

早く来てくれ。

スカリオは心で願いながら、覚悟を決める。

丈人 side

数十分すると脳内で女王様の声が聞こえる。

「タケットさん！ネルオーネ。今直ぐ戻ってください！」
何か焦ってるっぽいけど何かあったのかな？

「魔眼のアイリンが西側に出没しました！」

！！西と言えばスカリオの兄貴の方じゃねえか！！

「分かりました。直ちに向かいます。」

冷静に受け答えをして立ち上がるネル。

「よりによってあいつのどこかよ。」

そう言うとき来た方角へと走り出した。

「あっ！」

俺もネルを追うように走り出す。

俺の渡したアレが役に立てばいいけど・・・

そう思いながら直向き^{ひたむ}に走った。

67話：一泡吹かせた！

丁度雪も降り止み、日差しが雲の隙間から零れ落ちてくる頃、スカリオはアイリンとの戦闘に苦戦していた。

「くっ！」

「どけ。」

アイリンの武器、大鎌をかわしつつ国への侵入を防ぐという何とも大変な役割りを果たしているが、魔眼がまだ姿を見せていない事だけが幸運だった。

「だからそれは出来ないんだって！」

そう言い魔術を唱え、後方へと仰け反らせる。先程からこのやり取りが続いている。

「なあ。何でこの国に拘こたわるんだ。」

「・・・」

スカリオの質問に目を一層見開く。

（あり？俺なんか墓穴掘った？）

スカリオから後悔の念が漂う。

「分からない？」

何故か疑問形でスカリオに問いかける。

「へ？何が？」

目を黒点にしてぼける。

「・・・」

するとまた元の無表情に戻り、一気に距離を詰める。

ガンッ！弾けず留まる鈍い音が武器同士から聞こえる。

「うおっ！いきなりかよ！ 女の子なんだから、そんな物騒のもん振り回すなよな。」

「黙れ。」

そう一喝するとそのまま大鎌を繰り出す。

「クッ！」

防戦一方だ。

また魔術を繰り出し、相手を後方へと戻らせる。

「副隊長様あ！！」

女王様に報告に行っていた少年マルスが息を切らしながら戻ってくる。

「バ、てめっなんで戻って来やがった。」

「え？ここが僕の配備の場所ですからね！」

えへへと頭を掻く。

「んなこた聞いてねえわい！！」

「ぼ、僕だって役に立てますよ！！」

弱腰になりながらも、剣を構えながら前へと出ようとする。

「邪魔だ。」

アイリンがそう言つと眼帯をしている方の目を露わにする。

「目え塞げ！」

マルスはその通りに目を塞ぐ。迅速な対応だっただろう。

「ンブッ」

ブシャアと口から血を吐くスカリオ。相手の殺気を体で感じ、ギリギリ致命傷は負わずにかわす事が出来たが、腹部に鎌が軽く入っただけらしい。

「グッ・・・あら、俺こんな弱かったっけなあ？」

斬りつけられた腹部を抑えながらその場で膝をつく。

「そろそろ・・・あれを使うとすつかね。」

そう言っていると、ポケットに入っているある物をだす。その物とはミラーグラス。

そう、サングラスにマジックミラーをつけた物だ。

かちやりと目につけ目をアイリンに向ける。

「これで、俺も少しはまともにやりあえっかねえ。」

傷の辺りを治癒術で治す。

「おい新米。術使えっか？」

まだ目を瞑っているマルスに問いかける。

「え、は、はい！」

そのまま答える。

「使えんじゃんかい。いいか？不意打ちっぽい術使えっか？」

「え？不意打ち？」

「なあに、ひと泡吹かせてやんだよ。」

「あ、あります！！」

リクエストに答えるためにあると答えるマルス。

「それじゃ、目え合わせない程度にあいつの姿追って、俺の合図で

発動させてくれ。」

「や、やってみます。」

「バァ力。やらないけないんだよ。」

そう言うときまだ完治出来ていない体を立たせ、突っ込む体制を取る。それと同時に後ろからブツブツと呟く声が気こる。恐らく詠唱をしている最中なのだろう。

それを合図替りにし、そのまま突撃する。アイリンはそれを受け止めて直ぐさま反撃をする。

「土竜^{ひぐち}!!」

スカリオはある魔術を唱える。

土の魔術、土竜は地面の土を相手に当て、そのまま土が爆発する術だ。生憎、今は雪だらけだが時間差が生じることはない筈。

案の定、直ぐに飛び出しスカリオはそのまま距離を置くため後退する。

パンツと破裂する音が聞こえたが、それは体ではなく大鎌に当たったようだ。見事に刃が半分に粉碎されていた。

「おっし！今だ!!」

その掛け声と共に、後ろのマルスに合図を送る。すると彼が一瞬間いた。刹那、アイリンの頭上から青紫の稲妻が落ちる。

「うぐ！」

彼女も直ぐは反応できなかった様で苦しそうな声をあげる。

「やったやった!!」

後ろから歓喜の声が上がっているがこれくらいでは効いていないのがスカリオは分かっていた。

その場に舞った周りの雪が下に落ちると同時に驚いた。

彼女の魔眼が開いているのだ。

スカリオのかけているグラサンの被害はないようだった。その時スカリオは「タケトの野郎！嘘つきやがった！」と心の中で零していた。

68話：予感

「あ！見た事があります！」

後ろのマルスがポンと手を叩く。

「アイリン魔眼は石化だけでは無いんですよ。確か・・・何だっけえ？」

肝心なトコを抜かし、首を傾げる。

「お前そこまで言ってかよ！！」

スカリオは大声と共にアイリンに突っ込んで行った。

タケト side

「ハアハア！今どの辺？」

俺はあのレオニス国からネルと今まで走って来た。

「今日中には着くが・・・体は平気か？」

そつと俺の肩に手を置いてきた。

「へ？ああ。大丈夫。」

いきなり聞いて来たからビックリしたぜ！

”主様。そろそろ走っては？”

ティアが俺を急かす。

「そつだな・・・ネル！行こう！」

「俺はいいがお前は行けるのか？」

嘘だろ？みたいな顔で俺を見ないで！？

「俺だつてやるときゃやるわい！」

全く！先に行かせてもらうぞ！

「うおおおお！！」

雄叫びを上げながら猛ダツシユで雪道を走り抜ける。そのまま勢いあまり転倒してしまった。

グフウ！こ、転ぶだと！？馬鹿な！！

「はぁ・・・ドジだな。」

凄じ呆れた目で俺を見る。

「う、うつせ！これでもドジには部類はされん！！」

反抗気味にネルに言い返し、そのまま起き上がり同等なスピードで走る。

明るかった空もドンドンと暗さを増していく。そんな事を思っていると人の死骸がドンドン増えてきたように感じた。おええ！！何かグロいわ！！錆びた鉄の臭いとか半端ない！！

「着いたな。」

「え？まじ？」

「耳を澄ませてみる。」

いきなり足を止め、遠くを見つめ始めたネル。言われた通り耳を澄ますと様々な雄叫びが聞こえる。と言う事は、この先でエルストリアとレオニスが戦っているのだと推測が出来る。

「あ！」

「分かったか？急ぐぞ！」

するとネルは走り始める。

・・・あれ？この距離ならシルフの言伝使えるんじゃないか？

駄目元でやってみると案の定凄いスピードで地面と平行に引っ張られた。そのまま東の門へと一直線だった。

「タケット！」

ふと何処からカリクさんの声が聞こえた。東の門についた瞬間辺りを見渡すと返り血を全身に浴びたリクさんが立っていた。彼女は走って俺に近寄って来た。

「リクさん！？凄い事になってますね？」

何と言うか何時もの綺麗で良い匂いの髪も固まった血の色をして異臭を放っていた。

「私はいんだ！それより国は！？」

肩をガシツと掴み、揺すってくる。さっきのシルフ言伝で酔いが！やめて下せえ！と言言った後に手を払い除ける。

「あ、ゴメン。」

何をしているのか気づいたのか素直に謝って来た。うん！素直な子は大好きよ！いや、オネエじゃないよ！！

「聞いてないのか！？今西側で兄貴がボスの応戦中だ！」

「な、あの変態がか！？」

ああゝやっぱ変態呼ばわりなのね？

「クツ！こつちも手一杯なのに！」

苦しそうな顔で下に視線を落とす。

「だゝからゝ！この私が行くんですよゝ！」

ドンと胸を叩いて「任せろ。」と笑顔で言い放つ。

「・・・頼む。」

ギョツと自分の服を掴み、不安な顔をする。

「大丈夫！大丈夫！ほれ！ネルもいるし！」

「俺は北に行くぞ？」

「なぬ！？」

ガシッと両肩を掴みリクさんのやった様に揺さぶる。

「ああ。北にはルナさんが「よしタケト。スカリオの加勢に行こう。」

おい！！いきなりどうしたんだよ！！

「じゃあな。精々儂く散れよ？隊長さん。」

「お前は蹴散らされる。」

もう！仲悪いんだから！！

「ほら！行くなら行こう！」

言うだけ言ってネルは風跳を使い、飛び跳ねていった。

「リクさんも気をつけてな？」

彼女の血に染まった手と俺の手を重ね無事を祈願する。

「ありがとう。」

ほんのり顔を赤らめそのまま戦線へと戻って行った。

「さて、兄貴・・・無事だよな・・・？」

何だか不自然に嫌な予感がしてきた。

68話・予感（後書き）

今年もよろしくお願いします!!

69話：去ね

到着後、俺は目を見張った。スカリオと、もう一人知らない兵士が血みどろの状態でぶっ倒れていたからだ。近づこうとした瞬間、その身体が宙を舞い、緋のマントの人間の前へと持って行かれる。

「あれが魔眼のアイリンだ。」

冷静に言い放つと、腰に収めていたダガーを取り出し、構える。

「なにしてんだよ！ テメエ！」

サッサと返しやがれ！

すると二人の身体を跳び越し、大きな鎌を構える。

” いいか？ 相手は魔眼を持っている。下手に目を合わせるな。”

「わかってらあ！」

そう言う俺とネルは同時に駆け出し、攻撃を仕掛ける。

二人掛かりだというのに難なく攻撃をかわされ、俺達を惑わす。

「やつぱ強え！ グアツ！」 具現した剣を簡単に壊されそれと同時に吹っ飛ばされた。

ヤバイ。脳震盪のうしんどうが・・

「タケト！ 変態共の処置にかかれ！」

ネルに反抗も出来なく、クラクラする身体を兄貴の方へと進める。

やっと手が触れられる程の距離まで来たが怪我は最悪。軽く身体中の肉を抉り取られ、恐ろし程の出血をしている。

兵士の方は比較的、まだ軽い方だが、所々の関節があり得ない方へと曲がっていた。

俺じゃあ・・・真面に助けられないじゃないのか？

治療を使用した腕を止め、その場に手を付く。地面の雪がまるで俺の今の心のようにじわじわと手を冷たくしていく。

”主様。主様。今こそ私目の出番にございましょう？”

・・・！！そうか！ティアがいる。こ、これなら！そう思った矢先、それをリベルに止められた。

「何でさ！」

俺の苛立ちも一層増そうとした時、その真相を突き付けられる。

”ティアが壊れる。”

はつきりと聞こえた。

「どう言う事だよ！？」

聞き返すところ答えた。

”ティアの特性は変幻と癒し。変幻には使用者にリスクが、癒しにはティアにリスクが伴う。確かに死の淵に立つものでも助けられるがその分負担がかかり過ぎる。以前、お前が幾度となくティアに負担かけたせいでそろそろ限界に近い。”

そんな事・・・知らなかった。

「だったらどうすりゃいいのさ。」

また打ち拉がれる。

そう言えばその頃あいつを助けた事があつたな・・・！！

そこで気付いた。女王様に見せてみようかと。生憎この場を離れる

訳には行かないので、全魔力を二人に注ぎ空間転移をはかる。が、女王様の間まで距離が足りない。自分の無力を思い知り、他の兵士達が気づく事を願って転移をした。

おかげで、魔術は使えなくなったが、まだ身体や想像力は働ける。そう思い、身体を立たせアイリンへと向かう。

「俺は具現士！誇り高い具現士だあああ！！」
そう自分に喝を入れ、ティアとリベルを抜き、アイリンへと突っ込む。

流石のネルも疲れているみたいだ。

「選手交代！ネルオーネに代わって具現士、丘崎 丈人が相手をいたしまあああす！！」

そう言っただけ猛攻を仕掛ける。

何とも自分でビックリした。いつも以上に身体が動いたからだ。

おお！このまま、このままだ！

自分に言い聞かせる。

すると、瞑っていた片目を開けてくる。これが石化！！

ふっ！しかし、対策は万全だ！！具現化！鏡！！

目の前に鏡を出す。が、特に進展は無く、そのまま時間が止まったようになる。

「・・・？」

「それだ。」

初めて聞く声にビックリ！女の子だったのかああ！

「その力、もつと見せる。」

無機質な声で言い放つ。

「なめやがって!!」

言い捨て、色々な角度から斬撃を無我夢中で振るう。

後ろに壁を作り、行き止まりを作る。

計算通り彼女は「しまった」という顔をして俺に目を戻す。

「去^いね!」

そう言っと、ティアで一刺しにした。

つもりだった。

70話：終戦、不幸、計画

アイリンはかわすと同時に魔眼を光らせる。

不覚にも目が合ってしまったのだ。

今の俺ならわかった。

あのアニメ、漫画、小説など中でこんなにも時がスローモーションになるときは、不幸や何かが起きる時だと。

恐らく、俺も今その中にいるのだろう。予測は当たり、相手の動きが読めるのに体が動いてくれなかった。

動け！動け！つくそ！

何度も念じてもいつものように、動いてくれと。

アイリンにはまだ能力があったようだ。それが今の状態。

地面から鋭い円錐形が形成されゆっくりと俺の身体をめがけ突っ込んでくる。

自分の能力も試すが形成されるのし時間がかかり過ぎていた。頼りのネルも、遠くにいる。なす術が無い・・・そう思うと、身体が透き通る青色の何かで覆われた。

ティアだ。

すると、スローモーションだった世界がいきなり速くなった。貫く

筈だった地面の雪を被った土はティアの前では難なく消え去った。その時の衝撃が俺に襲いかかり吹っ飛ばされる。

雪で安心した。硬い地面だったら今頃腕が折れていただろう。衝撃に耐えられなくなり、嘔吐してしまった。

「ティア、助か・・・っ・・・た。」

身を守ってくれたティアに礼を言おうとした俺は絶句。それしかなかった。

今まで守ってくれていたミーティアの刃の上半分と下半分が切り離れて、少し経つと粉々に消え去ったのだ。

「おい・・・聞こえてるか？」

震える声で、ティアに話しかける。

”主、様？足が感覚を無くしました。どうしたんで、しょうか？”

ティアも分かっていたいなかったようだ。

「あ、ああ。」

俺は「ああ。」としか言えなかった。なんて言えば傷つかなくて済むか分からなかったから。

「まずは休んでろ。」

ティアを鞘に収め、リベルを震える両手で持ち直す。

「呆氣ない。」

アイリンのその一言が俺の心を崩した。無いはずの魔力を出し、アイリンに放つ。アイリンは動じず、それを無表情で受け止める。

俺は、此処ぞとばかりに連想術を繰り出す。その風が奴に纏わり付

いている間に出した。アイリンを全方位、剣で囲む。

動けはしない。動いたら死ぬからだ。

皆に分かる言い方をすればティルズの百 繚乱という秘奥義をもつと武器を詰め込んだ感じた。

一本、一本。剣をゆっくり動かし、悲鳴を聞いて行く。

「ああああ！！」

悲痛の声が聞こえる。このこえからして、こいつにも痛いと言う感情があるみたいだ。今はどうでもいい。

5、6本程度で連想をやめる。俺の良心がまだ残っていたみたいだ。

すると、クツ！と悔しい顔をしながら姿を晦ました。

何処へ行ったか警戒するが、

「安心しろ。気配は遠退いた。」

とネルが俺に促すが、まだ現実を受け止められなかった。

” お前がすっかりしていれば。”

リベリオンの熱い怒りが俺に伝わってくる。

これも全部、俺の未熟さが招いた結果なのだろう。兄貴と兵士の負傷、ティアの粉砕。全て自分が愚かだったからだろう。

心から自分をこんなに恨んだことはなかった。

二日三日すると、戦争も治まり、レオニス国王も自分のへと戻っていった。どうやらあっちの国にもアイリンは帰っていなかったらしい。

俺は、二国を救ったヒーローと後日騒がれたが、それに対して多くの物が犠牲になった。

幸い、あの二人は無事生きていた様だ。

残りは、ティアの事だ。

今女王様から、勲章の授与をして貰っているが気が晴れない。

「タケト・オカザキの能力を奪ってこれたか？」

1人の男がアイリンに問う。

「ブッ！ゲホッゲホッ！は、はい。」

死に物狂いで帰ってきたあいりんの身体は重傷だ。

「貴様をそこまで追い詰める奴・・・フッフハハハ！・・・欲しい！アイツの能力が欲しい！！」

そう呟く男は狂った様に「欲しい。」と永遠に繰り返していた。

「アイリンなっさけねえ！」

嫌味ったらしく言う男。彼は三魔称の1人だが紹介はまた後でにしよう。

「ゲホッ！・・・五月蠅い。」

「戦場いくさばで不正はないだろうな？」

同じく三魔称の男。

「け、計画通りです。」

その答えにそうか。とだけ言つと暗闇へと消えて行つた。

「気を付けるよー？」

呑気な声で嫌味つたらしい彼は、デコピンを喰らわせると同時に消えて行つた。

この者達が恐ろしい計画を立てている事は誰も予知なんて出来るはずがなかった。

71話：光芒の中に・・・

あの戦争終了の2週間後・・・

「ヘイイイ！愛しの弟よおお！！」

スカリオの容体はすっかり良くなり、何時も通りの機嫌になっていた。

「あ、兄貴・・・良かったあ。」

俺は一つの不安が消えさりホッとした。残りの問題・・・

「ミーティア、ダイジョブなのか？」

スカリオが聞いてくる通りタケットの使用している刀、ミーティアの話だ。

ティアはレオニス国との戦争でタケットをアイリンから守り、負担に耐えきれず体に被害が行き届き、そのせい人で言う足の部分が粉碎されてしまったのだ。

「ん？ああ、説明したら「今は一人がいい」って言うから気分転換がてら、リベルと散歩。」

「そうか・・・」

「それより、あのマルスって兵士大丈夫なのか？」

マルス。スカリオと一緒にアイリンに挑んだ新米兵士だ。

「あの新米か？そりやもうバリバリ元気になってて俺も腰抜かしたぜ！へへッ！」

彼は、今勲章の授与式の真っ最中だ。確か一般兵から、騎士団に配属される話らしい。

「しっかし、あん時やビビったぜ。」

あん時とはアイリンが西側に攻めに來た時だろう。

「あの兵士達はどうなったの？」

あの突撃して石化に会った兵士達の事だ。

「あいつ等は・・・城の横の墓場に埋葬まいそうされたよ。ったく、人の話聞けって教えてたのに・・・。」

話からして、スカリオの命令を無視して突入したようだ。

「良く言えば勇猛果敢。悪く言えば支離滅裂。ま、どちらにせよ俺の役不足が招いた結果って訳さ。」
照れるように頭を掻いているが、表情からして俺と同じ悔みが見えた。

”おい、あれ。”

リベルが何かを見たようだ。よく見るとある方向に太陽柱に似た光芒が見える。

「！兄貴ごめん！用事思い出したわ！」

咎める兄貴の言葉も聞かず、走り出す。あの方角はアリエスの森。

「おいタケト！」

俺を呼ぶ方向を見るとネルオーネとその背中におぶられている女性が見える。

・・・誰？

「ネル・・・もしかして彼jy「違う。師匠だ。」
し、師匠だと！？こんなネルにベツタリしてる女性が！？」

「んゝ やっぱ弟子の背中が一番落ち着くわ。」

「師匠。まだ酔ってるんですか？」

！？ネルが敬語だと！？

「酔ってない酔ってない！至って普通〜！」

「あゝはいはい。後で吐いても知らないですよ？」

「・・・うぶっ！」

「ほら。」

・・・夫婦か！

そんな事を話していると、あっという間に森の中に入っていた。

「おおお！君がタケチ君か！なんとも女々しい名前だなあ！」

笑いながら手を振ってきてなんとも人懐っこそうな顔だった。

「え・・・いやタケトです。」

こりゃ駄目だ。

あの光芒にドンドン近づいている。

「師匠。みつともないですよ？」

「んだとお？もう師匠にそんな口聞けんのか？大層偉くなったのなあ。」

「いえ、そんな事は。」

ネルが心底嫌な顔をしているのがうかがえた。

「なあ。ええっと、ルナ師匠だけ？ネルの師匠は何時もああなのか？」

「いや、何時もはキリキリして、あの前の騎士団隊長さんをもう少しきつくした感じだ。」

・・・とんでもないほど恐ろしく感じた。
光芒はスウッと消え去り、急いでその場へと近づく。その場所はある場所だ。御神木がある場所だった。

するとそこには黒髪、黒いマフラーに黒のローブと言つ黒一色を身に纏つた女の子が尻餅をついていた。
俺等を見るや否やキツと目付きを変え睨んでくる。

「・・・氣にくわねえ。」

そう吐き捨てるとおぶっていた師匠をお構い無しに落とし、女の子相手に距離を詰めるネル。

「いったあゝい。」

呑気な声で痛みを訴えるルナ。呆れるほどだ。

「待って！」

俺が制止すると、ネルが振り向き睨んでくる。俺そんな駄目なことをした！？

「俺、心当たりがあるんだ。」

「・・・」

「頼む。少し時間をくれ。」

「・・・っち！」

渋々身を引いてくれた。

大きく息を吸い込み、体制を低くし視線を同じにし、話かける。

「君はフェンリルかい？」
・・・と。

女の子は目を丸くし、ネルは驚き、ルナはボーっとしていた。
俺は言葉を続ける。

「初めて会った時を覚えているか？君はその時みたいに黒い体だったよ？」

思い出ただけで心がホカホカして微笑ましい気持ちが出てきた。
まあ、あの時は酷く傷ついていただけ。

すると彼女の髪の色がドンドン変わっていく。
ポケットを漁り、あれを出す。

「ほら、君と食べる約束をした干し肉だよ？」
そう、干し肉だ。あの時は食べられなかったが日々努力したお陰で何とか食えるようになった。

すると、冷たい豪風が突然吹き荒れる。目を瞑り耐える。

【グルルルル・・・】
喉を鳴らす音が聞こえた。

豪風が止むと同時に目を開けると、雪の中に溶け込めるほどの白い毛並みの小さな狼が立っていた。

「やっぱりお前だったんだね。」
俺の予想は当たっていた。あの時のフェンリルだ。

「お前・・・何時の間に。」
後ろからネルが聞いて来る。

「ほらほら、おいで。一緒に干し肉食おう?。」

すると、威嚇をするように身の毛を立たせる。あ・・・そっか・・・

「肉の前に、約束。したもんな?。」

俺もリベリオンを抜く。あの時の約束か・・・。

【またやり合う事を楽しみにしておこう・・・。】

「・・・行くぞ!。」

俺はその後フェンリルとの約束を果たした。

72話：もう一つの約束。

勝敗は勿論俺の完敗。

当たり前よ！相手は精霊＋で人間が恐れる魔狼さんなんだもん。

「・・・しかし驚きだ。あの子犬が・・・。」

ネルに治療をしてもらっている間にフェンリルとの関係を話していた。

因みにフェンリルは俺と距離を置き、丸まって寝ている。

ああ右腕本気で挟られちゃったよ。結構きつかったあ・・・。

「いつつつ・・・。」

「我慢しろ。しかし、よく耐えられたな。」

「あ？ああでもないかと当てられなくてな。ま、当たんなかったけど・・・ん？ルナ師匠さん？なに右腕見てるんですか？」

「肉う・・・！」

ぬうつと顔を覗かせ、まるで獲物を狙うかのように俺の処置を施された右腕を見ている。

「いだだだだ！腕！腕！挟られああああ！」

腕に喰いかかってきた。

「こら！師匠。駄目ですよ？後で料理を用意しますから我慢してください。」

意識が飛びそうな時ネルがやっと止めに入ってくれた。た・・・助かった。

「んむう！仕方ない・・・。」

「はあ・・・道理である時変な感じがしたのか。」

「ん？変な感じ？」

「ああ、お前とフェンリルを抱えたときに変な気配が近くに漂って

な。」

「へえ・・・」

” 奴、出来るな。精霊の気配なんて並大抵の人間でも分からない。無論俺もだ。”

「まじかよ・・・リベルも無理なのか。」

「よし。治療は済ませた。後は、休んどけ。」

パンパンと尻についた草泥をほろい、草むらの中で嘔吐しているルナ師匠に駆け寄っていく。

「オベエエエエエエー！」

「つわりですか？」

なんて、俺が冗談半分で聞くと治療をしてもらった足にナイフがもの凄いスピードで突き刺さる。

「あああああ！足があああああ！」

「自業自得だ。師匠がつわりなんて「弟子に襲われた。」な！？」
なんと、そうでしたか。

「弟子ってネルだろ？やっぱり何でもないです。」

まだ言い欠けなのに爆弾の形をした爆弾・・・いや、爆弾だ。それを俺に向かって構えている。

黙るしかねえじゃん！

「師匠も冗談はやめてください。」

それだけ言つとルナ師匠をおんぶしている。

「俺は師匠戻してくるわ。」

「え？俺は？」

「自力だ。」

それだけ言つと残され、空高くに消えていった。

「・・・」

訪れる静寂。何とも居心地が悪い。やはり久しぶりに会ったからだ

ろうか。

「なあ。」

軽く声をかけるとゆっくりと顔を向ける。

「もう一つの約束。果たそうぜ?」

ポケットから再び干し肉を取り出す。

無言で近づきお座りをする。

「お!行儀いいな!・・・お手!」

すると、俺の思った通り手を出してくれた。いやあ感心物だねえええええええええ!?

うんうん頷いたのも束の間。フェンリルは俺の手を引っ掻いてきた。

それを見ると、赤くなり皮が剥けていた。

「おいおい、悪戯にも程があんじゃねえか?」

苦笑いすると、フェンリルは首を傾け「?」を浮かべる。成程・・・ワザとではない様だ。そうだな。力の加減が分からないだけだな。

「ほいよ・・・あ、待て待て一緒に食おうって・・・ああ。食っちゃった。」

ガリボリと食べる。

「よし。俺も。」

そのまま食すがやはり硬かった。

あと。

尻が冷たい。

73話：契約の締結と闇の精霊シェイド

「っふう！食った食った！どうだ？」

感想を聞くとフェンリルは一欠伸ひとあくびをして、寝むろつとする。

「おいおい。素っ気ないなあ・・・ってかそんな無口だったか？」
しかし、そんな答えにも反応しない。

・・・はあ。

すると、立ち上がり俺の方へと向かってくる。どうかしたんだろうか。

「？なんだこれ。」

よく見ると周りの雪が集まり何か板状の塊になった。

するとカリカリと削られる音がする。その部分を見ると何か文字が書かれていた。

「ん？なにに。彼の者。雪氷せつひやうの魔狼まろうに温もりと抱擁うやうやを与え命尽きるまで見捨てぬことを誓うか？」
と書かれている。

「・・・認めてくれるのか？・・・これ契約書だろ？」

契約書。精霊との主従関係を明白にするものだ。皆に分かりやすく言えば、結婚式の誓いの言葉やキスなどによく似ている。

しかし、この手の物には余り知識がない。何せ、すぐにそんな事が起きるとは思っていなかったからだ。するとフェンリルの鼻が板の下へと伸びる。その板の下に窪みくぼみがあった。何かを入れるのか？

すると、俺の親指を軽く噛み切り血を出す。

「ッ！いきなりかよ。これをつ突つ込めって？」

すると行儀よくお座りをしコクリと頷く。いきなり過ぎだぜ全く。

「よし。」

覚悟を決め、押し込む。

すると、そこから何か寒風の様な物が体を駆け巡る。

勢いが凄すぎて尻餅をついてしまった。それは途中、目の部分に止まった様で目の中がスウッとシヨボシヨボする。なんか意味が分からないな。あ、スースーするだ！

それも治まるとフェンリルがなにかとくっ付いてきた。

「おお！？どどどどうした！？」

てんばつていると、あの契約書を思い出す。

温もりと抱擁を与え命尽きるまで見捨てぬこと。と書いてあった。

そうか・・・コイツ寂しかったのか。

よくよく振り返るとなんかそんな気は何処となくするが・・・ここまで性格が変わるものなのか？

「・・・よ、よぉ～よしよし！寂しかったろ？これからは一緒にだからな～！」

と思いつ切り体を撫でまわす。それに比例するように体を懷に摺り寄せてくる。

なんか嬉しいわぁ～。

「よし。俺等も帰つか。あたたた・・・こ、腰が。」

駄目だ。腰が崩れそうだ。

そう思いながらも、フェンリルを横に連れ、エルストリアに戻ろうと歩きだした。

ネルside

「グオオオオ！」

師匠・・・凄^{いひき}い藪^なだ。

師匠に会った時はビックリした。何せ酔い潰れていたからな。ったく、今も昔も相変わらず酒と旅癖は直ってなかったみたいだ。

【フヒヒ！それにしてもお前に兄貴^{もや}いんのか。】

ふと後ろを見ると俺の後ろに黒い霧^{もや}が浮かんでいる。

「・・・またお前か。いきなり出てくんない。」

恐らく闇の精霊、シェイドだろう。この頃俺をつけ回しているようだ。気配が同じだから分かる。

【おいおい。連れねーナ。オレはお前の心の闇だつてのにヨ。】

「俺の心は俺の物だ。お前にやった覚えはない。」

【つたくよー。このオレ、シェイド様が直々に御出まししてるのにその態度かよ。】

やはり勘は当たっていた。

「俺はお前を知らない。それで終わりだ。」

【・・・兄貴を殺したいか？】

「!?!」

何を言い出すかと思えば・・・

「ああ。殺したい。家も家族も何もかも俺から奪ったあいつが憎い!?!」

本当の事だ。

【ヒヤッハッハ！いいぜエ！そうだ！それがお前の闇だ！・・・けどよお。お前にそんな力はねエ。】

「な！？」

キッパリと言い捨てる。

そんなはずはない。師匠とだってそれ目的で接触を図って修行だつてした。言つては何だが俺はそこらの具現士やら騎士団隊長やら女王やらにだって勝てる自信がある。

【自惚ほづれてんなよ？クソガキ。】
ゾクリと身の毛が立つ。

【他の奴らだってドンドン強くなつてくらア。あの具現士だってお前を置いて強くなつていかア。それなのに何だ？お前はこれ以上強くもならない。キツキツ悲惨なもんだよなア。ちよつと前に来た野郎に越されて成長もできない。とんだ負け犬野郎だ。】

好きかつて言いやがって・・・

「表でろ。その汚ねえ姿二度と拝めねえようにしなきゃな。」

【ククク・・・闇に立ち向かうか？良いねエ！それじゃア賭けようぜ？】

「賭け？」

【ああ・・・そーだなー・・・】

その条件を呑み、表へと飛び出した。

73話・契約の締結と闇の精霊シェイド（後書き）

さて、ドンドン直していきたいと思います。

74話：追憶

ネルside

【賭けの条件は・・・そうだなア。オレが勝ったら取り憑かせてもらう。んで？俺が負けたらあんたはどうしたい？キッキッキ！】

むかつく野郎だ。

「二度と目の前に出てくんない。それだけだ。」

【いいぜエ！さア殺り合おうー！】

「言われなくても！」

腰に差していたダガーを抜き、構える。

【おおっと！忘れてた。ハンデをつけなきゃなア？ハンデだと？】

「俺を馬鹿にしてるのか？」

【あア。そうしねエとオレに攻撃当たらねエもん。】
平然と俺の周りを回ってきやがる。

「そんなものいらん。」

【そうかい。んじゃさつさと・・・殺られな！】
それと同時に靄がドンドン分裂し、幾つもの靄になり、多方向から襲い来る。

「ふん！小賢しい！コイツだー！」

そう言いある方向の靄に刃を突き立てるが、それは俺をすり抜けそのまま俺に攻撃してくる。

「つちい！」

ちょこまかとめんどくさい。

【キツヒツヒツヒ！どこ狙ってんだよバァッ！ッカ！ヘッヘッヘ！】
と思い切り言われる。

「黙れ！」

俺は瞬撃を喰らわす。

【ヘエ！瞬撃モーメントか。いいの持ってんじゃなかよオ！けどな・・・】
アイツにとっては瞬撃はモーメントと言らしい。いや、今はそんなことどうでもいい。
すると、分裂した靄が1つに集まり元に戻る。

【これならどうだ？】

その言葉と共に俺の影が少し広がるとそのまま止まってしまった。
何をしたんだ？

体に害はないな・・・

【キツキツキ！そんなに警戒しなくていいぜエ？これでお前の負けは確定したア。】

「ふざけやがって！！！」

俺は動こうとしたが体が動かない。

しまったこれは・・・

【おお！？気付いたかア？そう、お察しの通り「影縫ソーイングい」だ。な？
これでお前の負けだ。】

影縫い。

闇の上級魔術。その名の通り影を縫われ動けなくする技だ。俺はこれを見るのは事実上初めて。何せその前に潰してきたし、使える人間がほぼ0に等しかったからだ。

「つく！」

【諦めて、オレに体を渡せ。】

恐らく笑っているのだろう。顔は見えないが声が笑っている。

「そこまで俺は落ちぶれてない。」

【ほオ。そこまでオレを嫌うか。ますます気に入った！このままた畳み掛けてやる！】

その言葉の後に俺の意識が遠退く。

「父さん？母さん？何処？」

暗闇に佇む昔の俺が見える。

これは・・・

トテトテと歩き出し、俺もそれに連れて歩き出す。

やはりか・・・

俺は目を子供の前に倒れている大人2人に向ける。あれは俺の両親だ。

そして・・・

「に、兄さん？」

その屍の前に立ち尽くしているのは俺の兄。血のついた鉞をもっている。

次の瞬間、俺にゴメンなと言う言葉と大金残して消えやがった。

「・・・はっ！」

目を開けると曇り空と白い粒が降ってくる・・・雪か。

【お！起きやがったか！キキキッ！やっぱ弱エ。オレの想像通りだア。いや、それ以下だったかなア？】

この言動からして俺は負けたようだ。俺は起き上がりシェイドを見る。

【賭け勝ったから約束な？】

すると、靄が一つに集まり一枚の板になった。

そこには文字が刻まれていた。恐らく契約書だろう。

「彼の者よ、闇に身を委ね、怒、哀、非を糧とするか？」
と書かれている。

無言で親指を噛み切り窪みに嵌める。

賭けに負けた俺は何も抵抗はしない。下手に助けを乞う真似は俺のプライドが許さなかった。

「これでいいだろう。」

【フシシッ！ああ！完璧だ！これでお前に力を与えよう！ま、代償として身体に住ませてもらうけどな。】

不気味に笑い、目の中に靄が入ってくる。黒い何かが身体に絡まっている感覚を覚えた。

これで契約が締結したようだ。

【これでお前はオレと一心同体。呼べば助けてやんよ。ケケケ・・・】

すると、あの絡むような何かは消え去り静寂だけが俺とその周りに残った。

74話：追憶（後書き）

いかなり何話が飛ばしていたので修正しました。
すみません。

75話：希望の光

タケトside

皆さんどうも丈人です！

只今女王様と面会中です。え？なんでかって？どっかの噂嗅ぎつけてフェンリルと契約交わしたことが分かれまして、おっさんとリクさん達に捕まりました。恐らくこの二人は女王様に頼まれたのでしょう。

「それで？タケトさんはあの時の子犬がフェンリルであつたと？」

「そうっす。おい、んなくっ付くなつてえ！」

そのままにしているから当然フェンリルはひっ付いて来る訳で身動きが上手くとれない。軽く頭を掻きまわすと逆にもっと強く擦り付けてくる。

「そんなにえらい懐くものなの？」

とリクさんが聞いてくる。

「さあ？俺もわかんね。なんなら触ってみる？」

俺はフェンリルを抱っこするとリクさんの方へと向ける。

「い、いや！遠慮しておく。」

「ガッハツハ！んなら俺が触んよ！」

豪快に笑い近づいてくる。すると、

【グルルルル・・・】

と喉を鳴らし威嚇する。

「おおっと！こりやダメみたいだな。」

「手厳しい」と頭を掻きながら元の位置に戻る。

「ごめんなおっさん。おいおいどうしたんだよ。あれは優しいおっ

さんなんだぞ？」

頭を撫でると気付いた。震えているのだ。今まで多くの人間たちに翻弄され続け、身も心も人間に対する恐怖で支配されているのだから。

「コホン。話を戻しますよ？フェンリルとどこまで進みましたか？」

「は！？」

ななな何を言っているんだろうか？え？何？何で皆俺をガン見しているの？公開処刑？

「あ、べ、別に変な意味じゃないですよ？」

女王様が手を遽しく振って完全否定あわたたをしている。

「あ・・・そうなんですか。」

ビックリしたぜえゝいきなりだもんな・・・

「デガルド。もしかして・・・」

「恐らく。」

？なんだ？

「坊主。精霊との契約後を知っているか？」

「・・・知らん。」

何だそれ。

すると案の定みたいな顔をして俺を見る。

「契約後は主従関係におかれる。つまりお前が主、フェンリルが従者。この関係で察したろうが、コイツはお前に力を貸してくれる。

ただな？その力に頼り過ぎてそのまま全て身を委ねてしまうと結果、お前は身を滅ぼすんだよ。特にフェンリルとかの希少種だと尚更・・・な。」

俺はそれを無言で聞くしかできなかった。

「ま、それは普通は無いんだけどな。ただ、力を手に入れると人はどうしても頼ってしまう。女王はお前が心配なんだよ。」

女王様を見ると、顔を真っ赤にして下を俯いていた。無理もないだろう。あんなにストリートに言われたら恥ずかしいって。しかし、知っておいて良かった。確かにまだ知識がない俺にとっては知っておけば損は無い。

「要はなるべく自分で解決しろってことだろ？大丈夫。そんな頼ることないだろうし。」

俺はただコイツを救いたかっただけだ。ただ独りにしたくなかっただけだ。そう。それだけ。そんなに力を借りる事もないだろう。

「そうか。それならいいんだが・・・」

その後軽い話を聞き、解散となった。

「さてと。ティアも落ち着いたかな？」
ふと思った。

【クウーン。】
弱く吠えると歩く俺を見上げている。

「ん？どした？」
何かあったんだろうか？

すると見る見る体を小さくする。伸縮自在だ！？などと馬鹿な事を思っている暇ではない。ああ・・・分かった。

「おいで。」

そう言くと小さな体で懷に飛び込んで来る。

やっぱりか。抱っこして欲しかったんだな。

” 甘いな。 ”

リベルが「フン」と鼻を鳴らしズバツと切り捨てる。

「そう言っとなって。なんならお前も抱っこs」断る。 ”

抱っこしてやるのか？と聞く前に拒否されました。酷い！！

「ただいま。」

家に戻ると、ティアが” お帰りなさい。 ” と伝えてくる。

「どうだ？だいぶ落ち着いたか？」

” はい。心配をおかけしました。 ”

全くだ。と言う訳も無く「大丈夫ならいい。」とだけ言っておく。

” あら、その子は・・・ ”

「ああ。フェンリルだよ。」

” そうですか。良かったですね。 ”

するとフェンリルが少女の姿の戻り走り回る。俺はそこで気がついた。髪の色が少し薄れているのだ。

「なんでだろうな・・・。」

と言うか、あの格好は疲れないのだろうか。ローブなんてガボガボで今にも躓^{つまづ}きそうだ。

俺の所に戻ってきて抱きついてくる。いやぁ・・・幸せっちゃ幸せだがなんかこう・・・小っ恥^ちずかしい。」

「タケト。居るか？」

この声はネルだろう。

「ん？居るぞ？」

入ると、「よ。」と言ってソファに腰をかける。

「何か用か？」

俺が聞くと不気味な声をする。

【キツキツキ！こいつが具現士タケトかア。凡々そんな面だア。】
「誰だ！？」

目の前には黒い靄が浮かんでいる。フェンリルはお構い無しにバタバタと足を振り俺の懷で楽しんでいるみたいだ。

【オレ？オレア、シェイド様だ。】

「俺の精霊だ・・・一応。」

「い、一応・・・？」

一応とはどういうことだろうか？

「それより、話があつてな。ティアの件についてなんだが・・・」
「ティアの？」

【そうそう！】

「お前は下がってる。」

【ツチ。】

すると靄がスウッと消える。

「話を戻すぞ？もしかしたら直るかもしれないんだ。」

「！！！」

” 本当か！？ ”

俺が言葉を発するよりもリベルの方が先に声を発した。ま、声ではないけど。しかも、それは俺以外聞こえねえし。

「本当か！？」

「ああ。俺の師匠なら何か知っているかもしれないね。」

その後も詳しく話してくれ、今すぐ師匠のルナの家へ行こうと言うことになった。幸い俺の仕事も今日は休日。丁度いいタイミングだった。

「フェンリルも行くか？」

そう聞くと、子犬の姿に化ける。行く気満々の様だ。ティアも腰に差し、行く準備も完璧にし、家を後にした。

75話：希望の光（後書き）

はっはっ！

何とも初歩的なミスをしてしまいました。

そう。タイトルがかぶってしまいましたので、修正。すみません。

76話：テントって大きさ最大どの位だろう？

「ここだ。」

そう言つて立ち止ると家・・・と言つよりテントだな。

「師匠が放浪好きなのは知ってんだろ？だから住んでた家売り払つてテント1つで生活つてわけだ。」

やれやれと軽く手をふつと上げたため息をつく。

「ん？ネルオーネ。居んのか？」

「起きましたか師匠。」

「ああ。おはよ。」

「お久しぶりです。」

「？ああ。具現士の。久しぶり。」

・・・？マーク出された。少しショック。

「おおつと。まだあつしの名前がまだだったかな。あつしは、ルナ。ネルオーネの師匠をやつてる。いや、やっていたが正当な答えかな。」

「あ、よろしくお願いします。」

しかし、一人称があつしとはとは驚いたな。

「師匠。今日はコイツの挨拶のために来たわけではありません。」

「おお？そうなのか？それで用は？」

目を点にして俺の顔を見る。

「これについてなんですが・・・。」

ネルが申し訳なさそうにティアを手渡す。

「あゝ、ミーティアか。元気だったか？」

ティアを手に取ると優しく語りかけている。

「いや、それが・・・」

俺とネルは刃が折れたこと、そしてその原因を包み隠さず話した。

「成程な・・・。それで直してやりたいって話なわけか・・・まあ、方法がない訳ではないな。」

「本当ですか！？どうすればいいんですか！？」
「やった！これで直せる！！」

「その前に。幾つか質問がある。」

真剣な顔つきで俺を見る

「具現士に精霊はいるか？」

「はい・・・一応。」

「そうか。耐久力はあるか？」

「・・・それなりに。」

ネルやリクさん、おっさん達に扱しかれたからな。それなりに体力とかはついていると思う。しかしそれがどうかしたのだろうか？

「・・・なら大丈夫かもしれないな。」

なんだか意味深な発言だ。

「これから君にはある山に行ってもらおう。」

「や・・・山？」

山ってあの山だろ？マウンテンだろ？

「ああそうだ。そこに世界一の鍛冶職人と呼ばれる爺さんがいる。」

その人にミィティアを渡してくれ。そうすれば直してくれる筈だ。」
そう話すとルナさんは近くにあるバッグを漁り始めた。何かを探しているみたいだ。

「あつたあつた。あの爺さん頑固だからこついつの見せとかないと信じてくれないからな。」

「あ、ありがとうございます。」

「さつてと。あつしも旅の準備しなくてはな。山は北をずっと行けば見えてくる。」

すると、俺等をテントから追い払いテントを畳む作業に移っていた。

「・・・で。どうするんだ？今すぐに旅立つか？」

「え？・・・いやぁ・・・もう少しして準備整えたりしたらな。」

「だろうな。このまま行っても野垂れ死ぬただけだもんな。」

そう言つて笑う。まあそうだけどさ・・・

”俺も同感だ。”

「酷い事しかいわねえよな！！お前！俺なんかした！？」

何だかこの頃リベルが俺に冷たい。

「もし迷っているなら早めに出たほうがためだ。」

「？どうしてさ。」

「この時期になると、北の方が荒れ始めんだ。」

「まじかよ・・・」

嘘だろ・・・？俺、いきなり行く気が失せてきたよ・・・。

77話：出発進行

2日立つ頃。

俺は何時しか救助をしたお爺さんの家にいる。

北門の近くに家があるから寄ってから出発しようと考えたのだ。

「お、爺さん元気？」

「ああ。久しぶりだの。あんたは相変わらずだのい。」

「そ言うなつて！俺もう少し経ったら、北にある山行くんだ。」

「ほほう。あの山か。なら1つ頼み事を聞いてもらおうかの。」

ケツケツケと笑い俺にある物を渡す。

「なんだこの小包。」

奇麗に包まれた硬い物を渡されたんだが何か四角っぽい形だ。

「そりゃ、言えなんだがな？それを山行く途中にある村に持ってつて欲しいんだ。その村長がわしの竹馬の友でな？少し昔に頼まれた物がその中に入っているんだ・・・おおそうだ。それを落としちゃならんぞ？それでの、あいつは昔から・・・」

これからペラペラとマシンガントークをするかのようなスピードで、何十分と爺さんと村長の話を聞かされた。ハッキリ言って同じことの繰り返しに感じた。

仲良し 喧嘩した 仲直り 色恋沙汰 同じ好きな人 喧嘩

と永遠にループしていて耳にタコができそうになった。

「お、そろそろ行くわ。」

「どっこいしょ。」と最低限の物を詰めたリュックを背負い、小包

をその中に入れる。

「そうか。気をつけてな？あの村は・・・」だー！何回も聞いたって！廃村状態で善からぬ輩ばっかいんだろ？分かってるって。」

そう。何時の頃か、その村は激しい戦争の激戦地の中心となつてしまい、前のエルストリア以上の崩壊状態になつていらしい。その後も他の国からの援助もされなくなり忘れられた村として放置状態にされているのだ。ハッキリ言つてしまえば、エルストリアにも少し失望した。まあ、こつちが先決なのは分からない訳ではないが。

「分かつてるなら良いが、あまり首を突っ込むなよ？群がつて金品取られてお終いだからな。」

「わかった。ありがと。何か土産でも取つてくつからよ。」

「なんも無いと思うんだがのう。」

それだけ残して爺さんの家を後にした。

「来たか。」

北門にネルがいた。

「なんだあ？心配して来てくれたのか？」

「それも兼ねだが、餞別だ。持つてけ。」

ポケットから黒紫に光る石を渡された。何だこれ。

「それは危光石だ。ま、名前がありきたりだが旅の必需品だ。コイツが危機を知らせてくれる。ま、警戒を解かない事が一番だがな？お前は恐らく無理だろう。」

ふつと鼻で笑われた。

「どうもこいつも俺をお馬鹿みたいにさ、そりや確かに俺はこいつ等と全く違う環境で育ったし？こういうところは欠けているだろう

けどさ・・・

「俺だつてやるときゃやるつて。有難く受け取っておくけどさ。」

「ほらよ。死報だけは聞かせてくれるなよ？」

頭をワシヤワシヤと？き回され髪がバラバラに乱れる。

「大丈夫だつて。じゃ！」

グツと親指を突き出しアピールし歩き出す。

「その元気が仇とならなければいいんだが・・・」

などと嘆いているのにも脇目も振らずエルストリアを後にした。

”しかし、ネルオーネの言った通り雲行きが怪しくなりそうだ。”

リベルが言う。

「確かに雲が何時もより黒くは見える・・・て、リベル達ここら詳しいの？」

”いえ。全く。”

「さいですか・・・。」

困った。これは恐ろしい事になりそうな予感だ。

数時間歩くと猛吹雪。

「ぐおおおお・・・そろそろ暗いしここで泊ろつか。」

そう言つて小さな小屋を具現化する。

うんうん。結構慣れてきたな。

「暖炉 暖炉」

”そんなのに頼らなくても俺が・・・”

「だつてリベルに頼んだらまた火達磨じゃん。」

あんなのにまたなりたいわけない。

【ガウ！！】

おおっと！フェンリルを忘れていたわ。

「ごめんごめん。ちょっと考え事しててな。」
体を撫でると、雪が力チ力チになっており激しく冷たい。

” 言ったはず。俺はお前に力を貸すと。 ”

「・・・本当にできる？」

” 俺をあまり見縊^{みくひ}らないで貰おうか。逆に崇める。 ”

「考えときますよ。」

【ブルルルル・・・】

ぶあ！！かけて来やがった！

「冷た！！ぶあふ！！り、リベル頼む。」

” 最初から頼っておけ。 ”

すると、ドンドンと内側から温くなるのが分かった。

「ありがとよ・・・ん？そっぴゃあ、ティアは俺に力の貸し過ぎで壊れたんだよね？」

しまった！ストレートに聞きすぎたか！？

” まあ、そうですね。 ”

「だったらなんで、リベルは壊れてないんだ？」

そう思わないか？

” それはですね。私の方が年上だからですよ。 ”

「・・・？」

” 魔剣リベリオンは聖剣ミーティア、私の事ですね。よりも後に造られたものなんですよ。 ”

だったらどうなのだろうか？

” 要は俺たちにも人間みたいに年齢とかがあるって事。 ”

「って事は・・・」

” はい。体の衰えて壊れてしまったみたいです。 ”

「じゃありベルももう少しすれば壊れるのか？」

” まあな。 ”

そっか。

「そろそろいいぞ。温まってきたし。フェンリルの体温かいし。」

”・・・わかった。”

どうやら察してくれたようだ。

何とも頭のキレる刀何だろうか。

と心の中で呟きながらフェンリルに抱きつく。

やっぱり温かいや。

78話：村への警戒

一夜明けると吹雪も治まりサンサンと太陽が白い雪を照りつけている・・・と言っても雪が窓にへばり付いていて全然見えなかったが。

「ホオッ！」

変な掛け声でドアを開けようとするが開かない。やってしまった・・・
・なんで内側から開くようにしなかったんだよ！！

【??】

フェンリルもぼやけた顔でドアを引つ掻くが、開かないのに疑問を思ったようだ。何とも微笑ましかったが。

「仕方ないか・・・」

想像した小屋を消す想像を重ね、何もなかったかのように立ち尽くす。しかし、ビツクリ。小屋があった所を取り囲むように白い壁が立ちふさがっていた。

「・・・どっちから来たっけ？」

” お前の右側だ。”

「そっか！あんがと。」

さすがリベルだ。

けどどうしたらいいかねえ・・・

【・・・】

俺の前に立ち目を輝かせている。

「・・・何か考えがあるのか？」

するとコクコクと頭を振る。

「それじゃあ、任せた。」

すると何度も周りを駆け回り、俺を雪の壁まで追いやった。次の瞬

間。さっきまでの小柄で可愛い狼・・・いや、狼は可愛いから分からないけど。それは姿を変え巨大な化物のように、鋭い目つきに大きな鉤爪を晒す。

何時もとは違う野太すぎる声。

「すっげえ・・・」

呆然とする一方だった。

体を屈める。

「乗れって事か。」

その意の通り、背中によじ登る。フカフカしていてそれでいて絡まっ
つていない毛並みがとても気持ちいい。

そこから見えた雪の景色は凄かった。雪が平行線のように続いていたんだ。

「よし！出発！！」

その声と共に歩きだす。

「ふう・・・一応危機は去った・・・？危機だったならなんでコイツは鳴らなかったんだ？不良品とか！？」

そう思い危光石を振ってみるが何の意味も無い。そりゃそうだ。これで箱みたいにかコカコ鳴ったら本当におかしいもんな。

1、2時間経った頃。

【グルルル・・・】

と喉を鳴らしながらフェンリルが俺の方を見る。

「どうした？」

前の方を見ると微^{かす}かではあるが何か建物の様なものがちらほらと見

え、その中にウジャウジャと動いているのが見える。

「お？あれが例の村か？」

およその予測をつけ自問する。

「おし、こっからは歩いて行くか。」

このままフェンリルで行って驚かれても嫌だし、目立つのも嫌だから雪の壁を徒歩で移動する事を決めた。

すると再度背を屈め俺を降ろしてくれるフェンリル。

「ありがと。もう少し手伝ってくれる？」

すると、体が小さくなり頭をコクコクと動かしてくれた。

「よし！！頑張るぞ！！」

パアンと顔を叩き喝を入れ手を忙しく動かす。

「手がぁ・・・」

ほんの数分も経たない内に手が悴^{かし}み動かなくなる。下手をしたら凍傷してしまう可能性もあったので動きを止め白い息で温める。にしても・・・

「お前はよく動くなぁ・・・」

隣でフェンリルが両手をフル回転させ、ドバドバと村への道を作っていく。しかも笑顔だ。楽しいのだろうか。

”軟弱者。”

「うつせ。」

全く。俺は人間だつての。

魔術も、使った所で意味を成さない。風跳だつて飛距離が決まっている。

「掘るしかないか・・・」

覚悟を決め新しく手袋を具現化し掘り進める事にした。

どの位かかったのか定かではないが雪のトンネルみたいになり一直線に通り道が出来た。そして・・・

ボフッ！！

掘り終わると薄水色のトンネルから村の門の様な所が見える。というか手前だ。

「ふいっ！！疲れたっ！！」

汗を拭うが、俺よりもフェンリルの方が頑張っていただろう。「偉い偉い。」と頭を撫でるとはにかなだ。うん。本当にいい子だ。

「ちゃんとそのまんまだぞ？」

下手にフェンリルの姿に戻れたら困るからな。

すると、服の裾を引っ張って警戒心を持ち始める。まあ、まだ慣れてないからな。といっても俺も警戒しまくりだけど。

そのまま門を潜り、その村の光景を目の当たりにする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9809w/>

空想大好き具現士様！！

2012年1月14日15時48分発行